秋田市

下夕野遺跡

秋田市都市開発部
1979・　秋田市教育委員会

序

秋田市の新しい都心として発展している山王地区は、国、県、市等の官公庁をはじめ、経済団体や商社事務所等の建物が建ち、秋田市の中心地のみでなく県都の政治や、経済あるいは文化の中心ともなっている。

こうした官公庁の伸展はその周辺一帯の農地も漸時、都市化しつつある。このため、秋田市においては、昭和44年度より国関係官公庁の西側約83ヘクタールを山王第二地区土地区画整理事業として、都市生活上必要とする生活基盤施設の整備に着手したしたのである。

事業は地元関係住民の協力もあって比較的順調に進捗したが、昭和52年に至って区域内の川尻大川町内地内（旧字川尻下タ野）約5,000㎡の範囲から古代末～中世のものと判定される遺跡が発見されたのである。

この旧下タ野地内の地形は周辺地盤より少し高い畑地であったため、道路整備に当り切土をしたところ、その法面に遺構が見られたものである。

秋田市が施行した土地区画整理事業の区域内からこうした広範囲のしかも数多くの埋蔵文化財が検出されたのは、はじめてのことである。それらは中世における集落跡と推定されるのであるが、新しい町をつくるに当って、こうした先人の生活の場が発見されたということは、人類の生活の変遷と歴史について深く考えさせられるものがある。本遺跡はその旧地名をとり、「下タ野遺跡」としたが、これの発掘調査並びに整理や報告書作成に当っては、秋田市教育委員会社会教育課の全面的ご協力をいただいた。報告書の刊行に当り深く感謝の意を表するものである。

昭和54年11月1日

秋田市都市開発部長

三　浦　清　志

例　　言

1. 本書は秋田市川尻字下タ野に所在する「下タ野遺跡」の埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査の実施、出土遺物および実測図、写真等の整理は秋田市教育委員会および秋田城跡発掘調査事務所が行なった。
   (1) 遺構の略号は次のとおりとした。
   ＳＢ―建物跡　　ＳＤ―溝跡　　ＳＥ―井戸跡
   ＳＫ―土　拡　　ＳＸ―竪穴状遺構
   (2) 地形については県立博物館、渡辺　晟学芸主事に助言をいただいた。
   (3) 中世陶器・磁器については元秋田考古学協会代表理事・故小野正人氏、石川県立郷土資料館・吉岡康暢氏に助言をいただいた。
3. 本書の原稿執筆・編集は秋田城跡発掘調査事務所が行なった。
   原稿執筆者　（五十音順）
   石郷岡誠一　　小松　正夫　　菅原　俊行　　西谷　　隆
   日野　　久　　安田　忠市　　西鳥羽礼子
4. 発掘調査による出土遺物・実測図・写真・その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。
5. 発掘調査に際し、以下の方々にご協力をいただいた。
   秋田大学　　谷口　友宏　　佐藤　俊幸　　熊谷　恭子　　藤沢　　昌
   安田　幸子　　森元　文子
   県立農業短大　　進藤　　司
   金足農業高校　　草階　耕悦　　佐藤　　満　　伊藤　孝博　　佐々木　均
   浜田　　勉　　小松　義己　　石郷岡孝喜　　渡辺　里美　　石坂　伸子
   大友　幹雄
   秋田高校　　本間　　宏
   秋田南高校　　佐々木　満
   秋田工業高校　　嵯峨　　靖
   五十嵐　芳郎　　（敬称略）

目　　次

序

例　言

Ⅰ　遺跡の位置と地形……2

Ⅱ　調査に至るまでの経過……3

Ⅲ　調 査 経 過……3

Ⅵ　検 出 遺 構……7

1. 建　物　跡……7

2. 井　戸　跡……20

3. 溝 状 遺 構……30

4. 土　　坑……41

5. その他の遺構……42

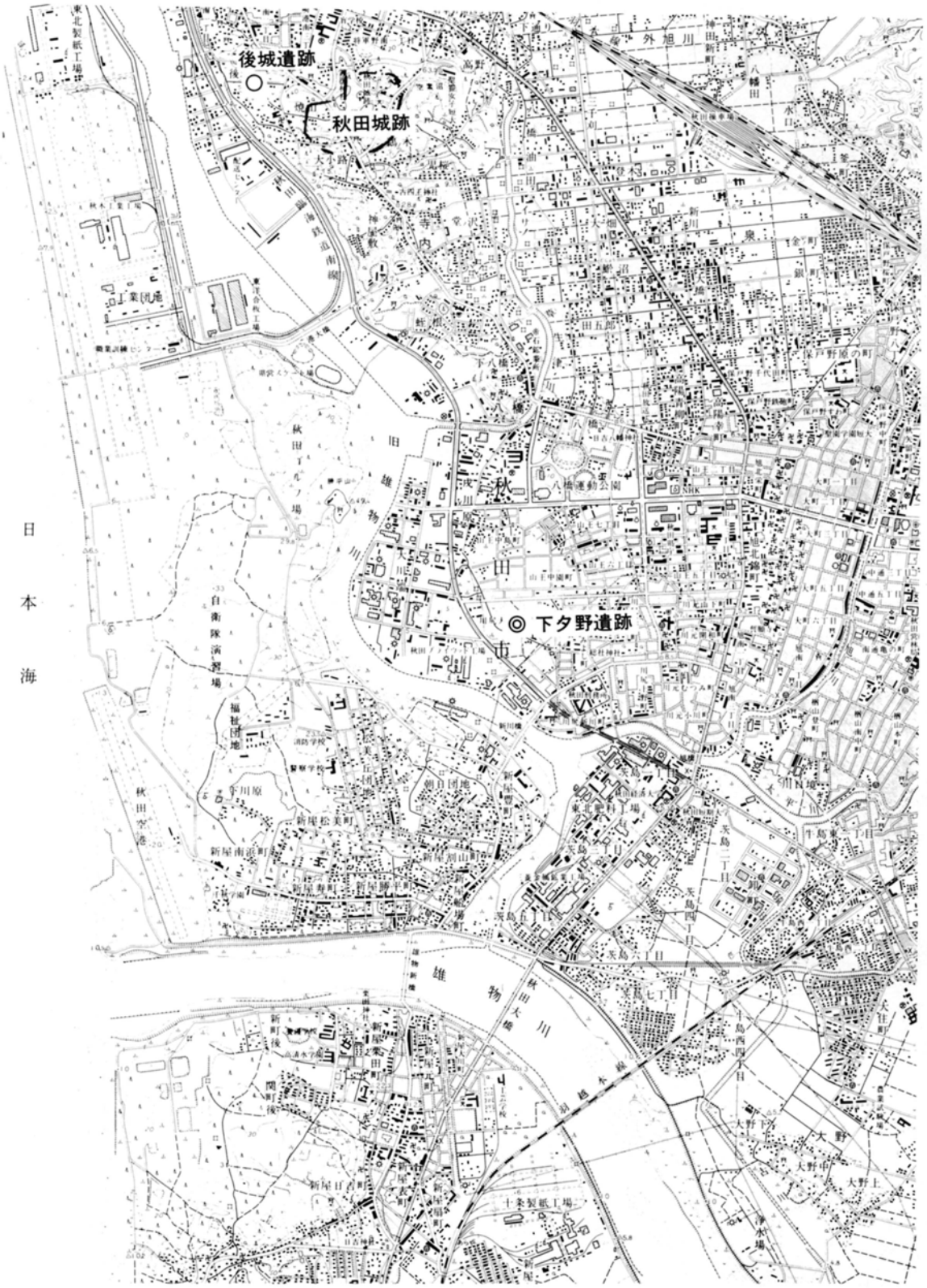
Ⅴ　遺　　物……43

1. 土　　器……43

2. その他の出土遺物……49

3. 木 製 品……51

Ⅵ　ま　と　め……58



第1図　位　置　図　　○後城遺跡　凸秋田城跡　◎下夕野遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と地形

遺跡は秋田市川尻字下タ野にあり、市街地の西、秋田駅より直線距離にして約3.5㎞、さらに遺跡の西を旧雄物川が流れ、南0.7㎞の地点で旭川と合流している。

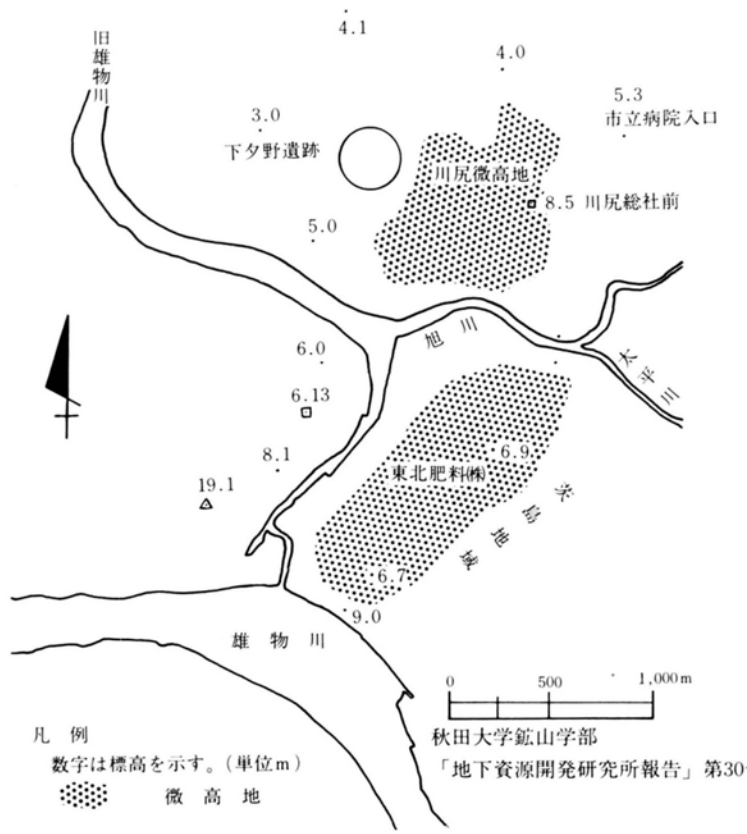
遺跡のある一帯は標高約5ｍ前後の丘陵で、川尻微高地と呼ばれ、旧雄物川岸に添って、かって「八橋油田」といわれた地域である。

市街地域には、地形的にみて5カ所の微高地がある（旭川西側、久保田町、保健所、川尻、八橋）といわれ、旭川西側をのぞき、比較的浅いところに第三紀層面があり、最低位の段丘といわれている。

この地域は、久保田町、保健所微高地域と同様、砂礫層を主体とする段丘堆積層によって構成されて、特に地表部に砂礫層が発達し、川尻地域は全般的に水質が良く、浅層部の砂礫層が良質の地下水の滞水層となっているためである。

〔参考文献〕

秋田市街地域の地形、および第四系について　狩野豊太郎　「地下資源開発研究所報告」第30号
秋田大学鉱山学部　　昭和39年３月



Ⅱ　調査に至るまでの経過

昭和51年、秋田市川尻字下タ野を含む、秋田市山王第二地区土地区画整理事業、整地の際、道路際に遺構（掘込み）と予想されるものが発見されていた。この時点では遺跡の存在、遺構等が明確でなかったため、事業を始める際は社会教育課へ連絡をしてもらう旨、話をした。

昭和52年４月、区画整理課より業者と事業契約を締結し現場にブルドーザを入れるので立合ってほしいとの連絡があったことから社会教育課文化財担当職員が現場で立合い、運転者に表土（30～40㎝）のみを剥ぐよう指示した。表土を剥いでいく段階で遺構と考えられる掘込み（直径20～150㎝）が発見され、遺物も出土しているのでこのレベルでブルドーザをストップしてもらった。

25日、午前中、市区画整理課において区画整理課、社会教育課、県文化課の担当職員および業者を交えて、今後の作業について協議し、この結果、現場の作業を一時中止することとし、遺跡の存在が確認されたので、発掘調査を実施することにした。

Ⅲ　調　査　経　過

区画整理に伴ない、遺跡を３分する道路が南北に２本通ることから、東側の区画よりＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区と呼び、発掘調査を開始した。

昭和52年６月13日　　調査開始

昭和52年11月16日　　調査終了

ブルドーザーで表土除去後、ローム面では溝と井戸跡、土坑等の遺構は確認されていたが、ローム面（堅いローム）を約５～10㎝掘り下げた段階でほとんどの建物跡を検出した。井戸の数が多かったため調査日数を要した。

６月13日～31日　グリッド設定（12m×12m）Ｃ地区表土除去作業及び遺構検出作業。

７月１日～　　Ｃ地区調査開始

７月２日～14日　Ｂ地区表土除去作業及び遺構検出作業。

７月５日～８日　Ｃ地区全体図、平板測図（$S=\frac{1}{100}$）

７月６日　文化庁　阿部調査官、市財政部長、次長、都市開発部次長、来跡。

７月14日　Ｂ地区全体図、平板測図（$S=\frac{1}{100}$）

７月23日～　Ｂ地区調査開始、Ａ地区表土除去作業及び遺構検出作業。

７月30日　県文化課　富樫氏　北海道大学　文学部助教授　林氏　来跡。

８月６日　Ａ地区全体図、平板測図（$S=\frac{1}{100}$）

８月11日　Ａ地区調査開始。

９月30日　航空写真撮影

10月16日　Ａ地区調査終了。

11月14日　Ｂ地区調査終了。

11月16日　Ｃ地区調査終了。

第２図　下夕野遺跡検出遺構図

0
5
10m

0
5
10m

0
5
10m

Ⅳ 検 出 遺 構

1. 建 物 跡

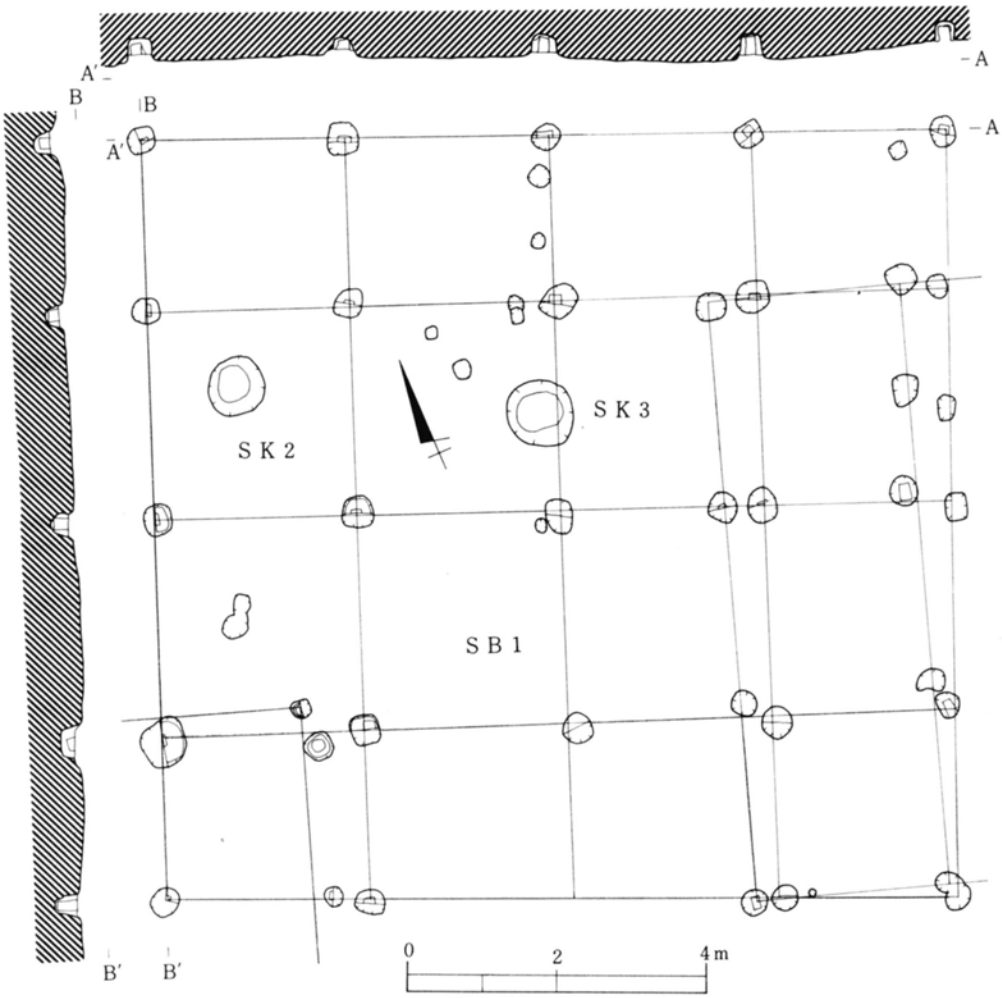
検出された建物跡は41棟で、すべて掘立柱によるものである。掘方は径20～50㎝程の円形で柱痕跡は角柱が多い。調査区中央には東西に走る数本の細い溝が検出されているが、建物跡はその南・北側に配置されている。しかし建物方位についてはあまり画一性はないようである。

SB 1（第6図）

4間×4間の東西棟建物である。総柱建であるが北、南の両柱間は巾がわずかに狭い。柱は角柱である。

SB 2（第7図　図版3）

2間×4間の南北棟建物である。総柱であるが北、南の一間は巾がわずかに狭い。柱は角柱である。



第6図　SB1建物跡

SB（第８図・図版４）

１間×２間の東西棟建物である。柱は角柱である。

SB４（第９図・図版・４）

２間×２間の建物である。柱は角柱である。

SB５（第10図・図版４）

１間×４間の南北棟建物である。柱は角柱である。

SB６第７図・図版３）

２間×３間の東西棟建物である。柱は角柱である。

SB７（第11図・図版４）

３間×３間の総柱建物である。柱位置が少しズレて建物全体が平行四辺形を呈する。角柱である。

SB８（第12図・図版４）

３間×３間の総柱建物である。東西に長い。柱は角柱である。

SB９（第13図・図版５）

２間×２間の南北棟建物である。柱は角柱である。

SB10（第14図・図版５）

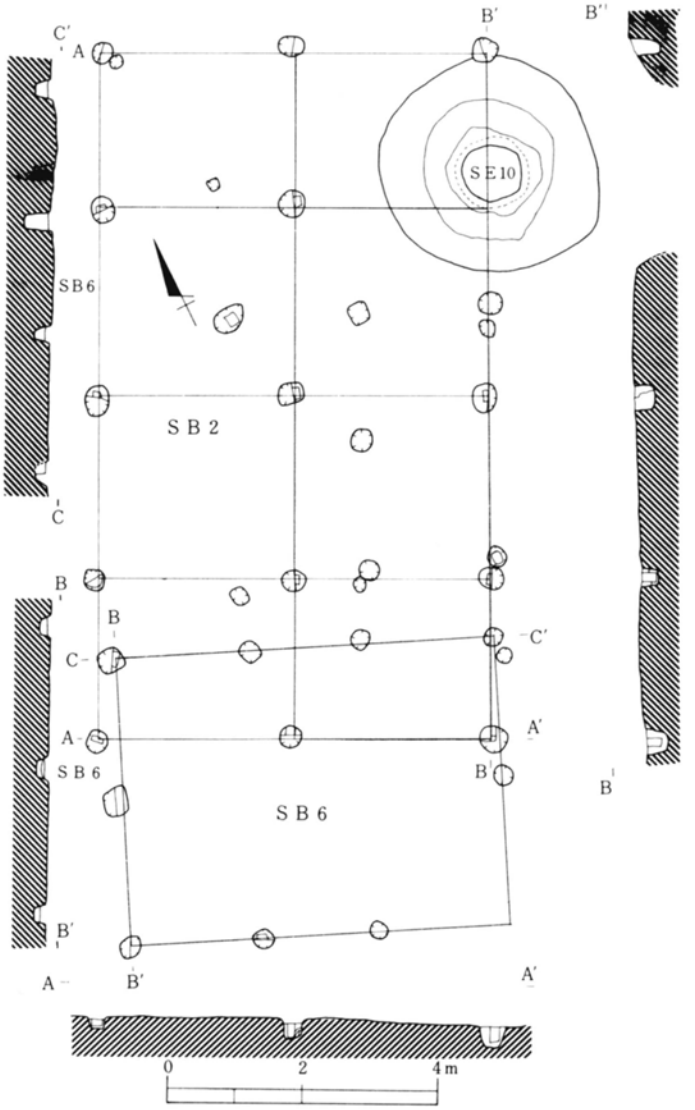
２間×３間の東西棟建物である。西妻の柱間がわずかに短い。

SB11（第15図）

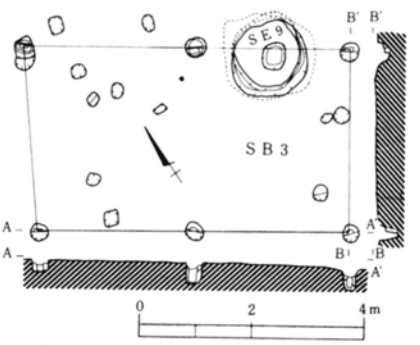
２間×４間の南北棟建物である。総柱であるが北、南の両柱間はわずかに狭い。柱は角柱である。

SB12（第16図）

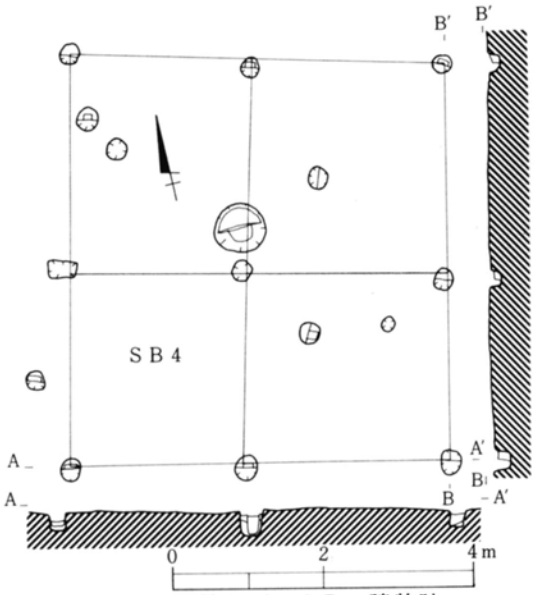
２間×３間の南北棟建物である。柱は角柱である。



第７図　ＳＢ２，６建物跡



第８図　ＳＢ３建物跡



第９図　ＳＢ４建物跡

SB 13（第17図）

建物規模は不明であるが、桁行が４間の総柱と考えられる。柱は角柱である。

SB14（第18図）

１間×２間の東西棟建物である。柱は不明。

SB 15（第19図）

１間×４間の細長い建物である。南妻の柱間はかなり巾が狭い。柱は不明。

SB 16（第20図・図版６）

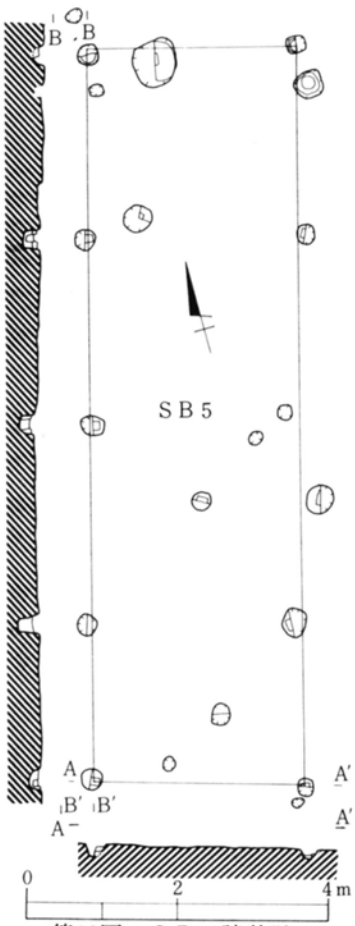
２間×２間の総柱建物である。柱は角柱である

SB 17（第21図・図版６）

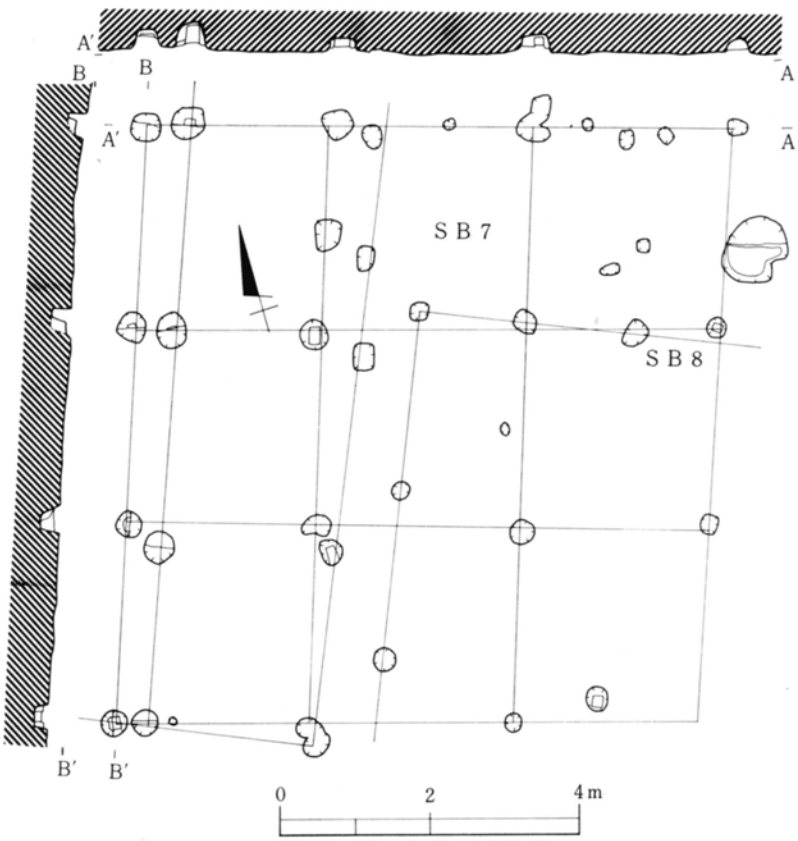
２間×２間の建物である。柱は角柱である。

SB 18（第22図・図版７）

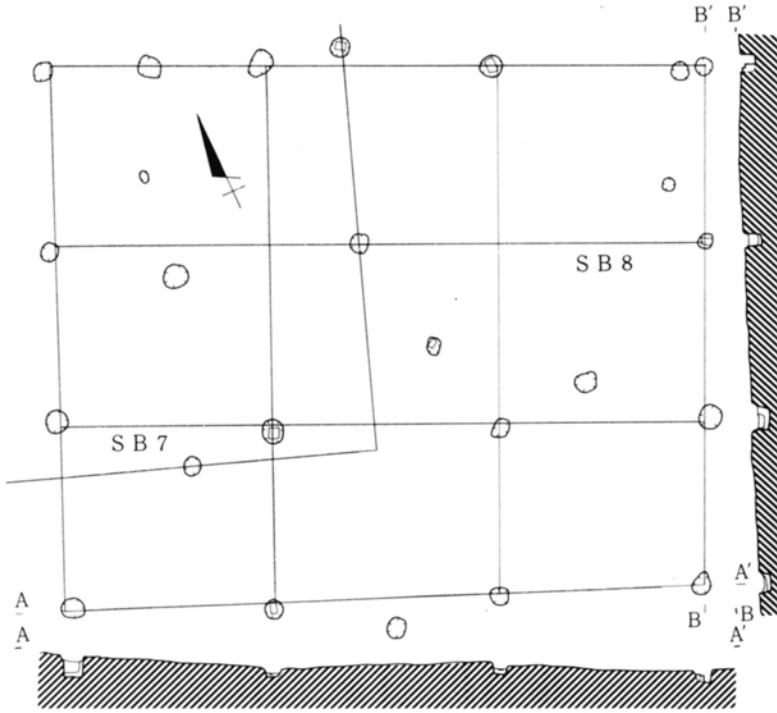
２間×３間の南北棟建物である。柱は角柱である。



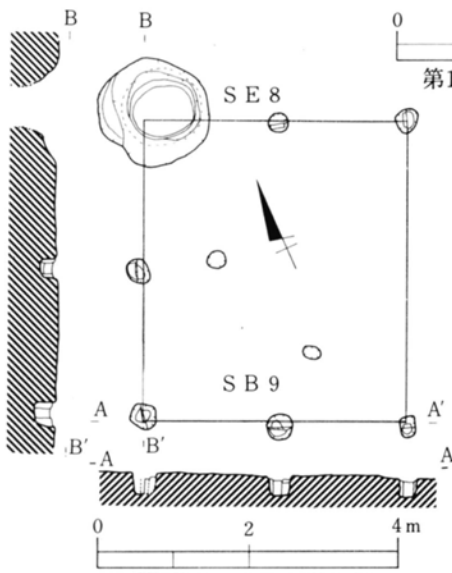
第10図　ＳＢ５建物跡



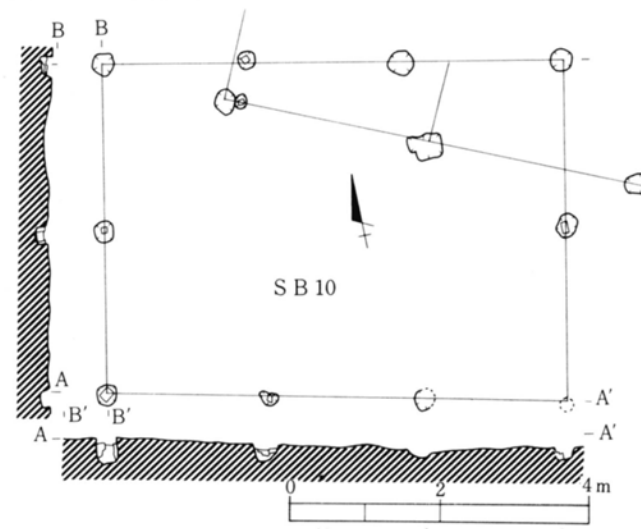
第11図　ＳＢ７建物跡



第12図　ＳＢ８建物跡



第13図　ＳＢ９建物跡



第14図　ＳＢ10 建物跡

SB 19（第23図）

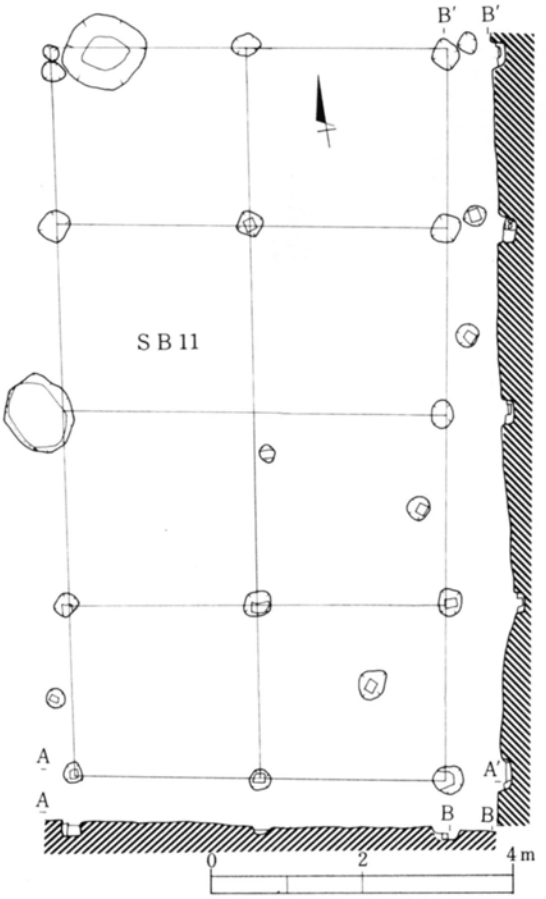
１間×２間の建物である。一間の柱間は極端に長い。柱は角柱である。

SB 20（第24図・図版７）

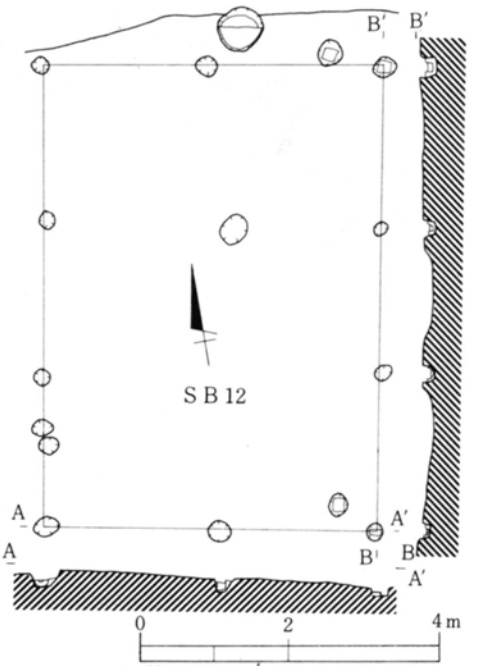
２間×２間の建物である。中央に井戸があるところから井戸に付随の建物とも考えられる。

SB 21（第25図・図版８）

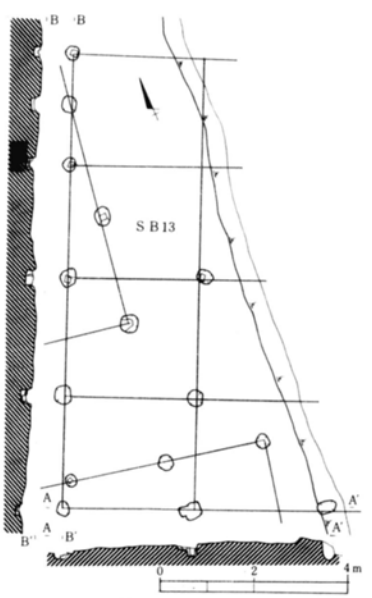
２間×２間の建物である。柱は角柱である。



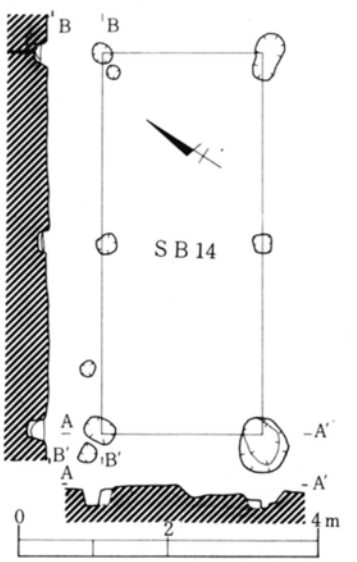
第15図　ＳＢ11 建物跡



第16図　ＳＢ12建物跡



第17図　ＳＢ13 建物跡



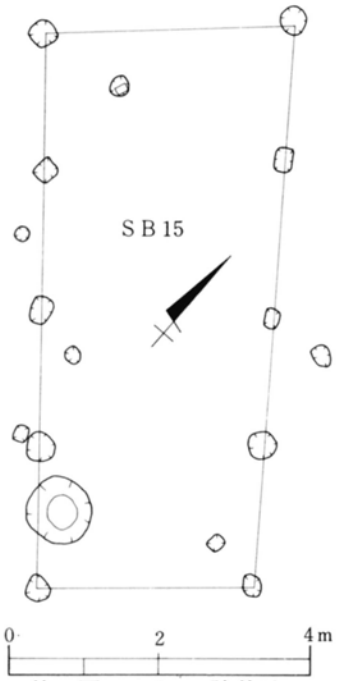
第18図　ＳＢ14 建物跡

SB22（第26図・図版８）

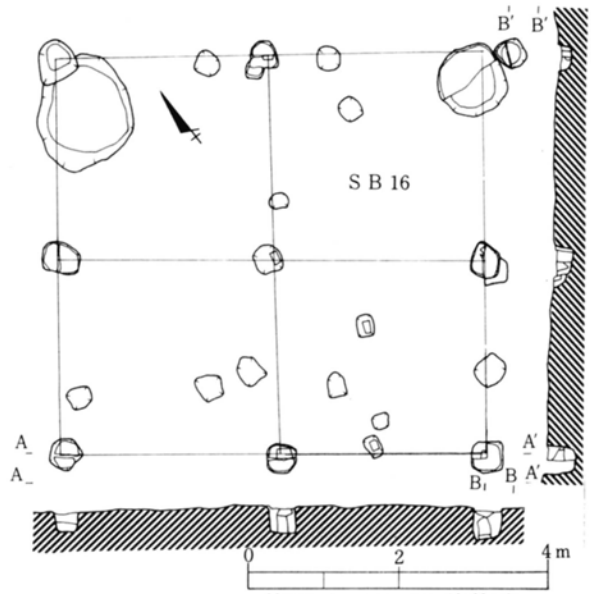
２間×３間の東北棟建物である。柱の掘り方にかなりの大小が認められる。柱は角柱である。

SB23（第27図・図版８）

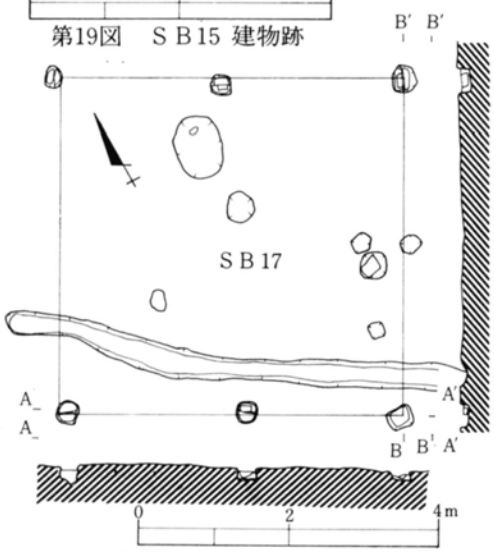
２間×３間の東西棟建物である。総柱の可



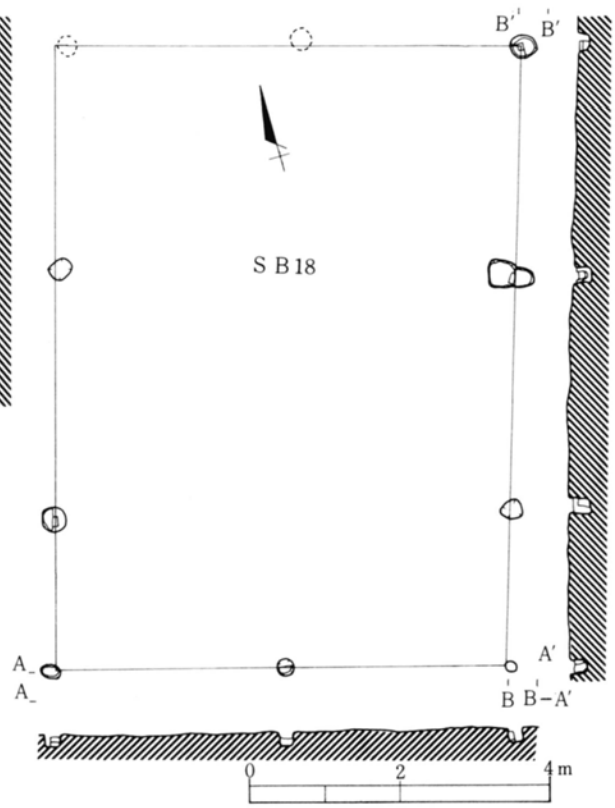
第19図　ＳＢ15 建物跡



第20図　ＳＢ16 建物跡



第21図　ＳＢ17 建物跡



第22図　ＳＢ18 建物跡

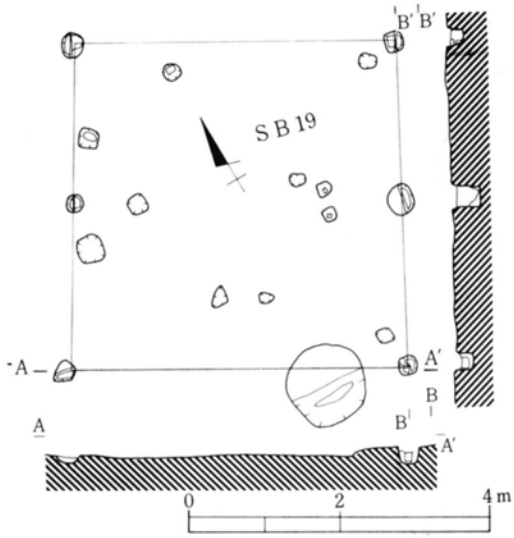
能性も考えられる。柱は角柱である。

SB24（第28図・図版８）

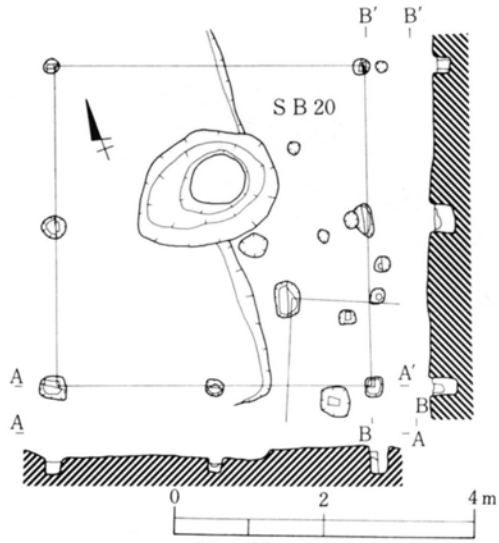
２間×２間の総柱建物である。東西に長い建物で、柱は角柱である。

SB25（第29図・図版８）

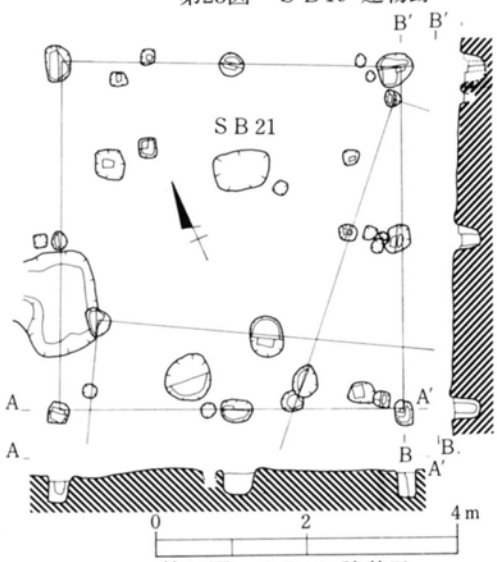
２間×２間の総柱建物である。柱は角柱である。



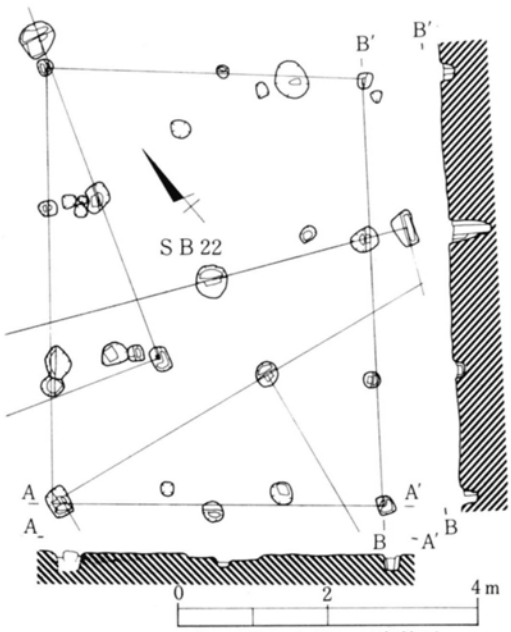
第23図　ＳＢ19 建物跡



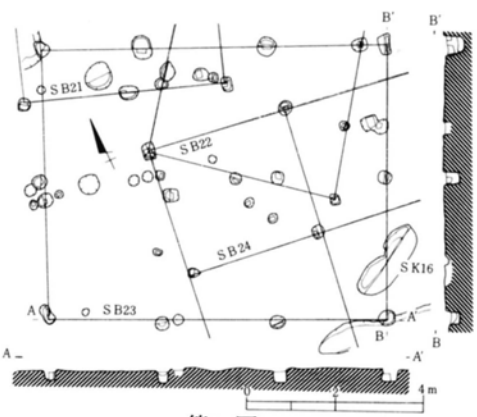
第24図　ＳＢ20 建物跡



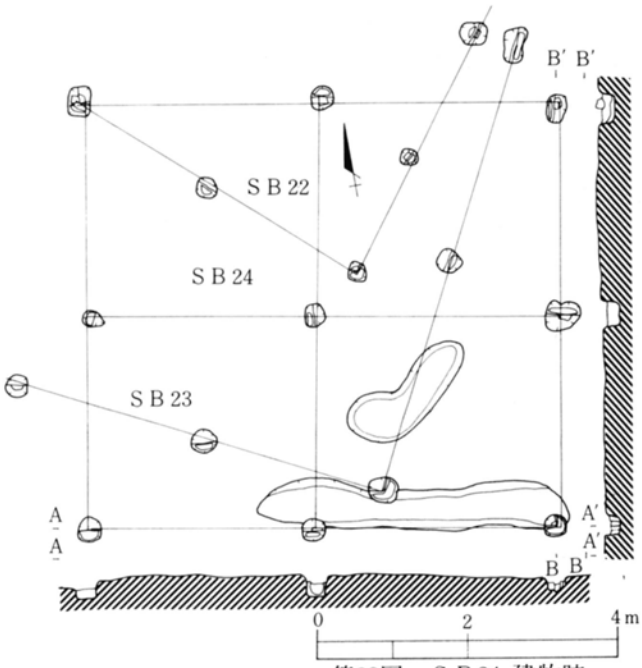
第25図　ＳＢ21 建物跡



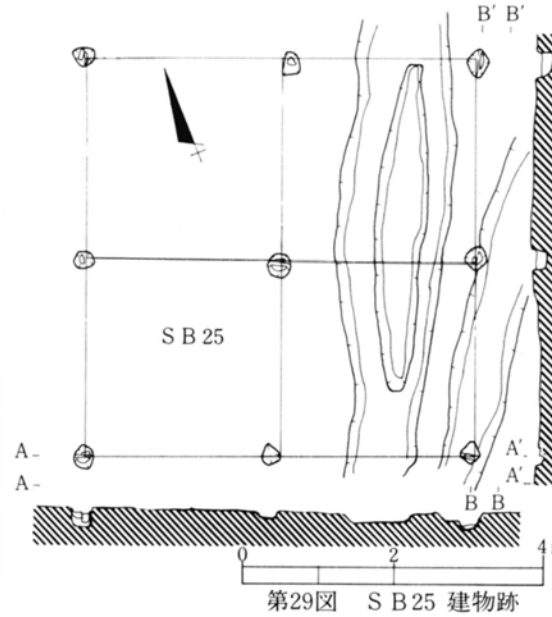
第26図　ＳＢ22 建物跡



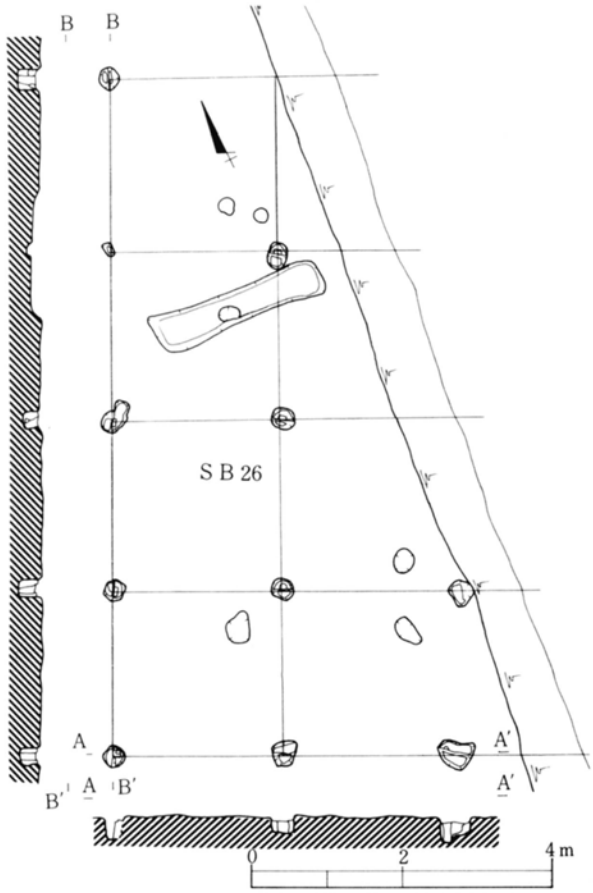
第27図　ＳＢ23 建物跡



第28図　SB24 建物跡



第29図　SB25 建物跡



第30図　SB26 建物跡

SB 26（第30図・図版９）

建物規模は不明であるが、桁行４間の総柱建物と考えられる。柱は角柱である。

SB27（第１図・図版９）

３間×３間の総柱建物である。柱位置がわずかにズレて建物全体がゆるい平行四辺形を呈する。柱は角柱である。

SB28（第31図・図版10）

３間×３間の総柱建物である。前述のSB27と一部重複し、規模もほぼ同じである。柱は角柱である。

SB29・30（第32図）

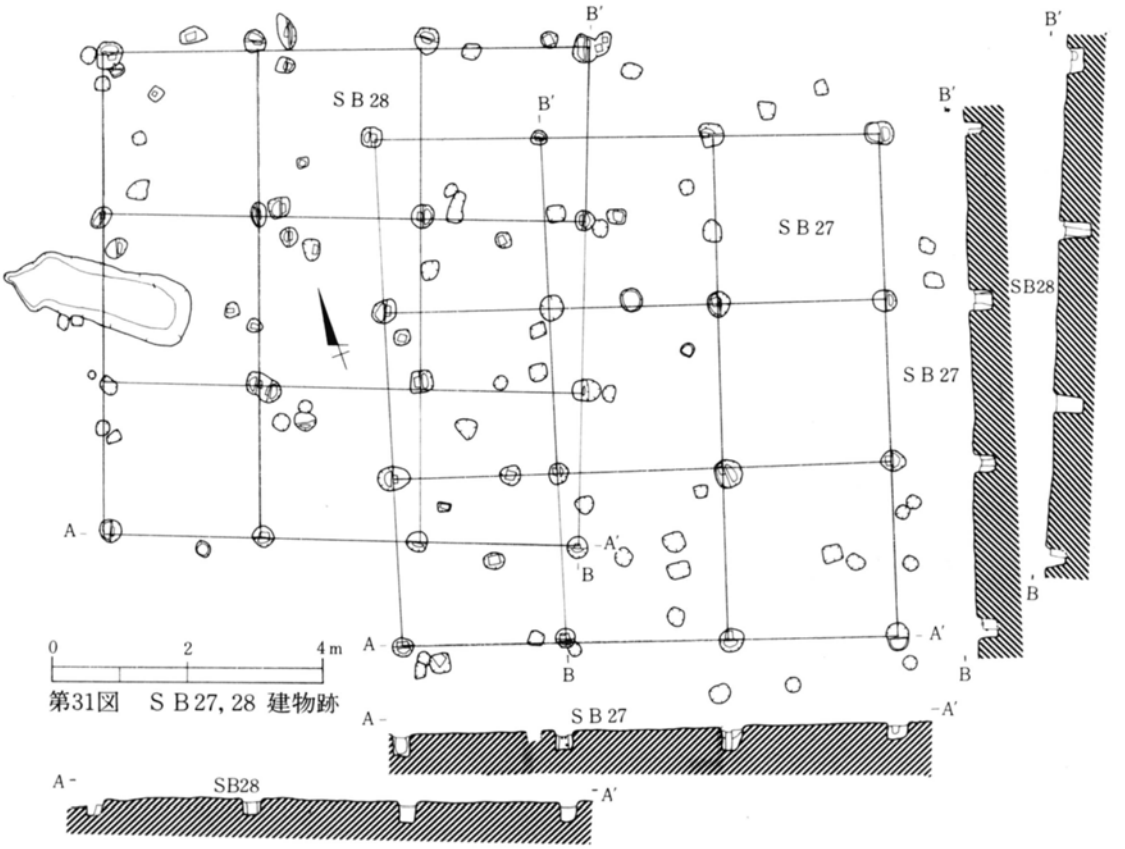
２間×２間の建物である。両建物規模はほぼ同じで、やや方向を変えた形で重複している。柱は角柱である。

SB31（第33図・図版10）

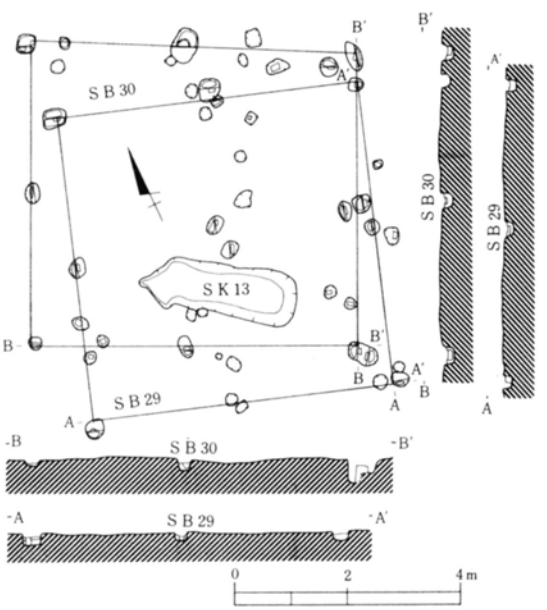
１間×２間の南北棟建物である。柱は角柱である。

SB32・33（第34図・図版10）

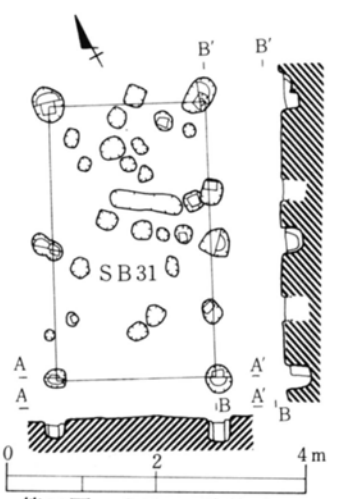
両建物とは規模は不明である。SB32は東西棟、SB33は南北棟と考えられる。



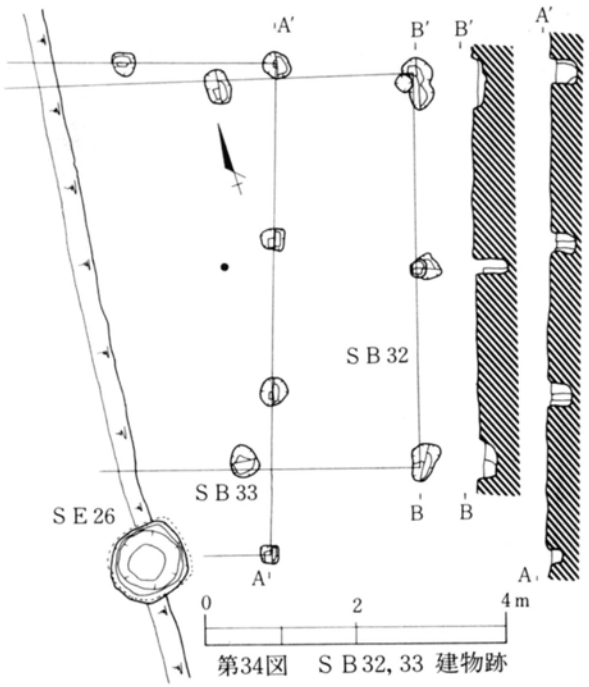
第31図　ＳＢ27, 28 建物跡



第32図　ＳＢ29, 30 建物跡



第33図　ＳＢ31 建物跡



第34図　S B 32, 33 建物跡

SB 34（第35図・図版11）

4間×4間の総柱建物である。北・南の柱間は他より狭い。柱は角柱である。

SB 35（第36図・図版11）

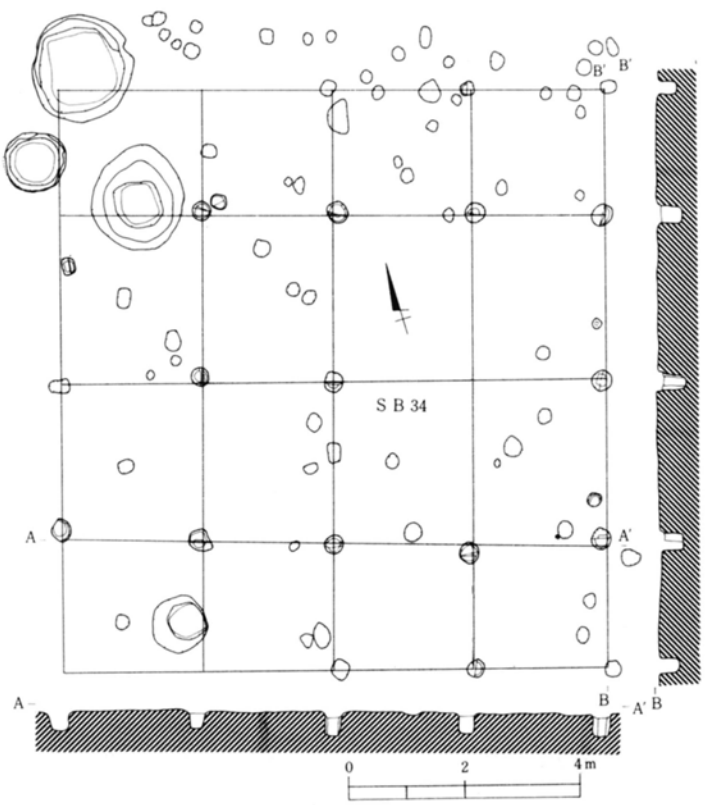
建物規模は不明であるが、SB 1のように4間×4間で北・南の柱間がやや狭い建物と考えられる。柱は角柱である。

SB 36（第37図・図版12）

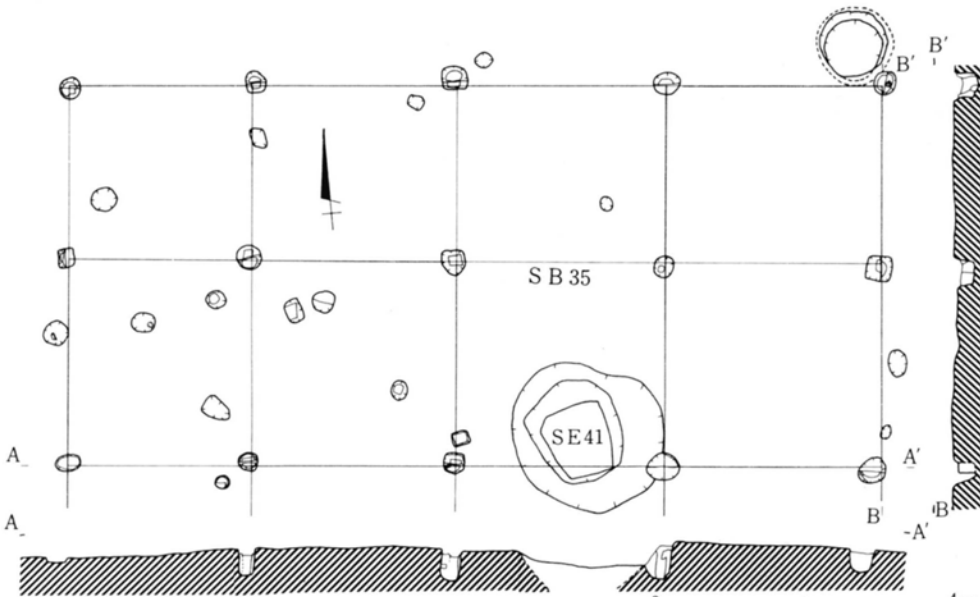
建物規模は不明である。東部は道路によって切断されている。

SB 37（第38図）

1間×2間の東西棟建物である。柱は角柱である。

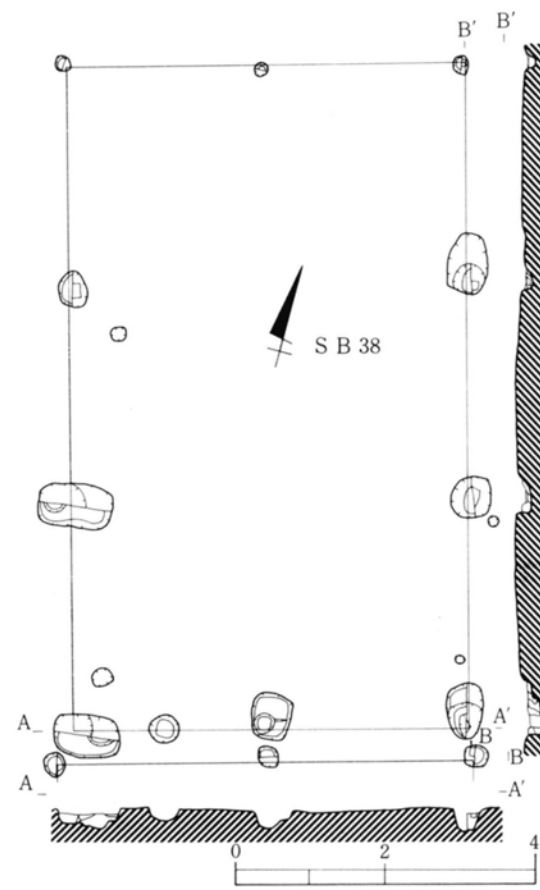


第35図　S B 34 建物跡

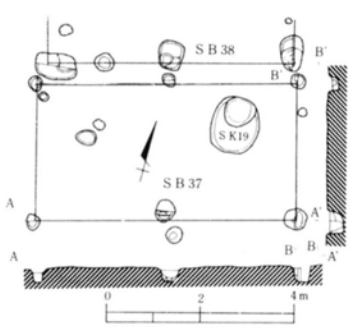


第36図　ＳＢ35 建物跡

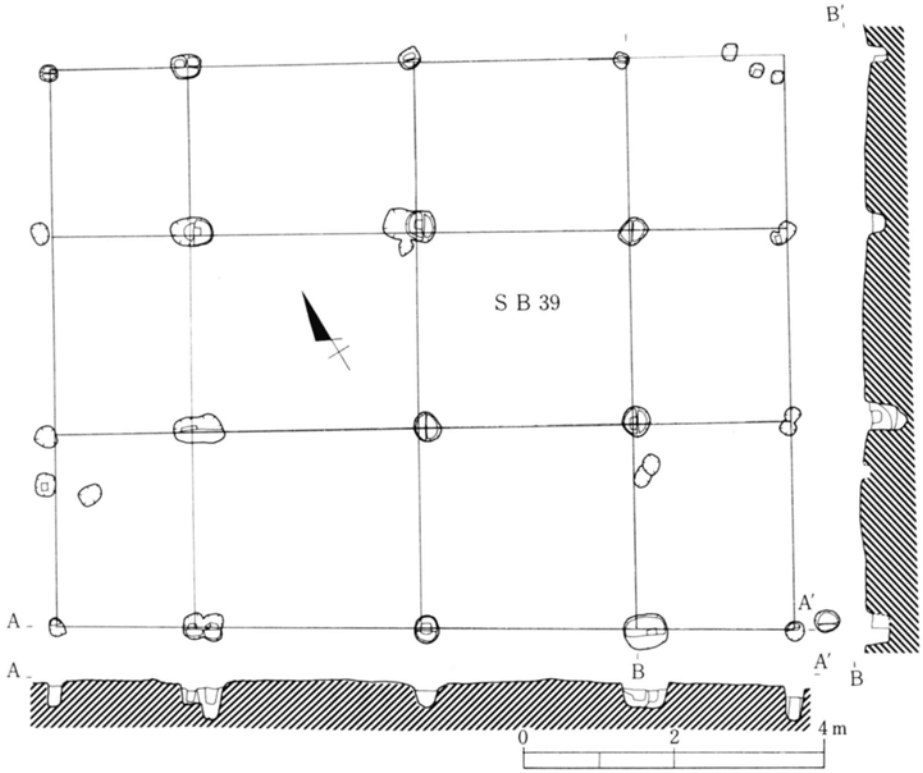
第37図　ＳＢ36 建物跡



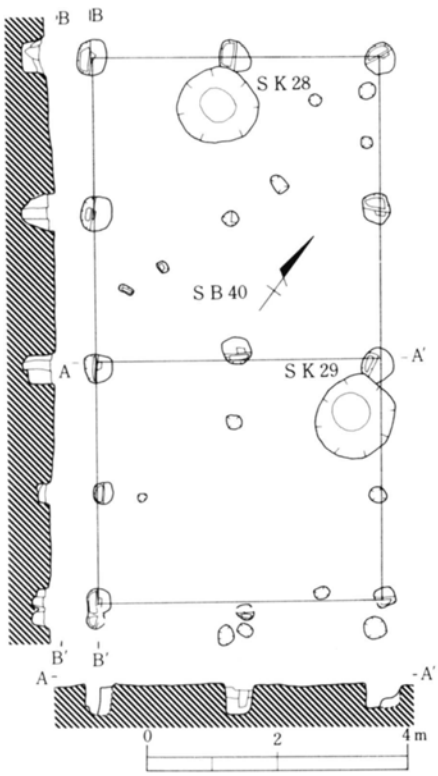
第39図　ＳＢ38 建物跡



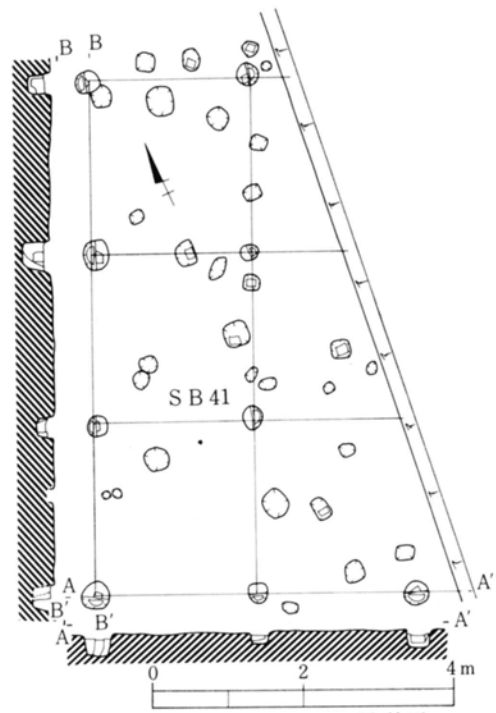
第38図　ＳＢ37 建物跡



第40図　ＳＢ39 建物跡



第41図　ＳＢ40 建物跡



第42図　ＳＢ41 建物跡

番　号	梁行柱間 m（西または北から）	桁行柱間 m（西または北から）	方　　位
ＳＢ１	2.25＋2.78＋2.92＋2.1	2.68＋2.66＋2.74＋2.62	E23° S
ＳＢ２	2.82＋2.88	2.3＋2.76＋2.74＋2.32	N25° 30′ E
ＳＢ３	3.6	3.04＋2.74	E33° 30′ S
ＳＢ４	2.4＋2.58	2.86＋2.6	N12° E
ＳＢ５	2.78	2.44＋2.48＋2.66＋2.08	N16° E
ＳＢ６	2.12＋2.14	2 ＋1.66＋1.98	E22° S
ＳＢ７	2.66＋2.48＋2.7	2.54＋2.6＋2.74	E17° S
ＳＢ８	2.4＋2.26＋2.48	2.9＋3.1＋2.86	E24° S
ＳＢ９	(1.78)＋1.72	(2.02)＋1.9	N25° E
ＳＢ10	2.2＋2.16	1.92＋2.06＋2.16	E12° S
ＳＢ11	2.6＋2.68	2.32＋(2.44)＋(2.64)＋2.2	N10° E
ＳＢ12	2.22＋2.4	2.06＋2.04＋ 2	N10° E
ＳＢ13	2.76＋2.9＋——	2.38＋2.44＋2.5＋2.4	N25° E
ＳＢ14	2.2	2.54＋2.44	E32° 30′ N
ＳＢ15	3.36	1.82＋1.86＋1.8＋1.86	N37° W
ＳＢ16	2.66＋2.6	2.84＋(2.86)	E37° S
ＳＢ17	4.46	2.26＋2.36	E30° S
ＳＢ18	3.08＋ 3	3.08＋3.08＋2.08	N18° E
ＳＢ19	4.2	2.14＋2.2	N28° E
ＳＢ20	2.14＋2.08	2.18＋2.08	E20° S
ＳＢ21	2.38＋2.24	2.3＋2.26	N23° E
ＳＢ22	2.34＋1.9	1.88＋2.06＋1.86	N38° E
ＳＢ23	3.5＋2.48	2.36＋2.84＋2.72	E25° S
ＳＢ24	2.92＋2.84	3.3＋3.14	E10° S
ＳＢ25	2.66＋2.6	2.74＋2.56	E22° S
ＳＢ26	2.3＋2.3＋——	2.28＋2.3＋2.24＋2.18	N27° E
ＳＢ27	2.46＋2.46＋2.6	2.58＋2.46＋2.44	E21° S
ＳＢ28	2.32＋2.52＋2.14	2.16＋2.5＋2.4	E19° S
ＳＢ29	2.76＋2.6	2.66＋2.86	N18° E
ＳＢ30	2.54＋2.66	2.86＋3.04	E28° S
ＳＢ31	1.98	1.94＋1.66	N25° E
ＳＢ32	——＋2.62	2.62＋2.6	N17° E
ＳＢ33	2.06＋——	2.38＋2.04＋2.14	N19° E
ＳＢ34	(2.5)＋(2.26)＋2.3＋2.44	(2.14)＋(2.9)＋2.52＋(2.44)	N18° E
ＳＢ35	2.24＋2.74＋——	2.46＋2.64＋2.86＋2.92	E 5° S
ＳＢ36	1.9＋——	2 ＋2.04＋2.04	N12° E
ＳＢ37	2.92	2.8＋2.74	E15° N
ＳＢ38	2.66＋2.7	3 ＋2.84＋2.98	N15° W
ＳＢ39	(2.18)＋(2.64)＋2.54	1.84＋2.98＋2.88＋(2.1)	E30° S
ＳＢ40	2.22＋2.3	2.4＋2.3＋1.98＋1.68	N37° W
ＳＢ41	2.12＋2.12＋——	2.32＋2.24＋2.26	N25° E

※　ＳＢ13，18，20，26，32，36，41建物跡については残存した柱穴を計測した。

SB38（第39図）

2間×3間の南北棟建物である。北妻の柱掘方が極端に小さい。また前述のSB37 とは関連が考えられる。

SB39（第40図、図版12）

3間×4間の総柱建物である。東、西の柱間は極端に狭い。柱は角柱である。

SB40（第41図、図版13）

2間×4間の南北棟建物である。桁の南側二間は柱間が狭く梁に間仕切りと考えられる柱がある。柱は角柱である。

SB41（第42図、図版13）

建物規模は不明である。柱は角柱である。

2. 井　戸　跡

下夕野遺跡から検出した井戸はA・B・C地区あわせて総数51基である。内訳は木組井戸が6基、素掘井戸が45基である。木組井戸の形態はほとんどが方形隅柱横桟型である。また素掘井戸は形態から4つのタイプに分類できる。

木組井戸（第44・45・52・54～56・59図・図版16・17・19・21～23）

SE 3 ：A地区の北東部で検出した井戸である。掘り方平面形は、長径約2.1m、短径約2.1 mの円形を呈し、下部に行くにしたがってせばまっている。上部から井戸底までの深さは約3.4 mである。掘り方の中央部には井戸側を据えており、約1.3m掘り下げたところで長径約90㎝、短径約85㎝の方形を呈する井戸側が検出された。上部はかなり腐蝕して残存部は長さ約1.3 mである。井戸側底部までは深さ約2.5 m である。井戸側の構造は四隅に角柱をたて、その柱に枘穴を穿ち横桟を挿入した隅柱横桟型である。横桟は約60㎝の間隔で二段残存しているが、上段は土圧のためか折れまがっている。各井戸側には巾約15㎝、残存する長さ約1.2～1.4mの縦板を6～7枚あてがい、さらにその外側には添板をあてて補強し、灰青色粘土を裏ごめしている。縦板の下端はほとんどそろえている。井戸側の下部はさらに巾をせばめて地山を掘りぬいているが井筒は検出されなかった。

SE22 ：B地区北西部で道路に半分ほど切られて検出された井戸である。平面形は径約1.3 m～1.5 mの不整円形を呈し、井戸底までの深さは約2.0 mである。上部から約1.2 m ほど斜めに掘り込まれ

井戸番号	地区	井側				井筒	井桁	掘り方(m)	深さ(m)	備考
		素材	形態	構造	規模(cm)					
3	A	木組	方形	隅柱・横桟	90×85	不明	不明	2.1×2.1	3.4	
22	B	木組	方形	隅柱・横桟	80×78	不明	不明	1.5×1.3	2.0	井戸底で曲物検出
31	B	木組	方形	隅柱・横桟	80×75	不明	不明	1.5×1.3	1.8	
32	B	木組	方形	隅柱・横桟	94×92	不明	不明	1.8×1.5	2.0	井戸底で曲物検出
40	B	木組	方形	隅柱・横桟	78×74	不明	不明	1.2×1.0	3.0	井戸埋土内で馬骨検出
49	C	木組	方形	隅柱・横桟	1.16×88	不明	不明	1.8×1.76	2.0	

タイプ	井戸番号	地区	規模(長径×短径)(m)	形態	深さ(m)	備考
I	1	A	1.5×1.4	円形	2.0	
	2	A	2.2×1.8	円形	3.2	
	4	A	0.9×0.9	円形	1.9	
	5	A	1.1×0.9	円形		
	6	A	0.9×0.9	円形	1.7	
	11	A	1.0×0.8	楕円形	1.4	
	12	A	1.0×1.0	円形	1.7	
	13	B	1.1×1.1	円形	1.6	
	15	B	1.3×1.2	円形	1.6	
	16	B	1.4×1.3	円形	1.5	
	18	B	1.0×1.0	円形	1.9	
	19	B	0.8×0.8	円形	1.0	
	20	B	1.3×1.3	円形	1.6	
	26	B	1.0×0.9	円形	2.1	
	27	B	1.2×1.1	円形	2.0	
	33	B	1.0×1.0	円形	1.7	
上部から垂直に掘り込まれ，比較的深い井戸である。	38	B	1.3×1.2	円形	1.7	
	39	B	0.9×0.8	円形	1.4	
	42	B	0.8×0.8	円形	1.1	
	45	C	1.5×1.4	円形	1.6	
	47	C	1.3×1.3	円形	1.8	
	50	C	1.3×1.2	円形	1.9	
	51	C	1.1×1.0	円形	1.3	
II	17	B	1.0×0.9	円形	0.9	
	23	B	1.8×1.7	円形	1.6	
	28	B	1.4×1.4	円形	1.0	
	29	B	1.8×1.7	円形	1.5	
	30	B	2.1×2.0	円形	1.4	
	34	B	1.8×1.6	円形	1.5	
	35	B	1.2×1.2	円形	1.3	
	37	B	2.2×2.0	円形	1.5	
Iと比較して巾が広く浅い。また底部が平らな井戸である。	41	B	2.0×2.0	円形	1.6	
	44	C	1.7×1.6	円形	1.8	
	48	C	2.3×1.8	楕円形	2.2	
III	7	A	1.2×1.2	円形	1.5	
	8	A	1.5×1.4	円形	2.4	
	14	B	1.5×1.5	円形	1.7	
	21	B	2.0×1.5	楕円形	1.8	
	24	B	1.5×1.4	円形	1.5	
上部がすりばち状でその後垂直に掘り込んだ井戸である。	36	B	1.5×1.3	円形	2.1	
	43	C	1.5×1.4	円形	1.6	
	46	C	1.2×1.1	円形	1.6	

Ⅳ すりばち状に掘り込んだのちにさらに巾をせばめて垂直に掘り込んだ井戸である。	9	A	1．4×1．3	円　形	3．6	
	10	A	3．2×3．1	円　形	3．6	
	25	B	2．6×2．3	円　形	2．1	

たところで段をつけ、径約95㎝と巾をせばめてほぼ垂直に70㎝程掘り込まれている。約1.25ｍ掘り下げたところで長径約80㎝、短径約78㎝の方形を呈する井戸側が検出された。上部はかなり腐蝕しており残存部は長さ約70㎝である。井戸側の構造は、四隅に柱をたて、その枘穴に横桟を挿入した方形隅柱横桟型と考えられるが横桟は腐蝕のため検出できなかった。底部北西寄りに径21㎝、高さ15㎝の曲物が検出されたが井筒として使用されたものではなく、投棄されたものと考えられる。

SE31：Ｂ地区の西側で検出された井戸である。

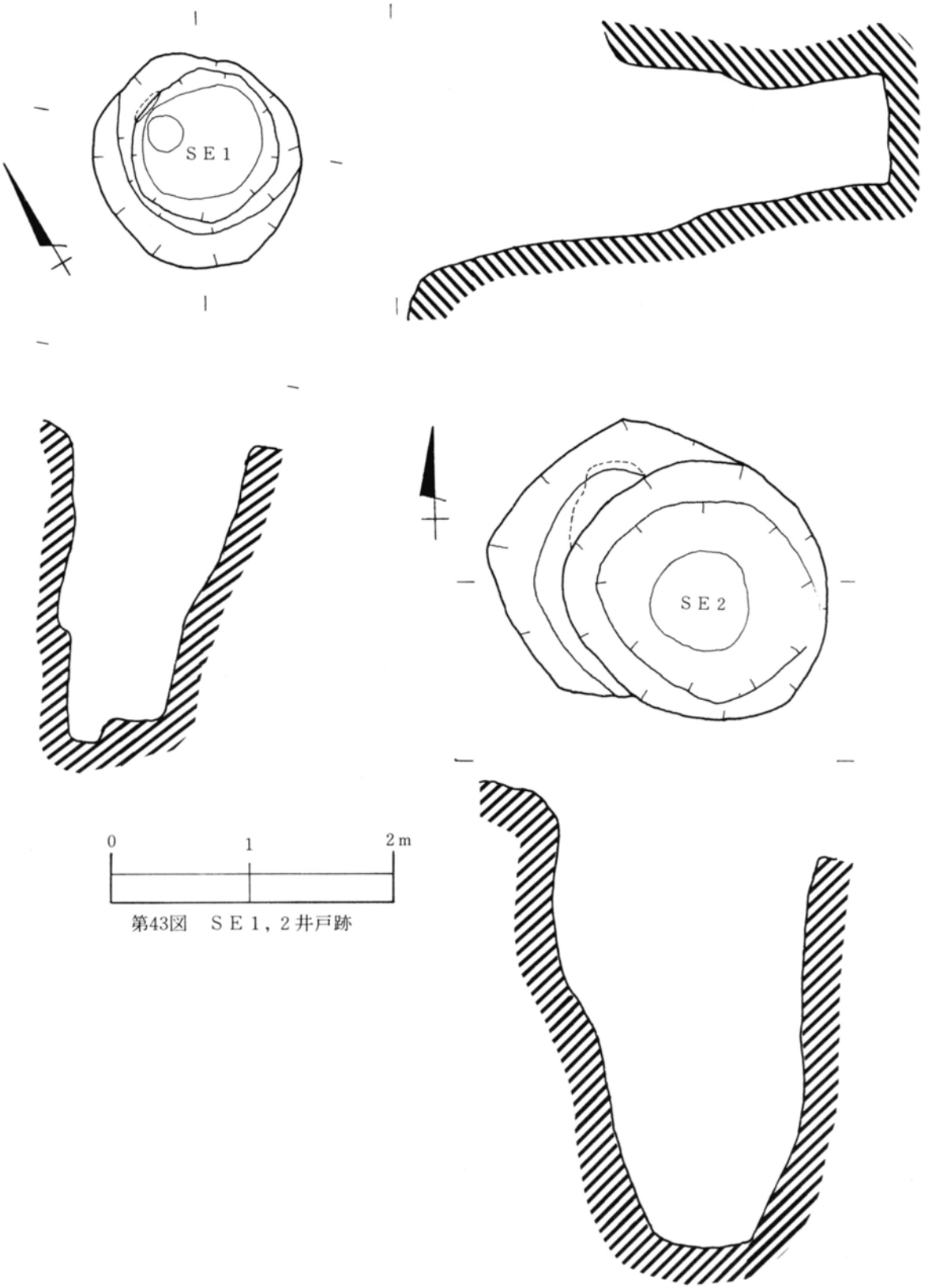
SE30と重複し、切り合いからSE30よりも新しい。掘り方平面形は長径約1.5ｍ、短径約1.3ｍのほぼ円形を呈する。井戸底までの深さは約1.8ｍである。掘り方は、最初に約70㎝ほどほぼ垂直に掘り下げたのち、径約1.15ｍと巾をせばめて、底部に近づくにつれゆるやかな傾斜をもたせて掘られている。井戸側はほぼ中央部に据えられており、約70㎝程掘り下げたところで約75㎝×80㎝程の井戸側が検出されたが、この面では井戸側の構造は不明である。さらに約80㎝程掘り下げた段階で隅柱、横桟の一部を検出したが腐蝕が激しくほんのわずかしか残存していない。側板は腐蝕したのか検出できなかった。隅柱の外側の埋土は、井戸側内の埋土と明確に異なる灰青色粘土であり、井戸側の外に裏ごめしたものであろう。

SE32：Ｂ地区の西側で検出された井戸である。

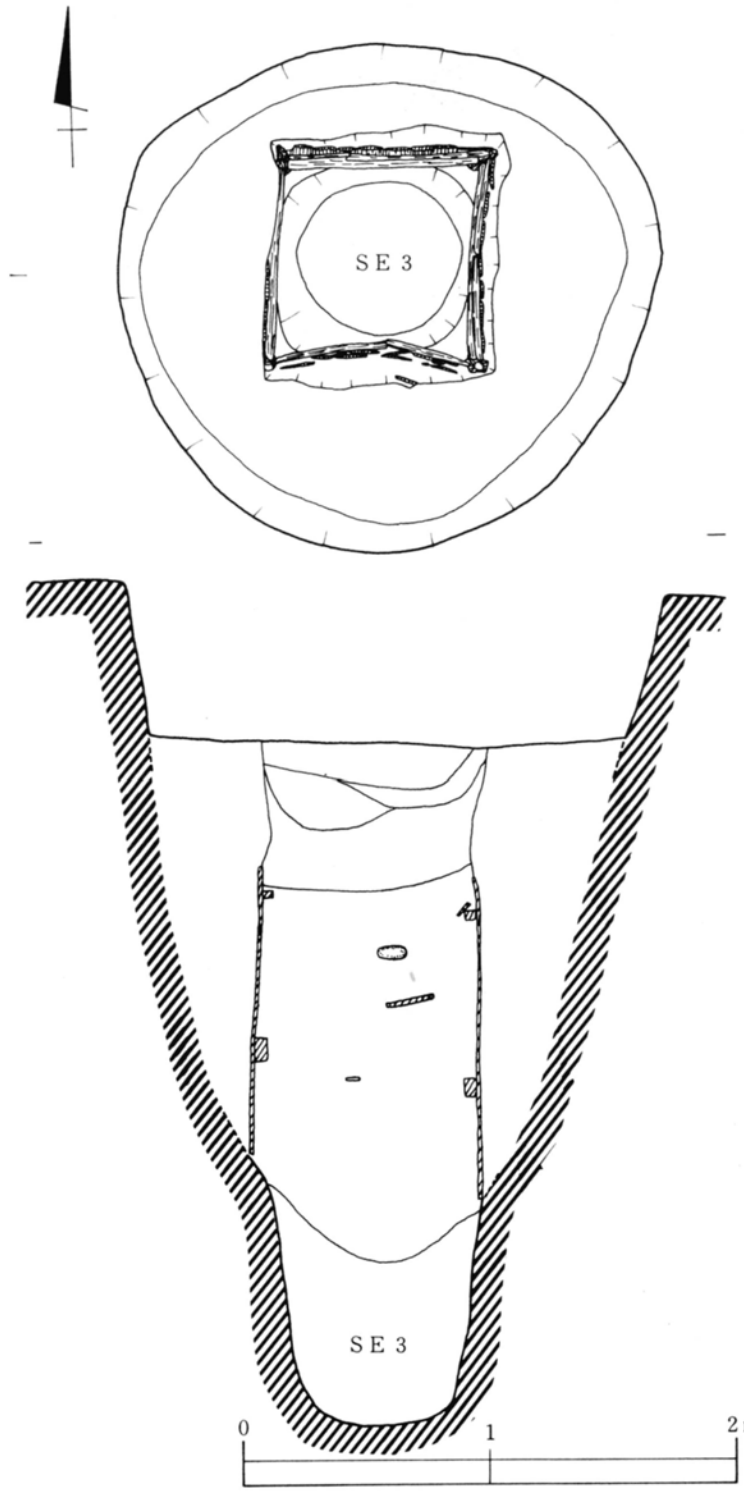
掘り方平面形は、上部では長径約1.8ｍ、短径約1.5ｍの円形を呈し、下部に行くにしたがってせばまっている。上部から井戸底までの深さは約2.0ｍである。掘り方の中央部には井戸側を据えており、上部から約1.4ｍ掘り下げたところで、長径約94㎝、短径約92㎝の方形を呈する井戸側が検出されたが、南側が土圧のため内側へ押し込まれている。上部はかなり腐蝕しており、残存部は長さ約75㎝である。井戸側の構造は、四隅に隅柱をたて、その柱に枘穴を穿ち横桟は腐蝕により不明であるが隅柱に穿たれている枘穴により２段程確認できるが、その上部については腐蝕が著るしく不明である。各側には巾約15㎝、残存する長さ約20～30㎝の縦板を５～６枚、その外側には添板をあてがい補強している。上部から約1.5ｍ、井戸側上面と同レベルの埋土中には約20～40㎝の礫が入っている。井戸底から約５㎝程浮いた状態で北隅に曲物が検出されたが井筒として使用されたとは考えがたく、投棄されたものであろう。井筒は検出されなかった。

SE40：Ｂ地区の南側で検出した井戸である。

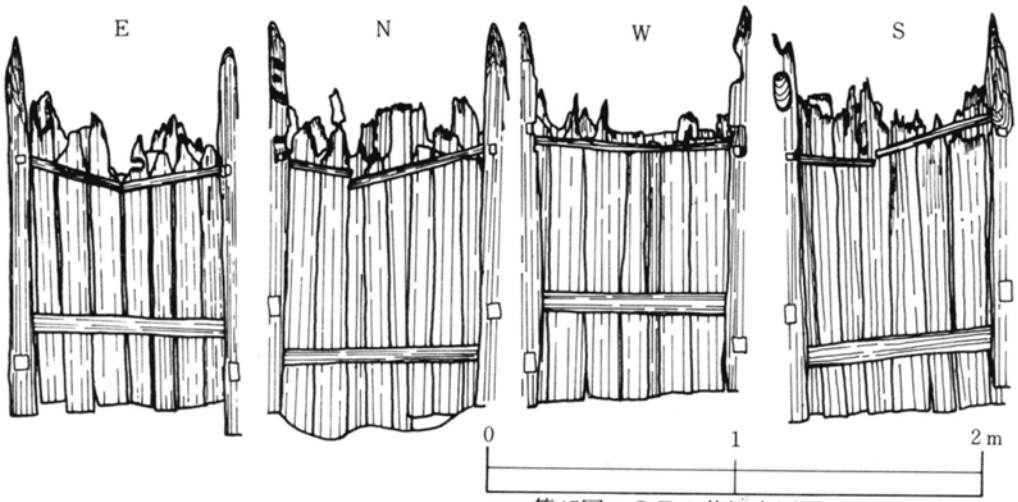
掘り方平面形は、上部では長径約1.2ｍ、短径約1.0ｍの不整円形を呈し、掘り方は上部から約1.6ｍまでほぼ垂直に掘り下げ、さらに径70㎝の巾で約1.3ｍ程掘り下げられている。上部から井戸底までの深さは約3.0ｍである。掘り方の中央部には井戸側を据えており、上部から約1.6ｍ掘り下げた



第43図　ＳＥ１，２井戸跡



第44図　ＳＥ３井戸跡



第45図　ＳＥ３井側実測図

ところで長径約78㎝、短径約74㎝の方形を呈する井戸側が検出された。上部はかなり腐蝕しており、残存部は長さ約1.5 mである。井戸側の構造は、隅柱横桟型である。横桟は70㎝の間隔で２段程残存しているが、その上部については不明である。各側には巾10～20㎝、残存する長さ1.0～1.5 m の縦板を４～６枚あてがい、その外側には添板をあてて補強している。上部から約2.4 mの井戸側内部埋土から馬の顎の部分の骨が出土している。井筒は検出できなかった。

素掘井戸

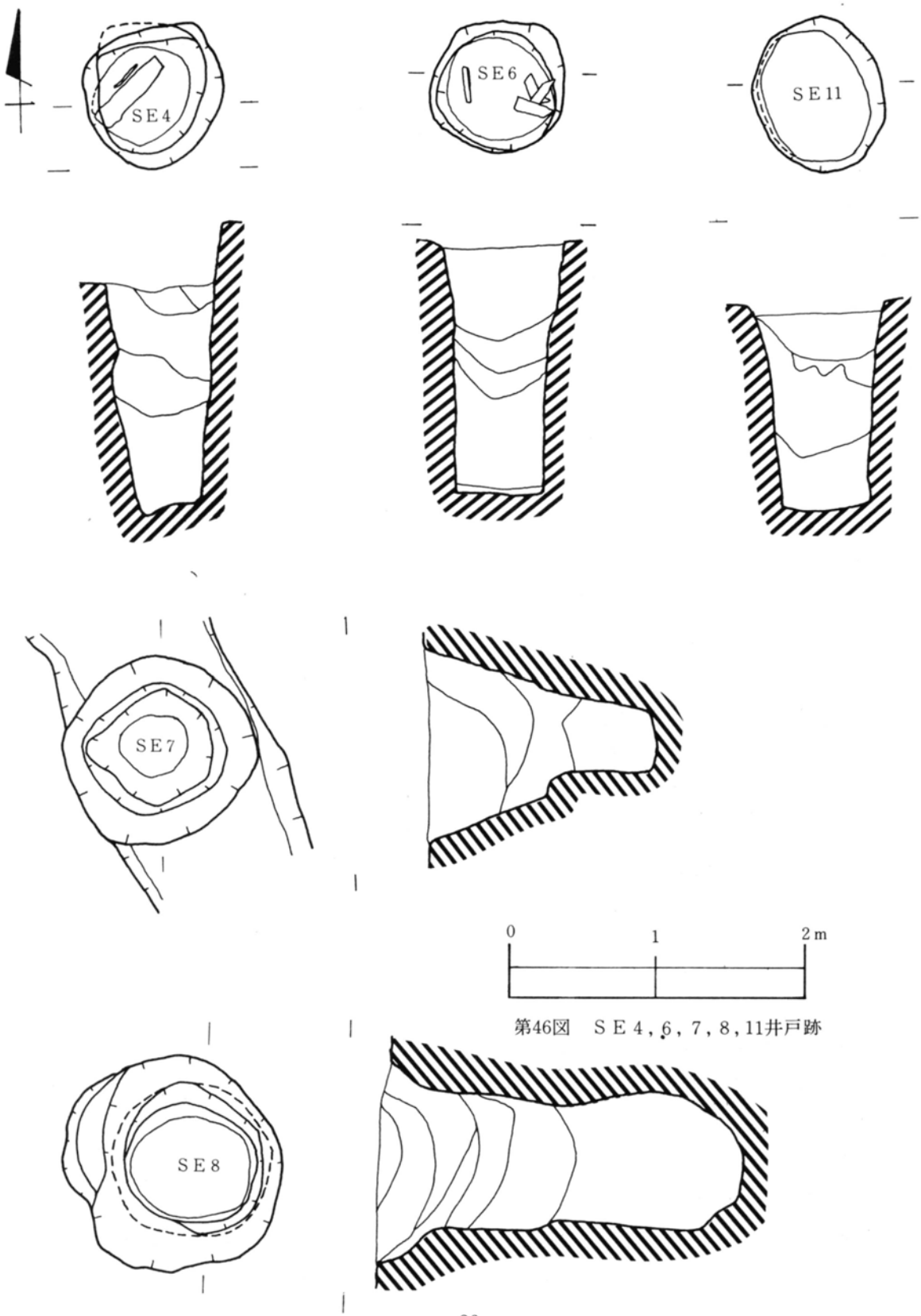
検出された井戸の大部分を占める素掘り井戸はＡ地区11基、Ｂ地区26基、Ｃ地区８基の計45基が確認された。素掘井戸は掘り方の形態により４タイプに分類される。

Ｉタイプ（第43、46、49～51、53、57、58、60～62図、図版15、18～21、23、24）

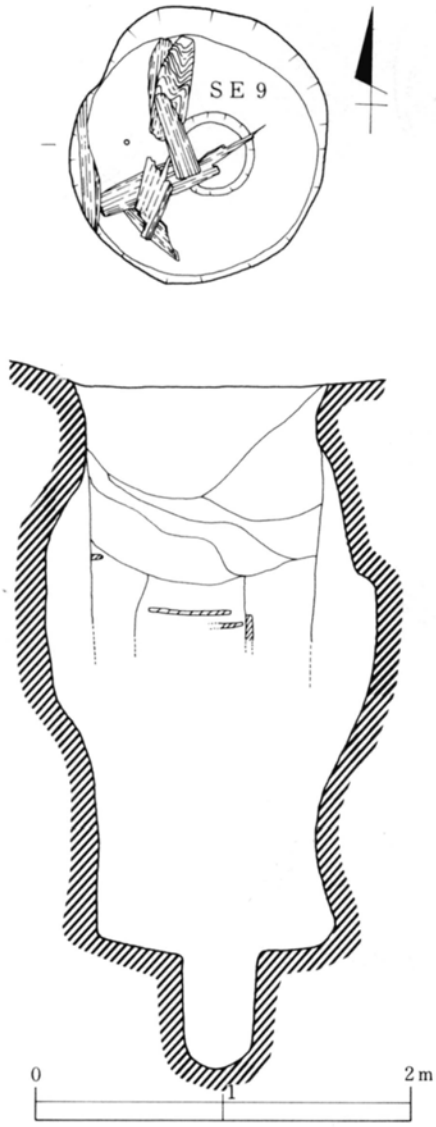
掘り方平面形は平均規模長径約1.6 m、短径約1.1 mの円形を呈する。上部からほぼ垂直に掘り下げられ、底部は平らな井戸である。典型例としてはＢ地区のSE33、Ｃ地区のSE47があげられる。SE33はＢ地区西側で検出され、掘り方平面形は、長径約1.0 m、短径1.0 mの円形を呈し、下部へいくにしたがって若干せばめられている。上部から井戸底までの深さは約1.7 mである。一方SE47はＣ地区南東で検出され、掘り方平面形は、長径1.3 m、短径1.3 mの円形を呈し、やはり下部へいくにしたがって若干せばめられている。上部から井戸底までの深さは約1.8 mである。

Ⅱタイプ（第50、51、53、57、58、60、61図、図版20、24）

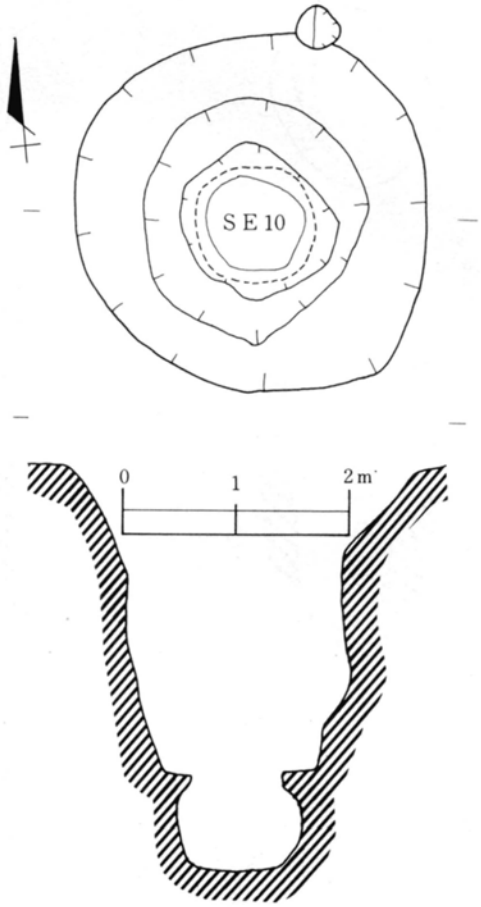
掘り方平面形は平均規模長径約1.9 m、短径約1.8 mのほぼ円形を呈する。すりばち状に掘り下げられており、Ｉと比して全体に巾が広く、深さが浅い。また底が平らである。典型例としてはＢ地区のSE29、34があげられる。SE29はＢ地区西側で検出され、掘り方平面形は径約1.8 mの円形を呈する。井戸底までの深さは約1.5 mであり、底部はほぼ平らである。SE34はSE29の南側で検出され、掘り方平面形は径約1.8 mの円形を呈する。下部に行くにしたがってかなり巾がせばまっている。井戸底までの深さは約1.5 mで、底部はほぼ平らである。



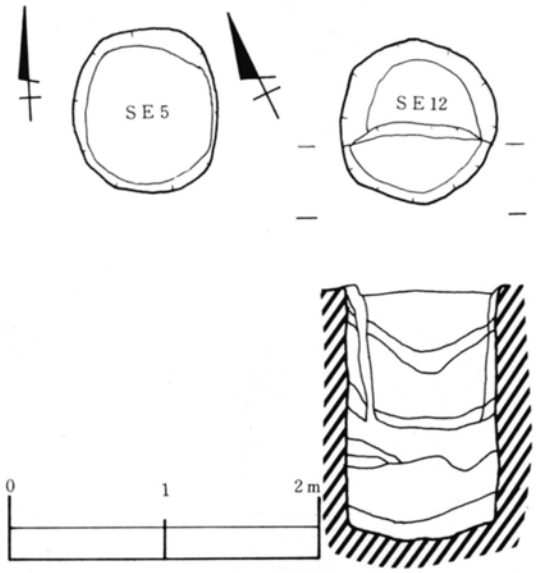
第46図　ＳＥ４，６，７，８，11井戸跡



第47図　ＳＥ９建物跡



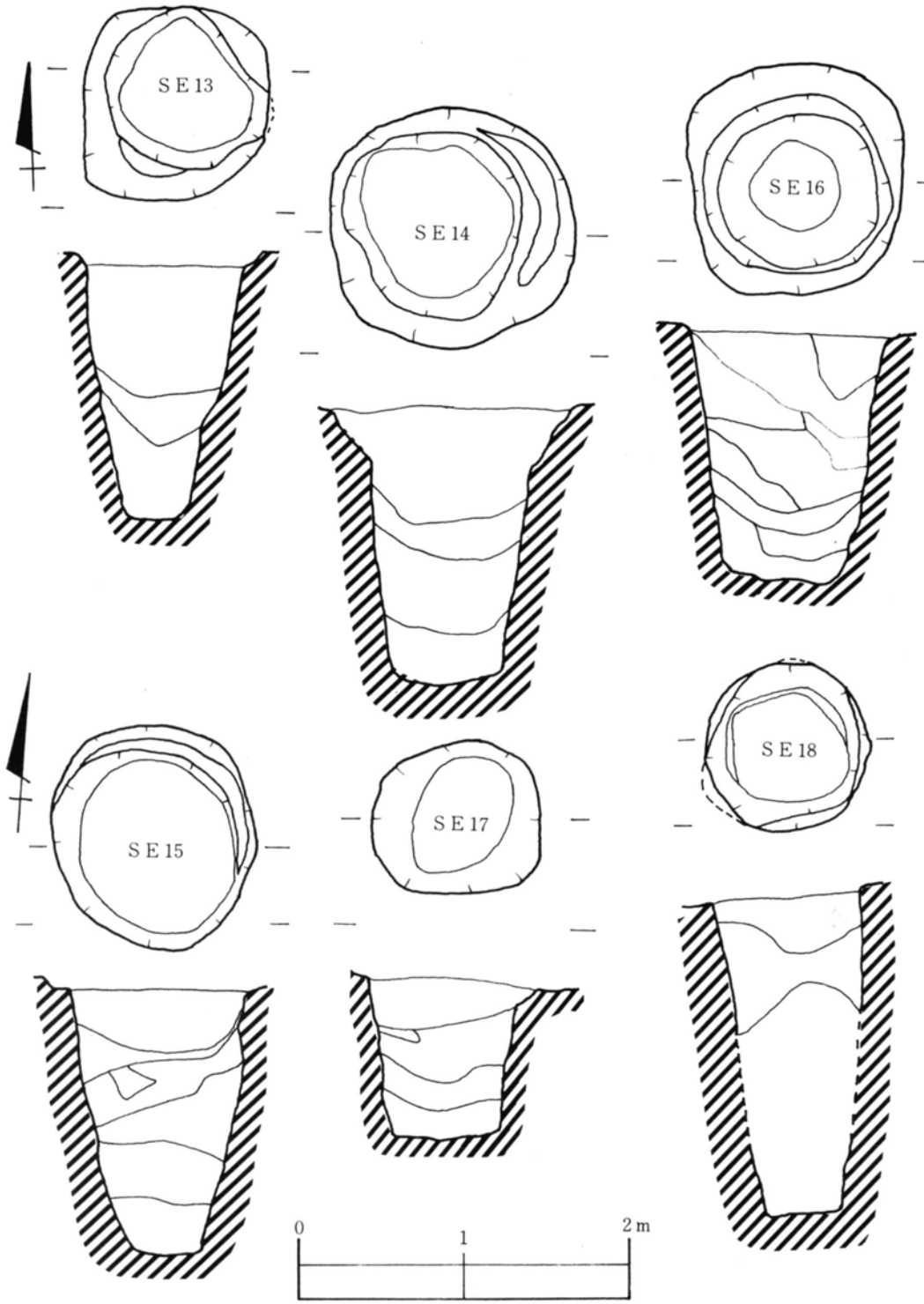
第48図　ＳＥ10 井戸跡



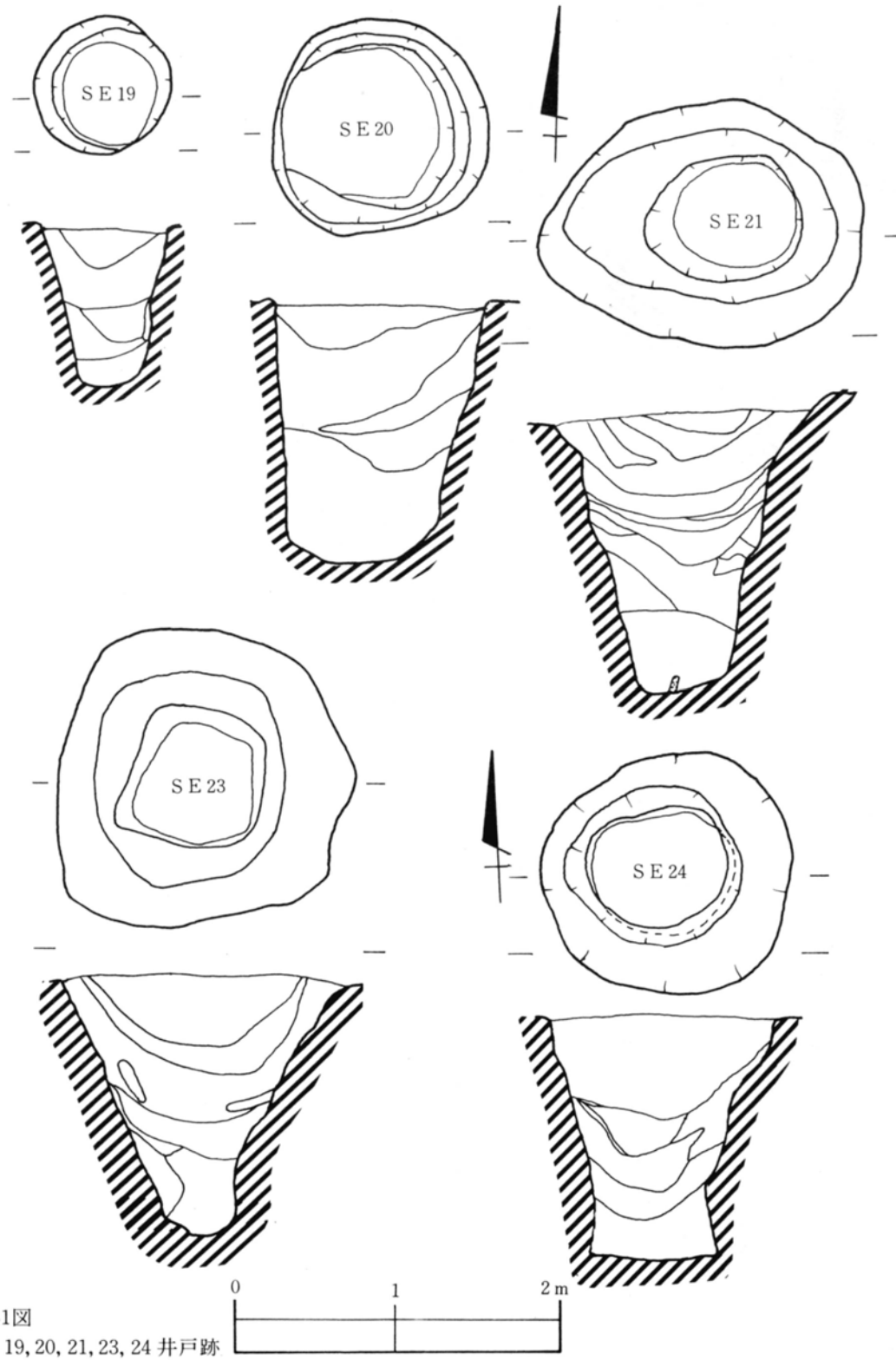
第49図　ＳＥ５，12 井戸跡

Ⅲタイプ（第46、50、51、57、60図、図版20、21、23、24）

掘り方は上部を最初すりばち状に掘り、その後ほぼ垂直に掘り込んでいる。井戸底はほぼ平らである。このタイプの井戸はＡ・Ｂ・Ｃ地区から計８基検出されている。掘り方平面形はほぼ円形を呈し、大きさは平均すると長径約 1.48 *m*、短径約 1.36 *m*、深さは約 1.38 *m*である。この



第50図　ＳＥ13, 14, 15, 16, 17, 18 井戸跡



第51図
SE19, 20, 21, 23, 24 井戸跡

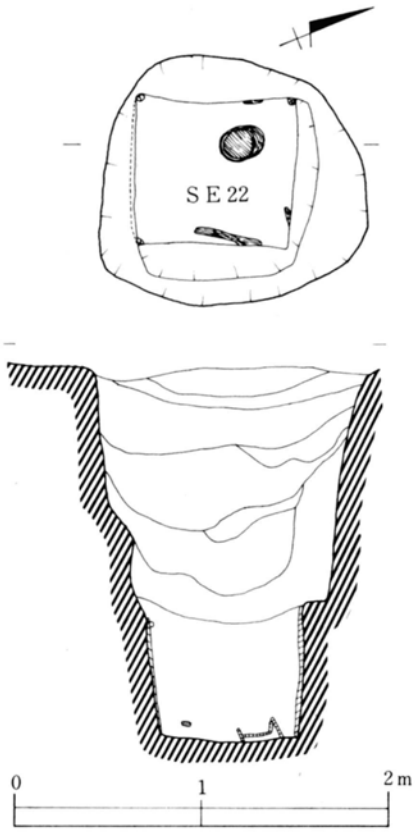
タイプの代表的な井戸であるSE14は、平面形が径約1.5 mの円形を呈する。上部から約40㎝程すりばち状に掘り込んだのち、若干の傾斜はあるもののほぼ垂直に掘り込んで井戸底に至る。井戸底までの深さは約1.7 mであり、底は平らである。埋土は4層に分けられ、上部から茶褐色土、粘性のある灰茶褐色土、砂粒混りの黒褐色土、非常に粘性のある灰黒色土の順でいずれもレンズ状に推積している。

Ⅳタイプ（第47、48、53図、図版18）

上部からすりばち状に掘り込んだのちに、巾をせばめてさらに垂直に掘り込んでいる井戸である。このタイプの井戸は3基検出されている。

SE 9：A地区南西部で検出した井戸である。

平面形は径約1.4 mの円形を呈し、井戸底までの深さは約3.6 mである。掘り方は中程が掘りすぎたため若干外側にふくらんでいる。約3.1 m掘り下げたところで、径約40㎝と巾をせばめてさらに地山を約60㎝程ほぼ垂直に掘りぬいている。深さ約1.2 mの埋土から板材が多数出土しており、木組の構造をもつ井戸とも考えられる。井筒は検出されなかった。



第52図　SE22 井戸跡

SE10：A地区南側から検出された井戸である。

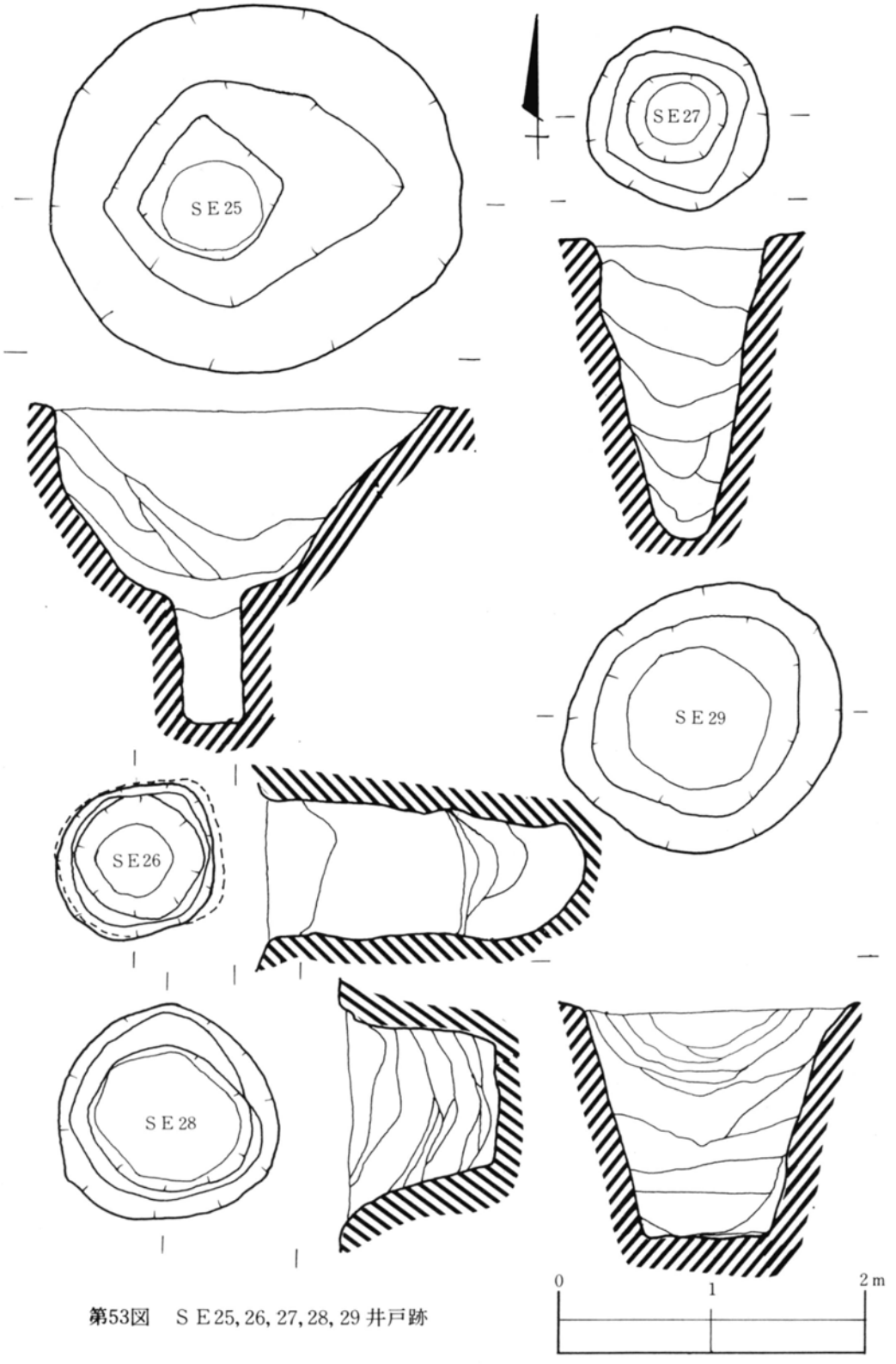
平面形は径約3.1 mのほぼ円形を呈し、井戸底までの深さは約3.6 mである。掘り方は上部からすりばち状に掘り込まれたのちに、ゆるい湾曲で1.8 mほど掘り込まれる。そこからさらに巾をせばめて袋状に90㎝程掘りぬいている。

SE25：B地区南東部で検出された井戸である。

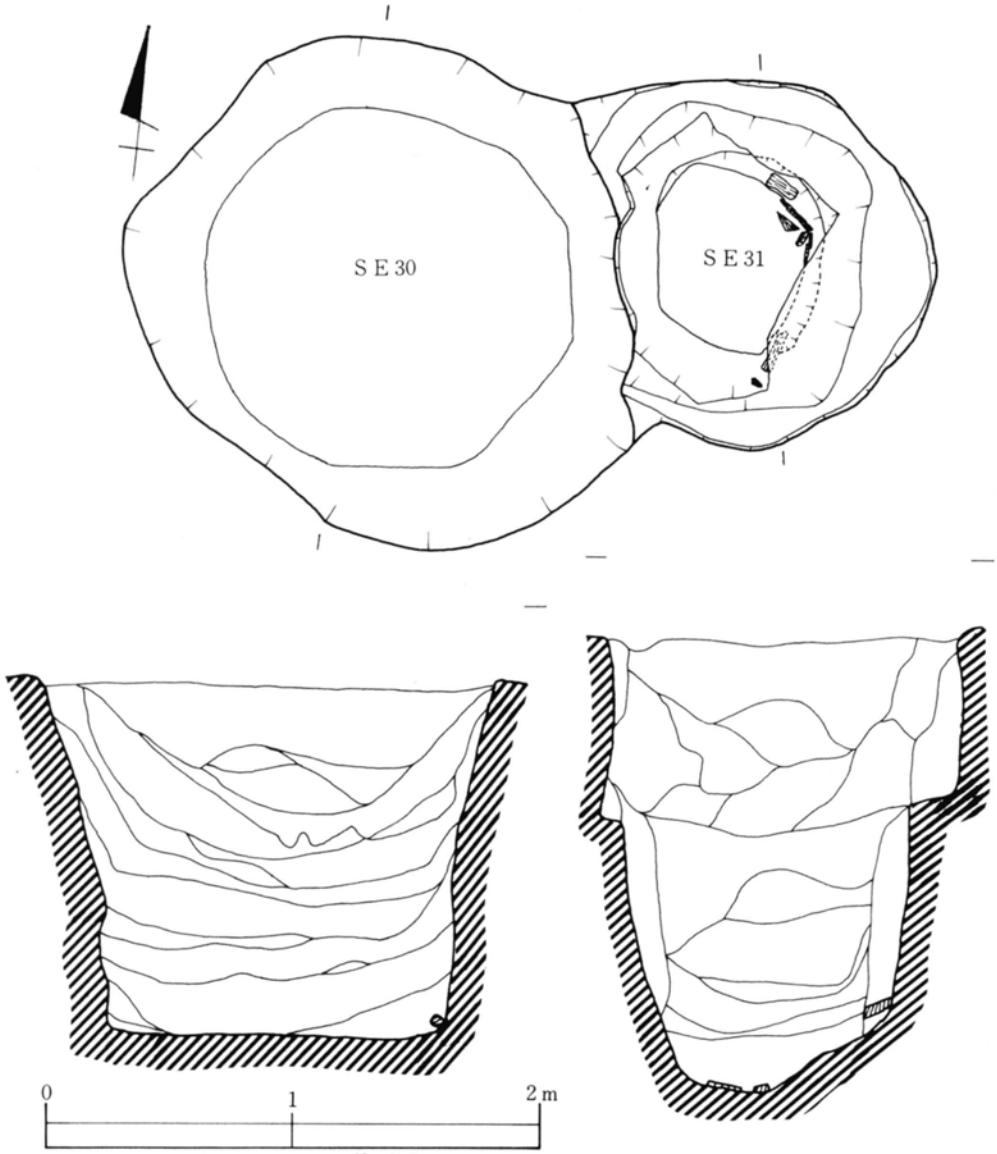
平面形は径約2.5 m程の円形を呈し、井戸底までの深さは約2.1 mである。掘り方は上部からすりばち状に1.2 m程掘り下げたところから径約40㎝と巾をせばめて70㎝程ほぼ垂直に掘りぬいている。埋土は、黒色土、灰黄色土がレンズ状の推積をなし、巾をせばめて掘り込まれている部分は同一層で灰乳色粘土である。

3. 溝 状 遺 構

本遺跡で検出した溝状遺構は大小合せて17条以上にのぼる。東西方向へほぼ並行して走る溝、それらに直行するような状態の溝など、走行方位はさまざまである。これらの溝の新旧関係は、明確に把握できるものは少ない。



第53図　ＳＥ25, 26, 27, 28, 29 井戸跡



第54図　SE30, 31 井戸跡

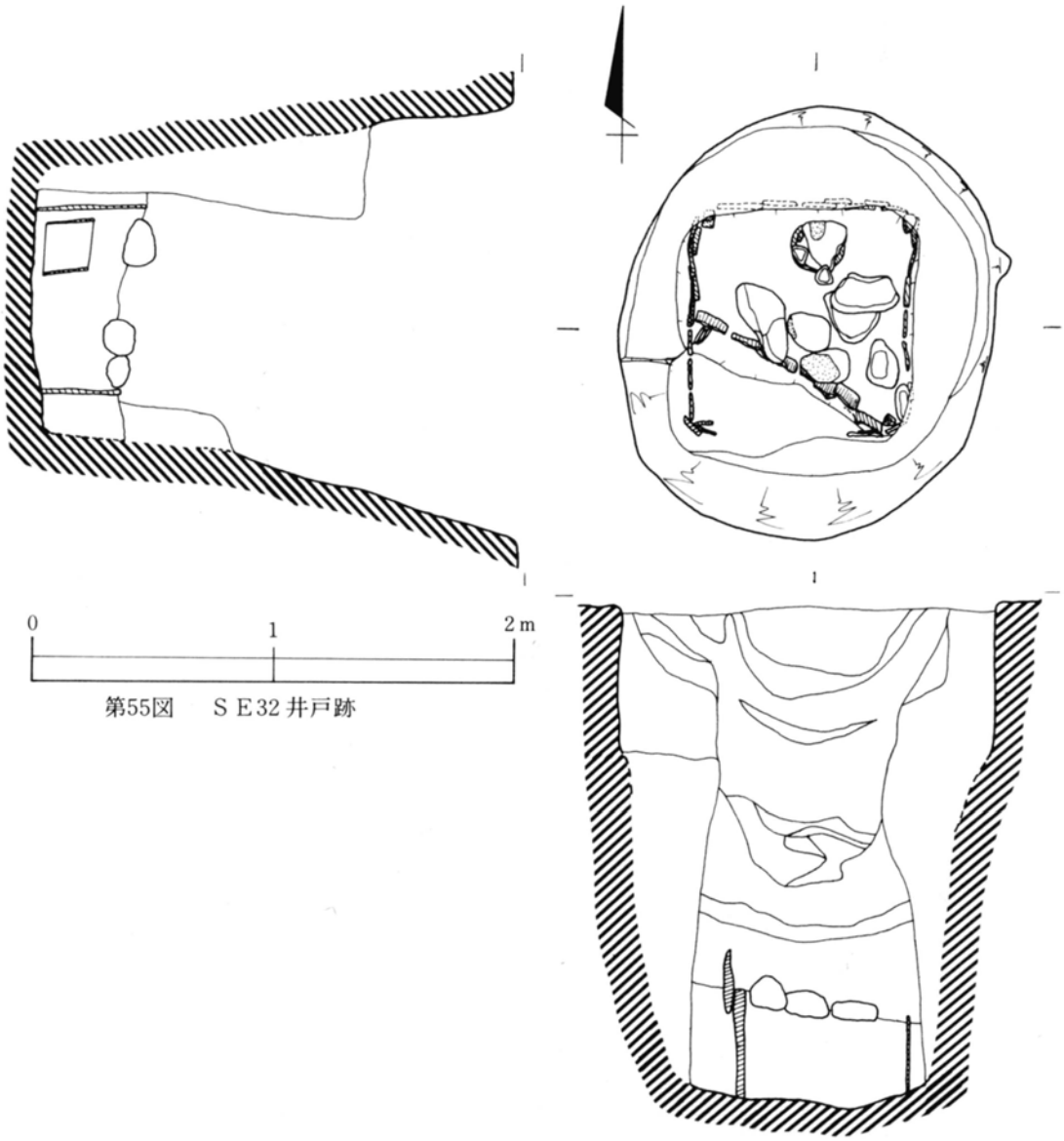
SD 1・17（第2図、図版1）

SD 1 溝は、 現長約25m・幅約 1.5 ～ 2.5 m・深さ約20～30cmを測り、北東・南西方向に走る。SD 17溝は、現長約33m、幅約 1 ～ 1.5 m、深さ約30～40cmを測り、南北方向に走る。両溝ともSK31土坑と地区中央部で接続し、約70度の角度で北に屈している。また両溝とも断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色土で下層が黄色味をおびている。両溝及びSK31土坑は一連の遺構と考えられ、SE 4 井戸跡はSD 1 溝を掘り上げた段階で検出し、SE 7 井戸跡はSD 17溝を切っている。両溝とも出土遺物はない。

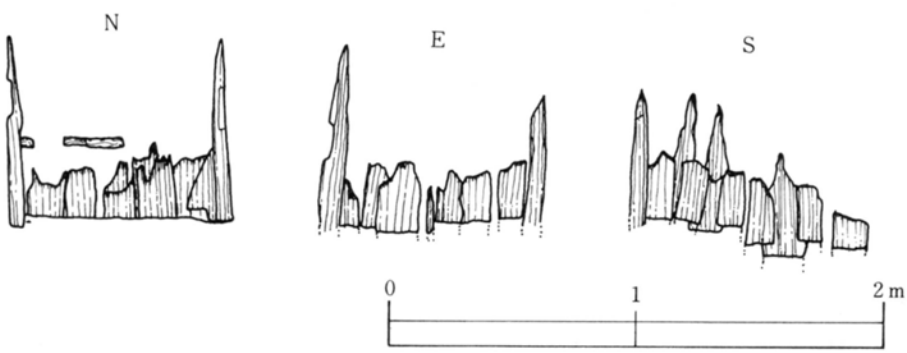
SD 2・5・4・6（第2図・図版2）

これらの溝は遺跡中央部を東西方向にほぼ並行して走る。いずれも明確な状態で検出した。

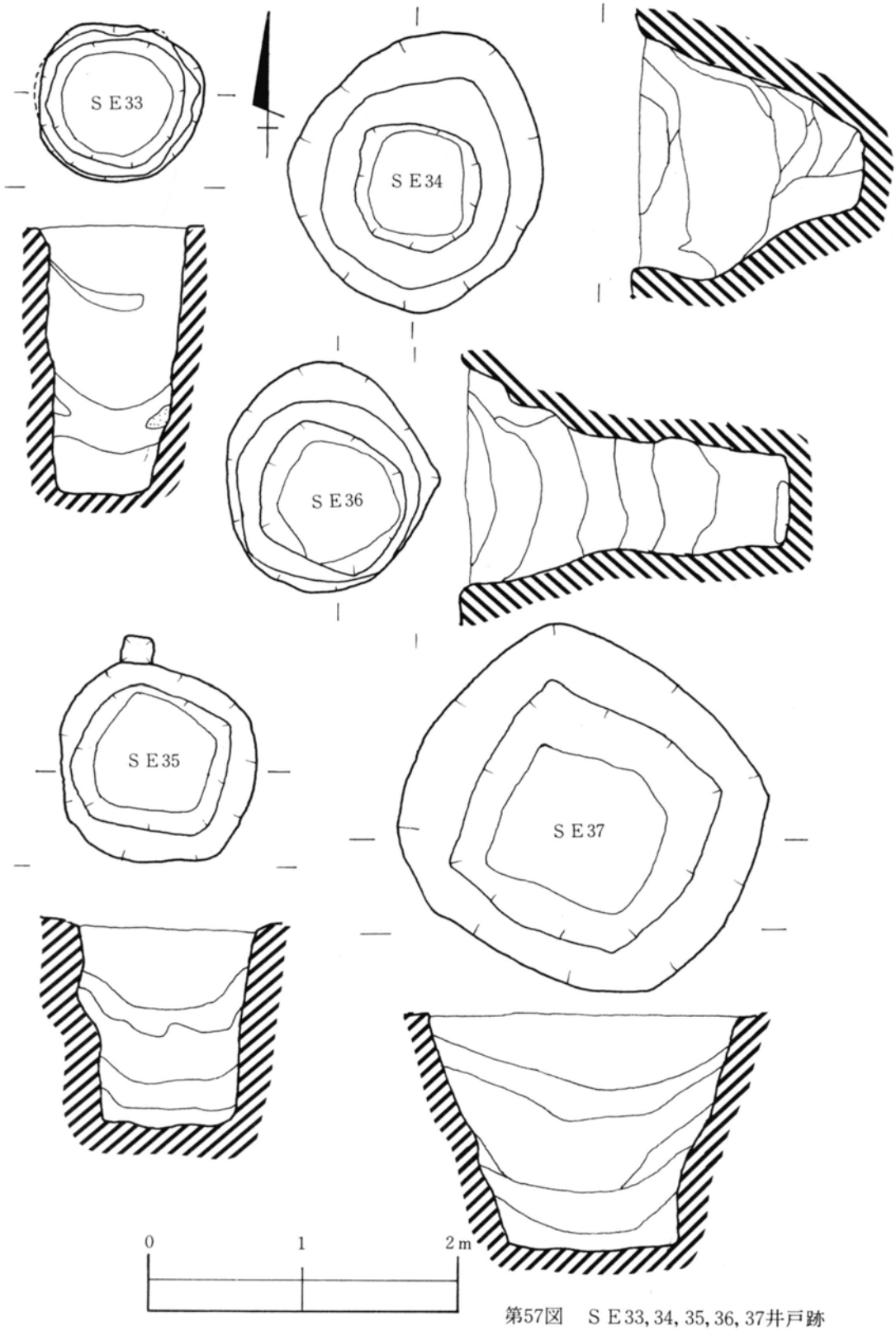
SD 2 構は、A・B・C地区にわたり検出した。A地区南東部は弧状をなし、南側中程よりSD 5 溝の北側をSD 4・6 溝と共に並行し、ほぼ直線的に走る。現長約 125 m・幅約50～80cm・深さ約20～



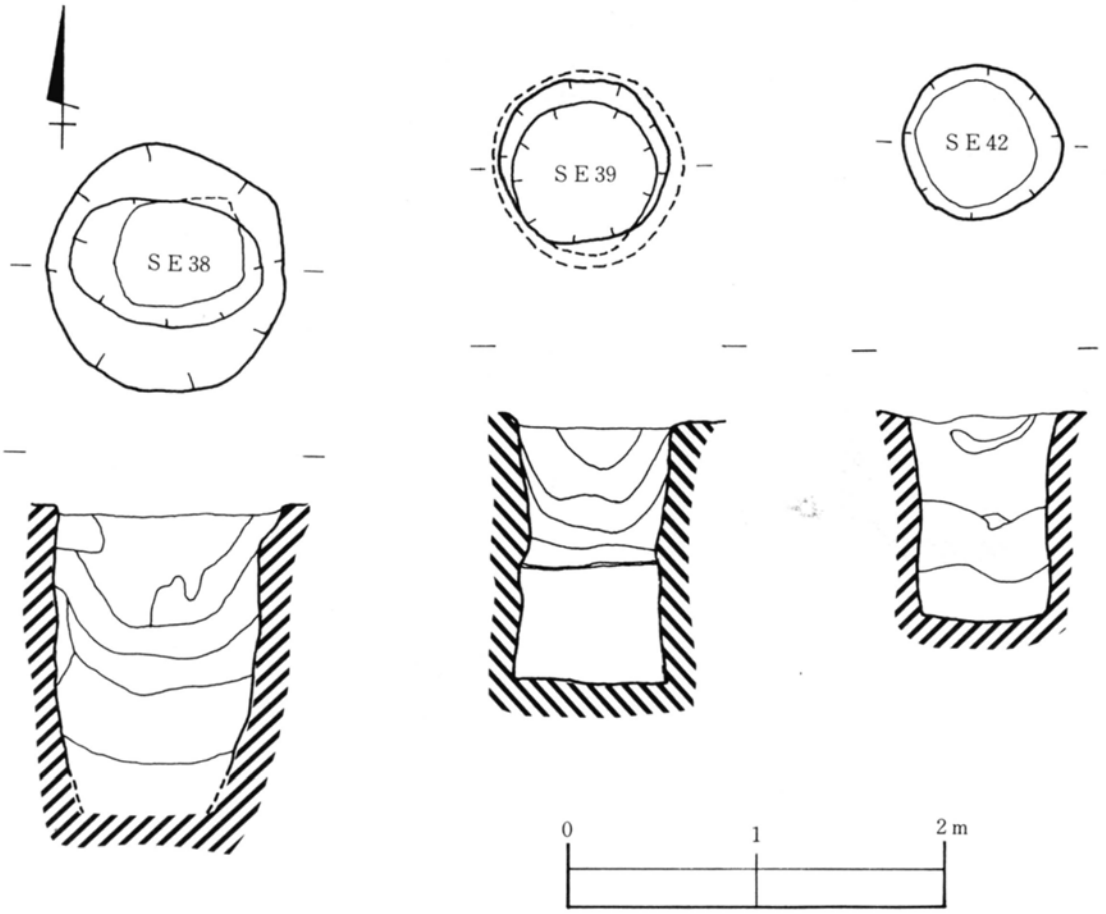
第55図　ＳＥ32井戸跡



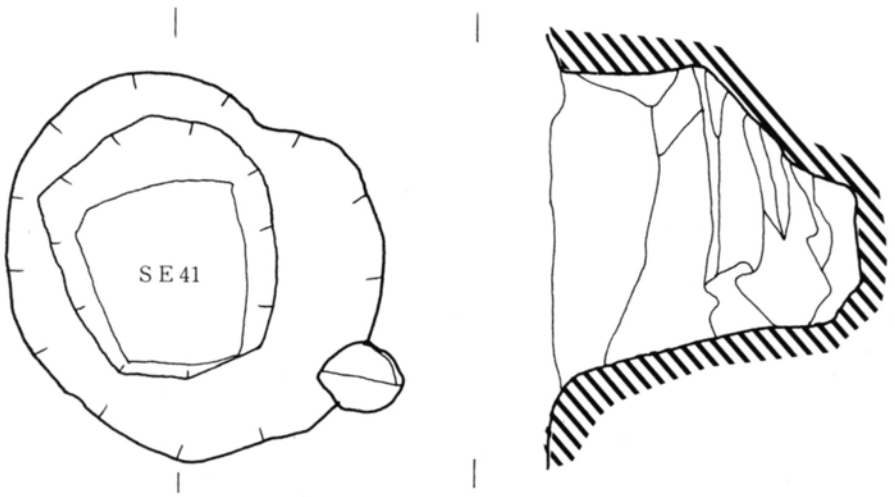
第56図　ＳＥ32井側実測図

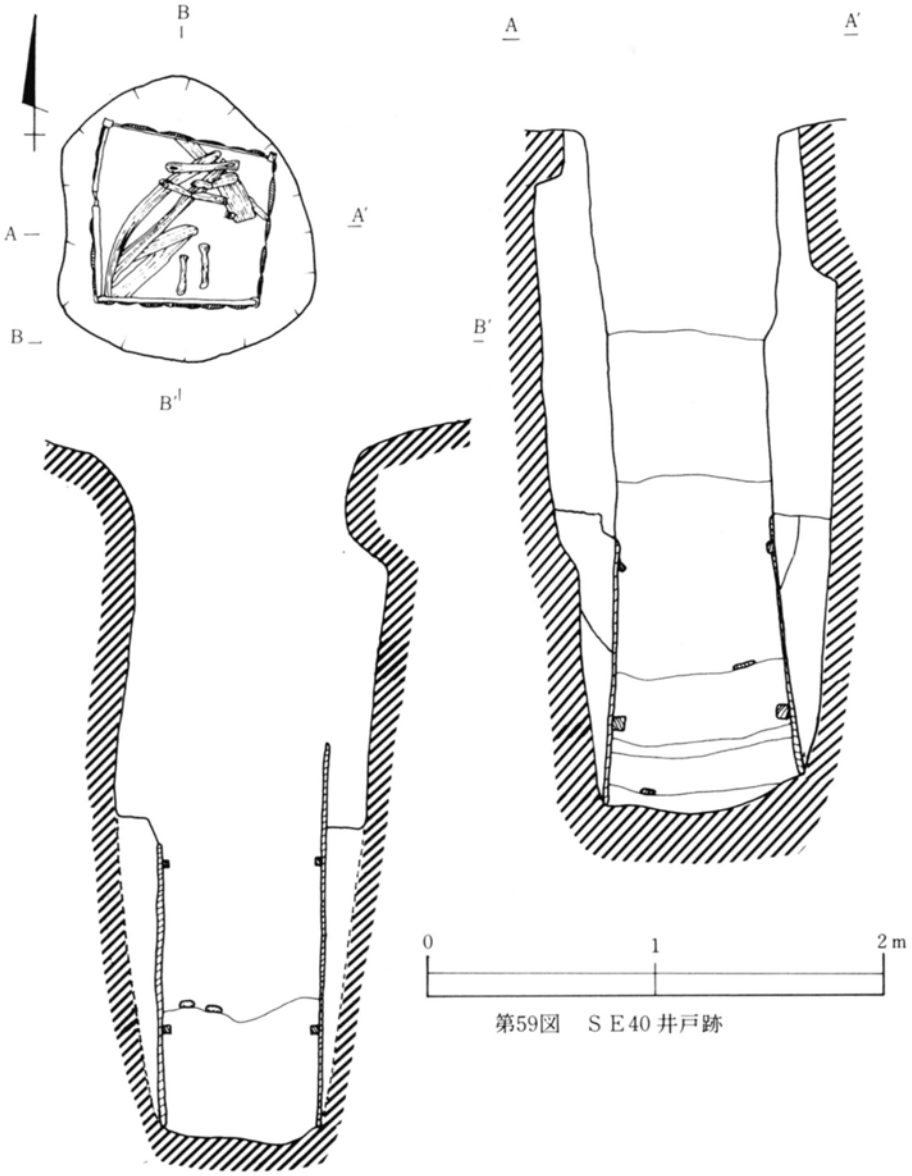


第57図　SE33, 34, 35, 36, 37井戸跡

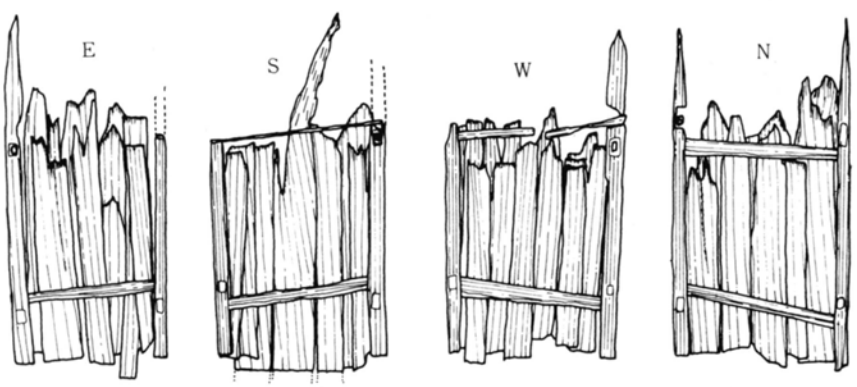


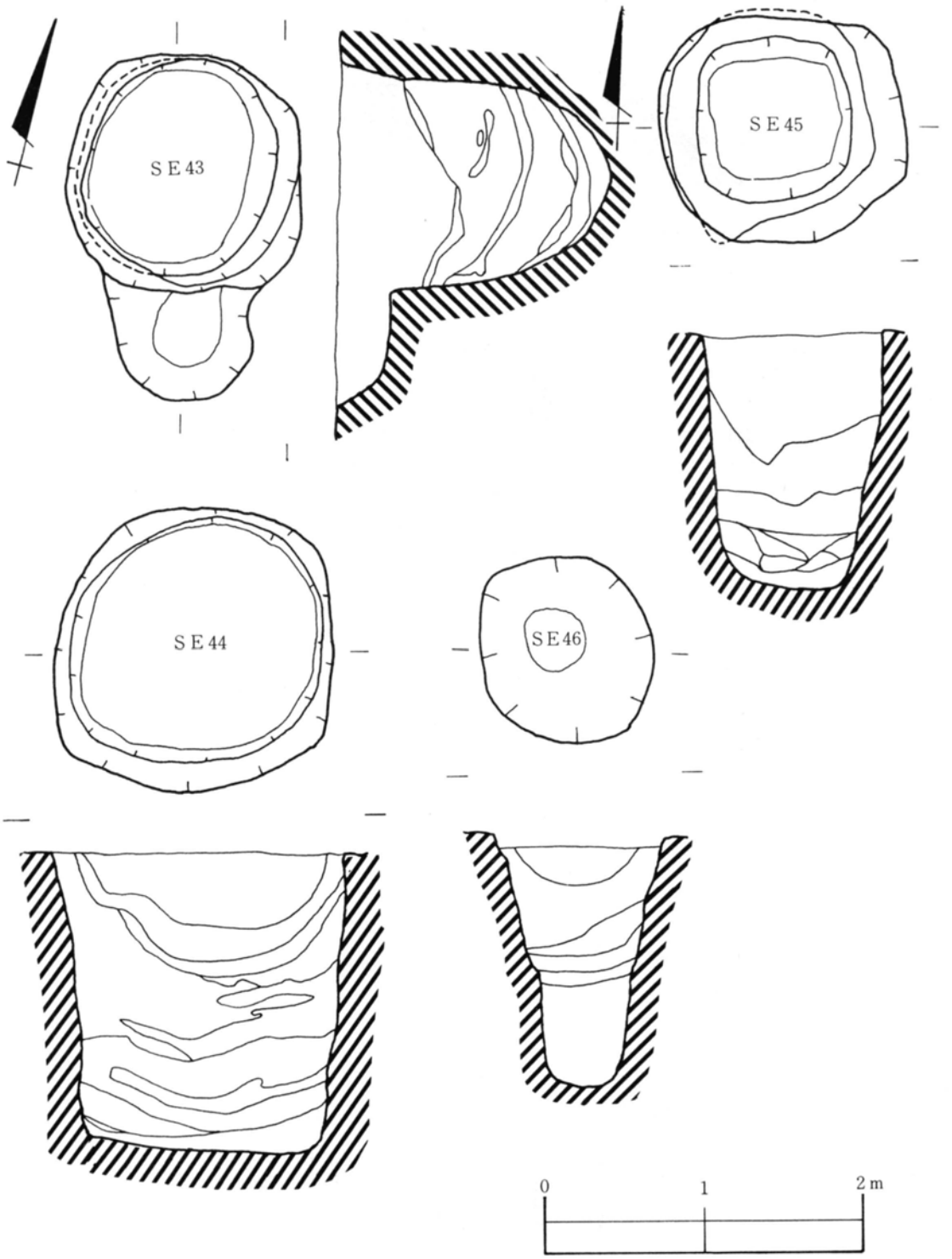
第58図　SE38, 39, 41, 42 井戸跡



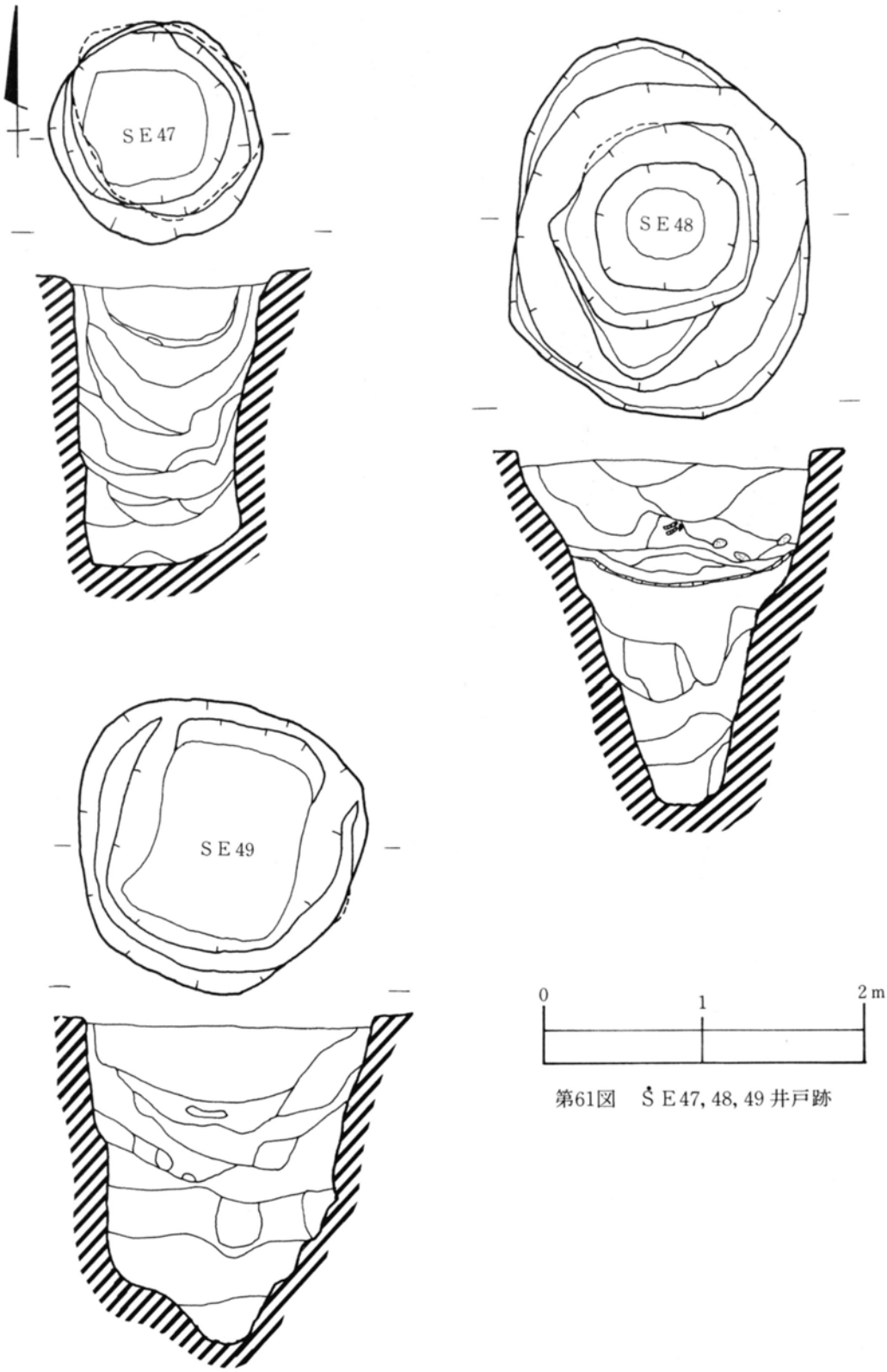


第59図　ＳＥ40 井戸跡

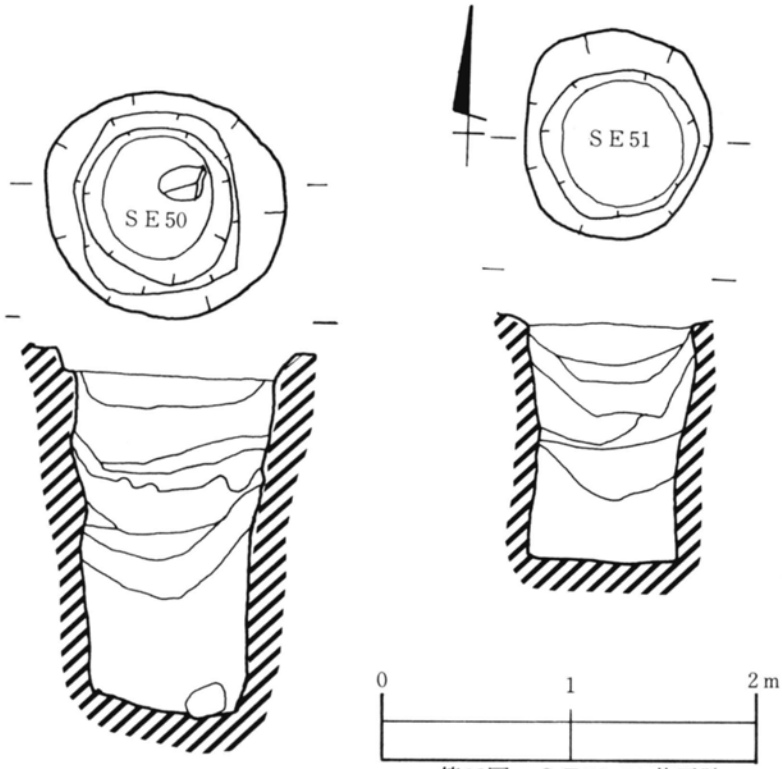




第60図　SE43, 44, 45, 46 井戸跡



第61図　SE47, 48, 49 井戸跡



第62図　SE50, 51井戸跡

40cmを測り、断面はU字形であるが所により鍋底状を呈する。埋土は上層が黒褐色土、下層が灰褐色土で部分的に粘土ブロックが認められる。SD14・15・9溝、さらに小溝らと直交、SE23井戸跡と重複している。B地区西側は一部削平のため未確認となっている。遺物は土師器甕・赤褐色土器、須恵器、中世陶器の破片数点と、小型土錘が出土した。

SD5溝は、A・B地区で検出した溝で、SD2溝とSD4溝の間を並行して東西方向に走る。現長約75m、幅50～80cm、深さ約30～40cmを測る。断面は鍋底状をなし、埋土は上層が黒褐色土、下層が灰褐色土である。A地区南側においてSD4・6溝と交差し、B地区中央部でSK11土坑に切られている。またSD14・15溝、小溝と直交している。遺物は赤褐色土器、須恵器、中世陶器の破片及び小型土錘、砥石などが出土した。

SD4溝は、A・B・C地区にわたり検出した溝である。A地区南側でSD5・6溝と交差し、B地区でSD14溝、小溝と直交、SD5・6溝の間を走る。現長約110m、幅約60～90cmで一部約1.8mを測り、深さは約20～40cmである。断面は逆台形もしくはU字形をなし部分的に粘土ブロックの入る黒褐色土が堆積している。SK12土坑と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。遺物は土師器甕、赤褐色土器、須恵器、中世陶器の破片が出土した。

SD6溝は、A・B地区で検出した溝である。A地区南側においてSD2・5・4溝と交差し、B地区ではSD2・5・4溝の南側を並行し中央部まで走る。SE25井戸跡と重複しているが新旧関係は不明である。現長約65m、幅約40～60cm、深さ約10～15cmと浅く、断面は皿状もしくは部分的に鍋底状をなす。

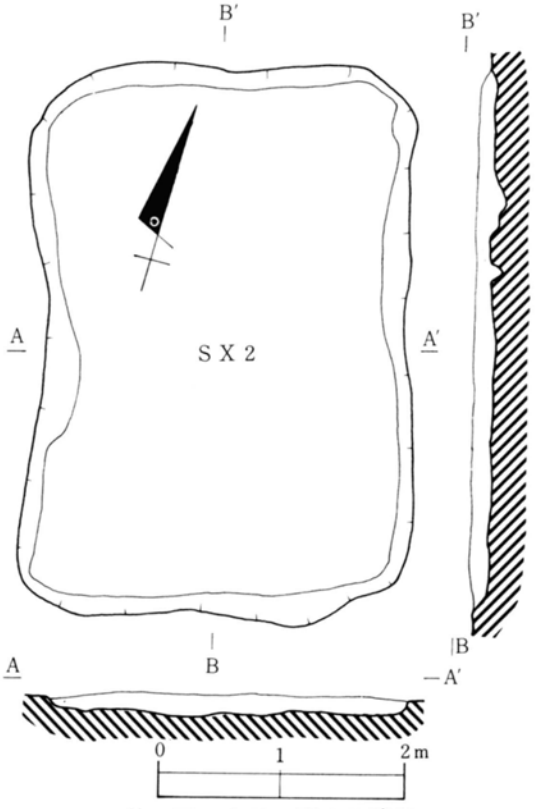
埋土は灰褐色土で下層に少々黄褐色粘土が混入していた。出土遺物はない。

SD 7・8（第2図・図版1）

両溝ともB地区で検出し、X状に交差しており、SD 7溝の方がSD 8溝を切っている。SD 7溝は現長約24m・幅約0.7～1mで鍋底状を呈し、出土遺物はなく、SD 8溝は現長約18m・幅約0.5～1mで鍋底状を呈し、土師器甕・須恵器、中世陶器の破片が出土した。

SD 9・10（第2図・図版1）

両溝ともB地区で検出し、部分的に接触し、北東、南西方向に並行して走る。SD 9溝は、現長約40m、幅約50～60cm、深さ約10～15cmと浅く、黒褐色土が堆積している。SD 2・3溝と直交し、出土遺物はない。SD 10溝は、現長約27m・幅約50～60cm、深さ約10～20cmを測り、中程は未確認、中央部においてSX 1竪穴状遺構に切られている。出土遺物はない。



第63図　SX 2竪穴状遺構

SD 12溝状遺構（第2図）

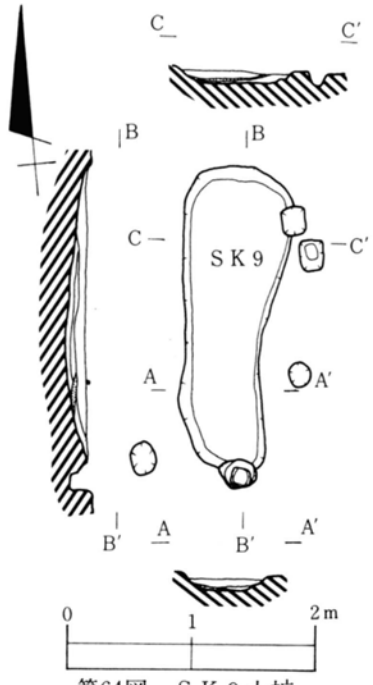
B地区北側において検出した。現長約4.5m・幅約60cmを測り、弧状を呈する。出土遺物はない。

SD 14・15（第2図・図版1）

両溝ともB地区で検出し、深さ約10～15cmと浅く、東西方向に並行して走るSD 2・5・4・6溝と直交するような状態で検出した。両溝とも出土遺物はない。

SD 16（第2図・図版27）

C地区北側において検出した溝である。ゆるく湾曲し、両端とも調査区外へと延びる。本遺跡で検出した溝の中では、最も良好な状態で検出した。現長約52m、幅約0.8～1m・深さ約0.7～1mと深く、遺存状態は良好である。断面はU字形を呈するが、一部底面が平らに掘られている箇所も認められる。埋土は細かくレンズ状に堆積するが、基本的には上層が黒褐色砂・褐色砂・中層が褐色土・茶褐色土、下層が黄



第64図　SK 9土坑

色粘土、褐色粘土で、溝内両壁には黄色粘土、褐色粘土が認められる。遺物は土師器甕・須恵器の破片が数点出土した。

4. 土　坑

本遺跡で検出した土坑はA・B・C地区合せて31基である。形態・性格等は不明である。

以下、主な遺構について述べてみたい。

SK 1（第3図）

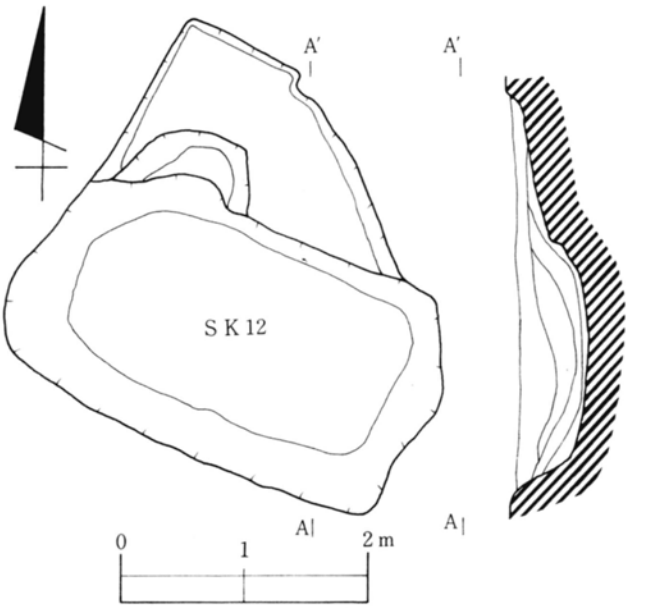
A地区北東部で検出した土坑である。直径約90*cm*のほぼ円形を呈し、深さ約60*cm*を測る。埋土は粘性のある茶褐色土が主で、上部に粘性のある黒色土、黄色砂が堆積する。遺物は土師器甕、赤褐色土器の破片、及び須恵器短頸壺が埋土中程より出土した。

SK 9（第64図・図版25）

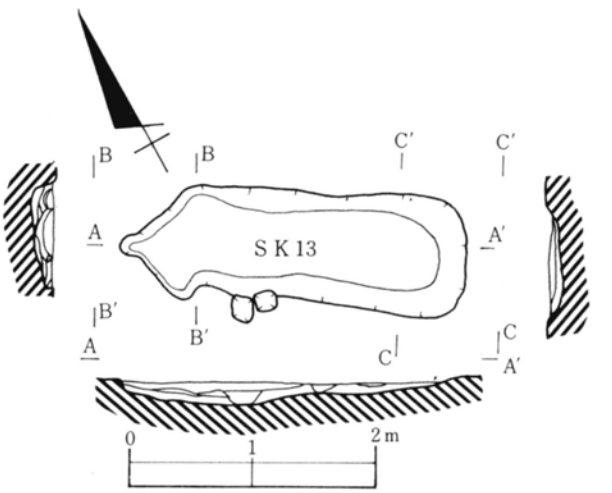
B地区北西部で検出した土坑で、焼土を伴う。長径約2.2*m*、短径約70*cm*で、瓢箪に近い形をなす。深さ約20*cm*を測り壁はゆるく立ち上がる。埋土は第1層暗褐色土・第2層炭化物包含層、第3層暗褐色土が堆積し、埋土全層に焼土・黄色土、灰黄色土、黄色粘土がブロック状に入る。出土遺物はない。

SK10（第4図）

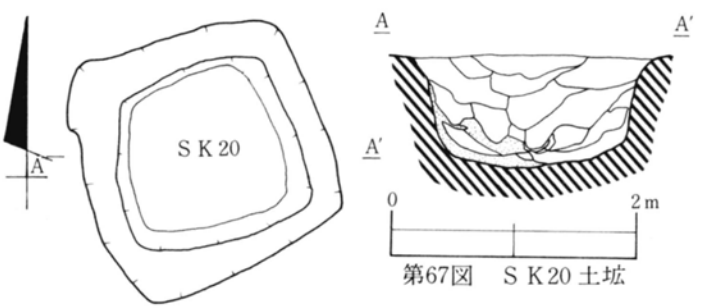
B地区北西部で検出していた土坑で、焼土を伴う。長径約2.1*m*、短径約80*cm*で、不整隅丸方形を呈する。深さ約20*cm*を測り、壁はゆるく立ち上がる。埋土は暗褐色土であるが、上層に少々黄白色土が堆積し、底面に炭化物が認められる。底面中央部に浅い掘り込



第65図　SK12土坑



第66図　SK13土坑



第67図　SK20土坑

みがあり、黄白色土が堆積していた。焼土は底面炭化物層の土や、埋土内にブロック状に認められる。出土遺物はない。

SK 11（第 4 図・図版25）

B地区中央部で検出した土坑で、SD 5 溝を切っている。直径約 1.5 *m*のほぼ円形を呈し、深さ約0.8～1 *m*を測り、底面はほぼ平らである。遺物は刀子茎・堝坩・瓦・土錘などが出土した。

SK 12（第65図・図版25）

B地区東側で検出した土坑である。SD 4 溝と重複しているが、新旧関係については確認できなかった。長径約 3.5 *m*、短径約 2 *m*で隅丸長方形を呈し、深さ約60*cm*を測る。底面はほぼ平らで、西側に人頭大の川原石がある。埋土は茶褐色土、褐色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積していた。遺物は赤褐色土器、須恵器、中世陶器の破片、土錘などが出土した。

SK 13（第66図）

B地区中央部で検出した土坑で、焼土を伴う。長径約 2.8 *m*、短径約90*cm*で隅丸長方形を呈し、西側が張り出している。深さは約20*cm*で、西側の方が若干深く掘り込まれ、壁は西側が急傾斜し、他はゆるく立ち上がる。埋土は基本的には、暗褐色土、褐色土、黄色粘土が堆積し、黄色粘土粒、赤色粘土粒が部分的に入り込んでいる。焼土は西側の若干深く掘り込まれている部分に分布しており、また埋土内にもブロック状に認められる。遺物は土錘が出土した。

SK 18（第 5 図・図版26）

C地区北側で検出した土坑である。長径約 1.5 *m*、短径約 1.2 *m*で楕円形を呈し、深さ約20*cm*を測る。断面は鍋底状をなし、埋土は主に暗褐色土、黄褐色土、褐色土から成る。埋土中程よりブロック状に焼土の堆積が認められる。遺物は須恵器杯が出土した。

SK 20（第67図・図版26）

C地区東側で検出した土坑である。 2 × 2 *m*のほぼ方形を呈し、深さ約90*cm*を測る。埋土は細分すると15層に分類されるが、基本的には上層が黒褐色土、暗褐色土で、下層がいずれも粘性の強い灰褐色土、黄褐色土、暗褐色土、褐色土で構成され、全層に炭化物を含む。遺物は土師器甕、赤褐色土器、須恵器の破片数点と、鉄滓が出土した。

SK 31（第 3 図・図版27）

A地区中央部で検出した土坑である。北東・南西方向に走る SD 1 溝と、南北方向に走る SD 17 溝と接続しており、一連の遺構と考えられる。長径約 7 *m*、短径約 5.5 *m*で楕円形を呈し、深さ約50*cm*を測り、断面は皿状をなす。埋土は黄褐色土・粘性のある黒色土・粘性のある暗褐色土が主で、底面に黄色土、やや粘性のある灰褐色土、黄色土、粘性の強い黒色土が部分的に入り込んでいる。なお出土遺物はない。

5. その他の遺構

本遺跡からB地区1基・C地区2基の竪穴状遺構を検出した。いずれも性格は不明である。

SX 1竪穴状遺構（第4図）

B地区中央部で検出した竪穴状遺構で、SD10溝を切っている。長辺約3.6 m：短辺約2.8 mの隅丸長方形を呈する。深さは約10～15cmを測り、壁の立ち上がりはよく、床面に数個のピットが認められる。遺物は中世陶器甕、及び、研磨された丸石が1個出土した。

SX 2竪穴状遺構（第63図）

C地区北東部で検出した竪穴状遺構である。

長辺約4.4 m、短辺約3 mの隅丸長方形を呈する。深さ約10～20cmを測り、床面に凹凸がみられる。埋土は炭化物・ローム塊の混入する暗褐色土が推積する。出土遺物はない。

SX 3竪穴状遺構（第5図）

C地区西側で検出した竪穴状遺構である。

長辺約1.9 m・短辺約1.6.mの隅丸長方形を呈する。出土遺物はない。

V　出土遺物

本項では、土器類、土製品、石製品、金属製品について述べることとし、木製品については別項を設けた。

1. 土　　器

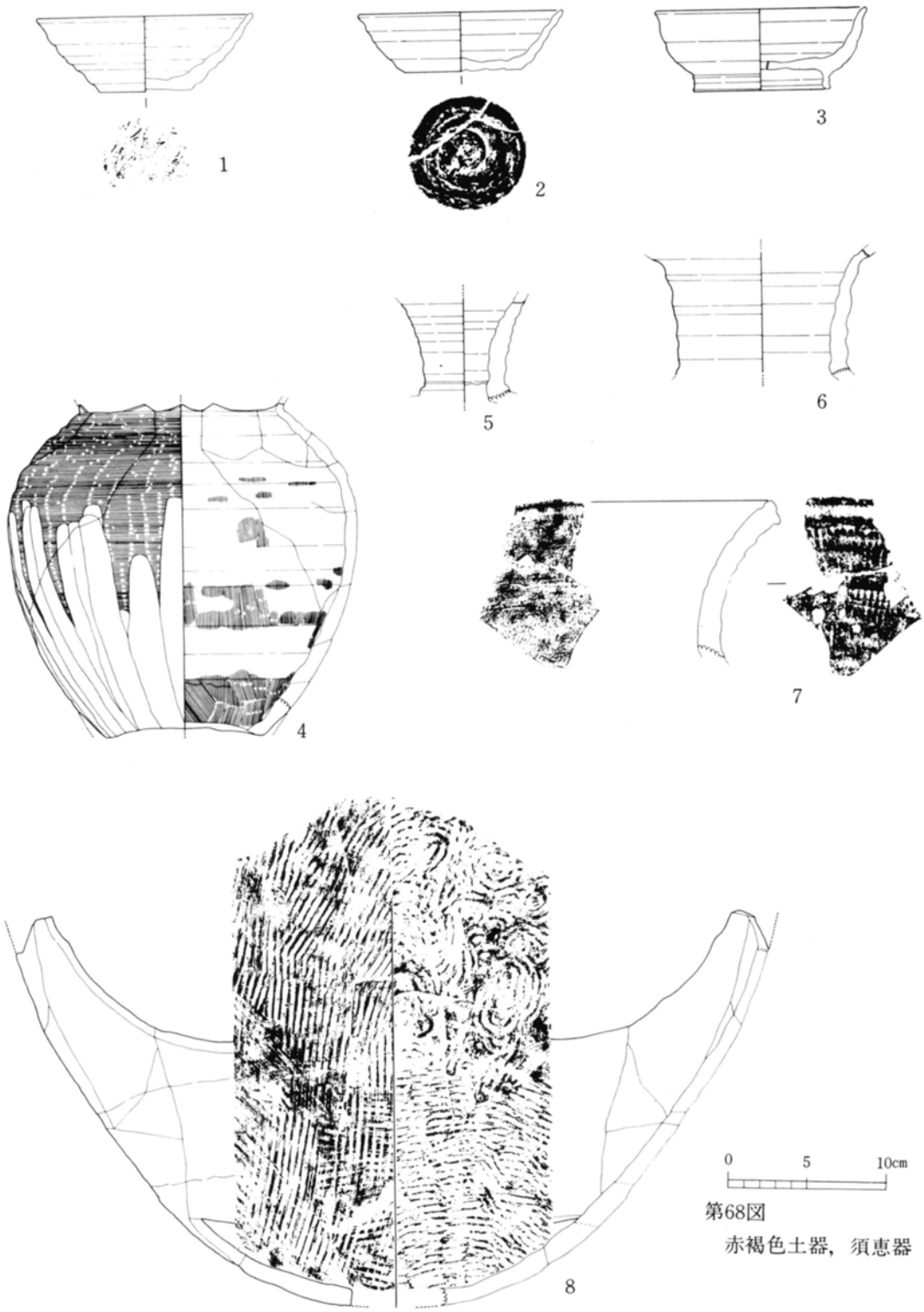
土器類としては、土師器、須恵器、赤褐色土器、青磁、中世陶器が出土している。調査面積、検出遺構の数に比べ、遺物出土量は極めて少ない。

中世陶器はいわゆる須恵器系中世陶器で、形態、整形技法など珠洲古窯跡出土のものに類似する。また、表採品であるが中世陶器としては、越前焼の甕と考えられる破片が出土している。土師器は、内面黒色処理の杯、内外面にカキ目のある甕などの小片が出土しているが、図示しえなかった。

他に、土製品としては硯、土錘、金属製品としては刀子、釘、銅銭、石製品としては砥石が出土している。

赤褐色土器（第68図、図版28の1）1（SK－8出土）は回転糸切りで再調整がなく、胎土は小砂粒を含み、軟弱である。

須恵器（第68図、図版28の2～8）2（SK－18出土）は回転ヘラ切り、再調整のない杯で、色調は灰褐色、胎土は軟弱である。3（SD－2出土）は回転ヘラ切りで、台部から中心方向1.5 cm程に回転ヘラケズリ調整の認められる台付杯である。灰青色を呈し、硬質である。4（SK－1出土）は短頸壺である。外面上半は回転利用の横位のカキ目が密に施され、下半全体には巾のある強い縦位の手持ちヘラケズリが行われている。内面は全体にナデが行われ、更に上半は部分的に、底部は全面に外面と同一工具による縦位、斜位のカキ目が施されている。体部には粘土ひもの輪積み（巻上げ）痕が認められる。5（SE－9出土）、6（SE－21出土）は長頸壺頸部破片である。5は体部との接点に一段の



第68図
赤褐色土器，須恵器

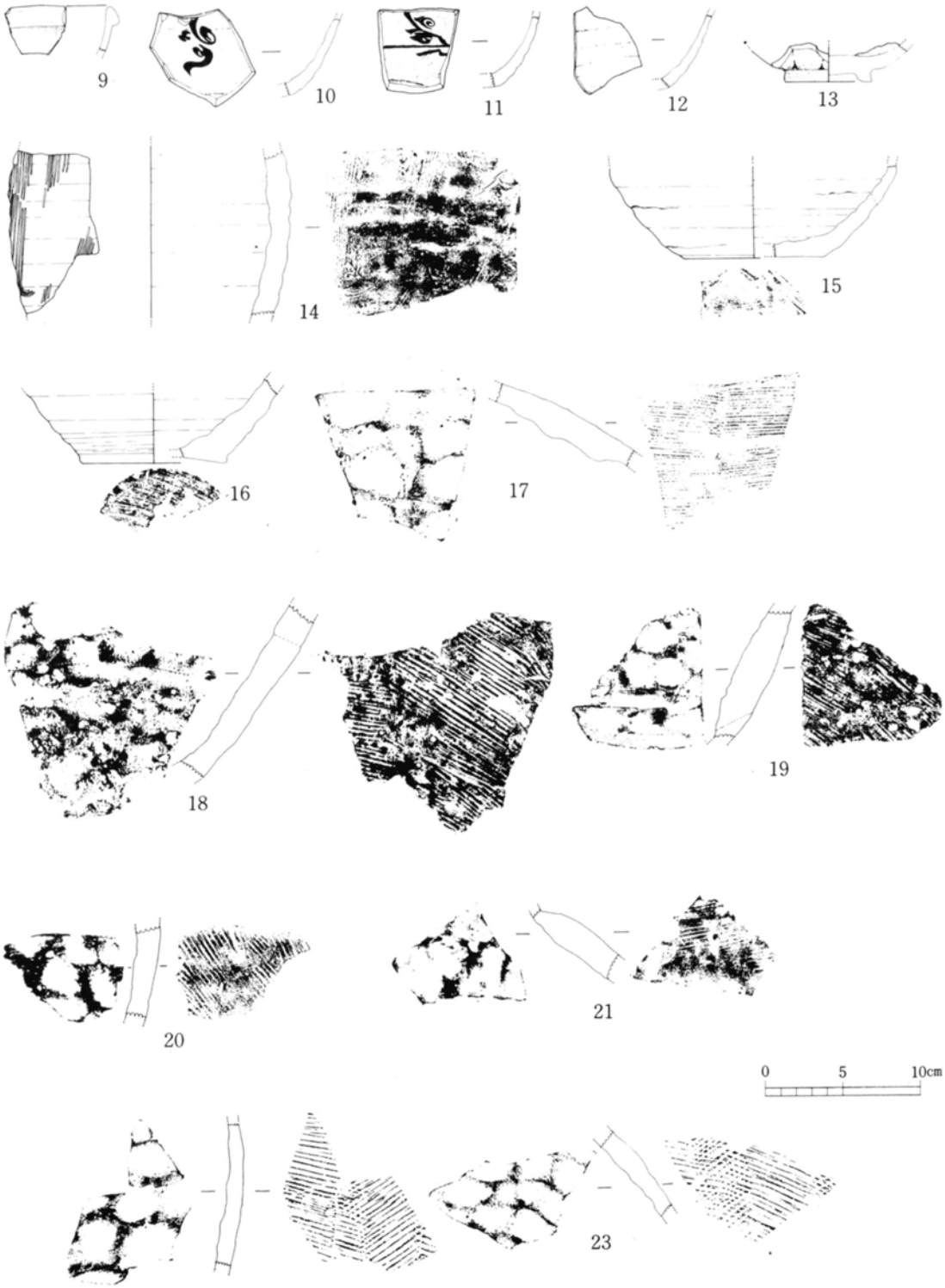
リングが回る。両者とも自然釉がかかり、硬質である。7（SE－10出土）は甕口縁部破片である。外面には縦方向に平行なタタキ板が、内面及び口唇部にはナデが認められる。8（SK－1出土）は大甕底部破片である。外面は斜方向の平行タタキ板痕、内面は上部が同心円、底部付近は平行なアテ板痕が認められる。体部には輪積み（巻上げ）痕と考えられる粘土ひもの接合痕が観察される。

青磁（第69図、図版29の9～13）9（SE－2出土）は口縁に玉縁のつく小型鉢で、推定復原直径13.4㎝程である。玉縁直下の釉の厚い部分では粒状にこまかい気泡が認められる。胎土は、灰白色、釉は灰色をおびた緑色である。10（SE－10出土）は内面に片切彫の渦及び弧状の彫去のある埦である。胎土は灰色、硬質で、釉色はオリーブ色を呈する。11（表採）は10と同種の埦で、10に比べ貫入が著るしい。12（SE－9出土）は下半部に回転ヘラケズリが認められる埦で、貫入は内面及び、外面上半に著るしい、釉色はオリーブ色を呈する。13（SE－10出土）は外面に輪花の浮彫様の彫去の認められる埦で、内外面には貫入が著るしく、釉色はオリーブ色を呈する。

中世陶器（第69図、図版29の14～23、30の24～31、31の32～38）

器種としては壺、甕、片口鉢が認められ、形態、整形技法、胎土などから須恵器とは異なるものと判断された。

壺14（SE－8出土）は外面に、縦位の櫛歯状工具による振幅の大きい波状文の施された壺である。推定復原で、胴部直径20㎝程と考えられる。胎土は粗く、軟質である。15（SE－10出土）、16（SE－47出土）は壺底部破片である。いずれも平底で、静止糸切りである。粘土ひもで成形し、ロクロで形を整えており、接合痕が凹線となって観察される。胎土はいずれも緻密で、硬質、15には黒色の自然釉が認められる。甕　17（SE－9出土）甕肩部破片である。外面は巾3㎝あたり17本の密な、水平の条線状平行タタキ板痕、内面には直径3㎝程の円形のアテ具痕が認められる。胎土は灰白色で砂粒を含み軟質である。18（SE－30出土）甕胴部破片である。底部との接合部で、凹線となった接合痕が認められる。外面は巾3㎝あたり12本の水平、或いはゆるい右下りの太くて深い条線状平行タタキ板痕内面には円形のアテ具痕が認められる。内外面には自然釉がかかり、胎土は硬質である。19（SX－1出土）、甕胴部破片である。18同様に、凹線となった接合痕が認められ、外面の条線状平行タタキ板痕は巾3㎝あたり12本、ゆるい右下りであり、太くて浅い。内面の円形アテ具痕は径約2.5㎝、胎土は赤色を帯びた灰色で軟質である。20（SE－25出土）、甕胴部破片である。外面の条線状平行タタキ板痕は巾3㎝あたり9本、右下りで浅く、内面の楕円形のアテ具痕は長径3㎝、短径2㎝である。胎土は灰青色でやや軟質である。21（SE－3出土）、甕肩部破片である。外面の条線状平行タタキ板痕は巾3㎝あたり、12本、水平で、浅く細い。内面は長径2.5㎝の楕円形のアテ具痕、胎土は灰褐色で、やや軟質である。22（SE－32出土）、甕胴部破片である。外面は羽状の条線状平行タタキ板痕で、巾3㎝あたり9本、太くて深い。内面は直径3㎝の円形のアテ具痕、胎土は灰青色で硬質である。　23（SE－37出土）、甕胴部破片である。外面は羽状の条線状平行タタキ板痕で、巾3㎝あたり9本、太くて深い。内面は直径3.7㎝の円形のアテ具痕、胎土は灰青色で硬質である。



第69図　青磁，中世陶器壺，甕

片口鉢

片口鉢については内面の櫛歯結束による卸目の状態から以下三類に分けて述べることとした。

1類（櫛歯結束による卸目のない類）

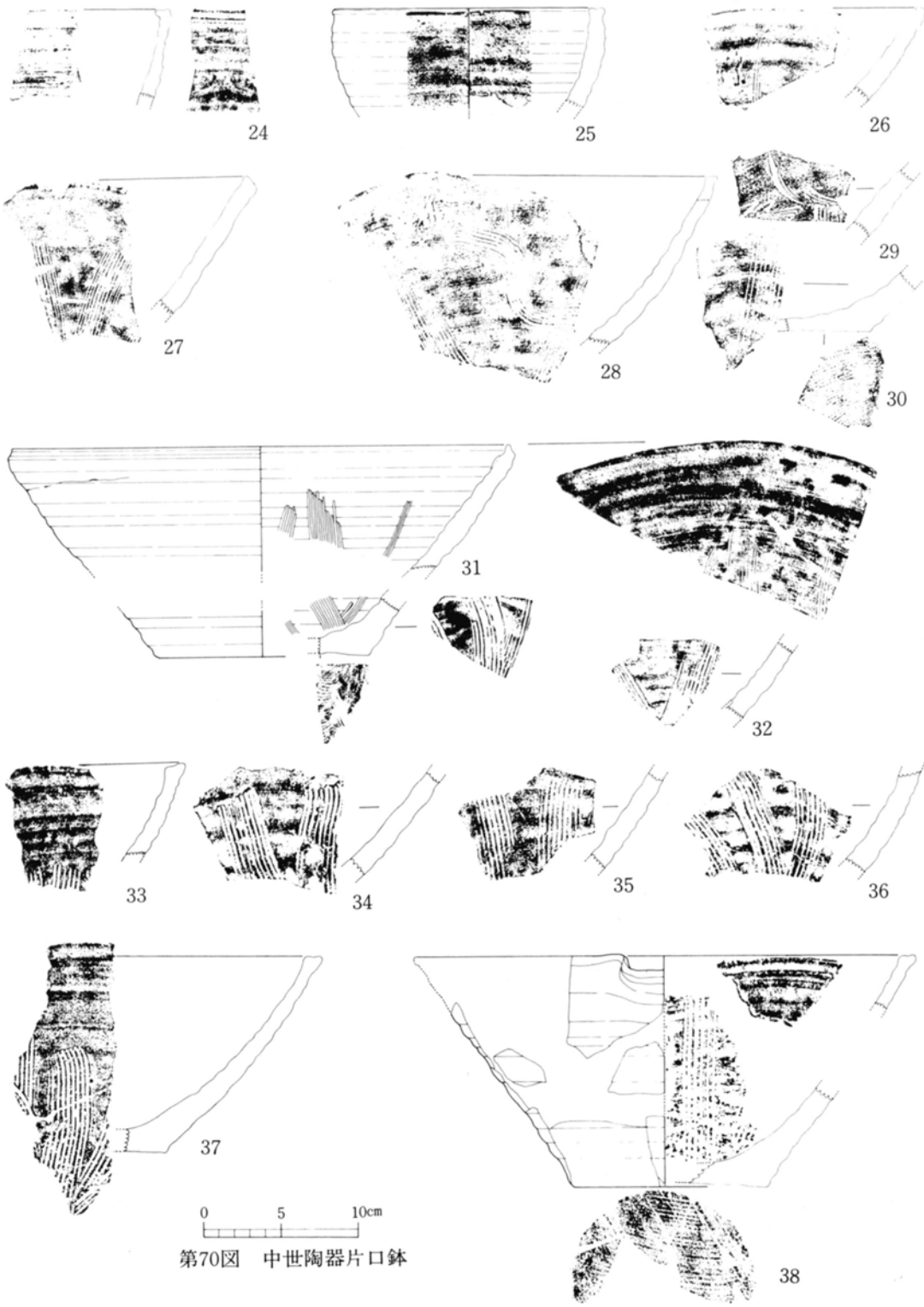
24（SE －39出土）、25（SK －12出土）は、内面に櫛歯結束による卸目の認められない素文の鉢である。推定復原直径18cm程の小型品で、口縁部は水平に仕上げているが、24は端部内面に強く突出するようにつくり出され、25は口縁基部を押え、端部で厚くなる。両者とも、巻き上げ（輪積み）痕と考えられる粘土ひも接合痕が認められ、粘土ひも成形の後、ロクロ整形したものと観察された。25は体部にふくらみを有する。

2類（繊細な櫛歯結束による卸目の類）

A　（曲線文の認められるもの）

B　（直線文のみのもの）

26（SE －10出土）は2類Bに属し、内面に0.5cmあたり、繊細な4本の櫛歯結束である。口縁は基部で軽く押さえ、端部内面にわずかに突出するようにつくり出している。端部外面は丸くおさめている。器厚は口縁に向かい漸次、薄くなる。色調は灰白色を呈し、軟質である。小礫を含み、脱落孔が認められる。27（SD －9出土）は2B類に属する。12本1単位、巾2.2cmの櫛歯結束による繊細な、深い直線の卸目が認められる。口縁形態は、端部内面に先細り、薄手の先端をもちあげるように内湾させ、端部をつまんで爪状に仕上げている。体部に粘土ひも巻き上げ（輪積み）痕が認められる。色調は灰青色を呈し、硬質である。胎土には小礫粒を含む。28（SE－9出土）は2A類に属する。9本1単位、巾1.9cmの櫛歯結束による細密な二条の直線の卸目と、一条の振幅のある波状の曲線の卸目が観察される。口縁形態は基部で押え、端部に厚みをもたせ、平直につくり出している。体部に粘土ひも痕跡が認められ、色調は灰青色、胎土には小礫粒を含み、硬質である。29（SE －3出土）は2A類に属する。12本1単位、巾2cmの櫛歯結束による、振幅の小さい波状文と上部で孤状、下部で直線になる卸目が認められる。胎土には白い砂粒を多量に含み、硬質で、色調は暗灰青色である。体部の屈曲状況から片口付近の破片と考えられる。30（SE －8出土）は2B類で8本1単位、2.2cm巾の櫛歯結束による直線的な卸目が認められる。櫛歯による条線間はすき間があるものの、条線そのものは細く、卸目もまばらで間隔をもっている。底部は弧状に静止糸切り痕が認められる。色調は灰青色、やや軟質である。31（SE －25出土）、32（SK－12出土）も2B類で14本単位、2.2cm巾の櫛歯結束による細密の卸目が認められる。各卸目は間隔をもつ。口縁形態は端部をつまんでわずかに内湾させ薄く、仕上げている。従って口縁、外面に一段の稜を形成している。色調は暗灰褐色を呈し、部分的に黄褐色の縞が入る。内面にはごま振り状に自然釉が認められ、胎土は緻密で、硬質である。32も31と胎土、



第70図　中世陶器片口鉢

色調、卸目が同様で同一個体の破片と考えられる。推定復原直径32cm、器高 13.5 cmを測る。底部切り離し　回転糸切り、体部には粘土ひもの継ぎ目と考えられる凹線が回る。

3類（太い櫛歯結束による卸目）

33（表採）7本1単位、巾2.4 cmの太目の櫛目結束による卸目が認められる。各卸目間の間隔はゆとりのあるものの、2類より狭い。口縁形態は、端部が内傾する。胎土には砂粒を多く含み、硬質であるがザラつきがあり、多孔質である。色調は灰青色を呈する。34(SE －34出土) 9本1単位、巾2.8 cmの櫛目結束、35(SE －19出土)10本1単位、巾3.0 cmの太目の櫛歯結束、灰青色、胎土に砂粒を多く含む。36(SD － 2出土)7本1単位、巾2.1 cmのやや太目の櫛歯結束、赤褐色、軟質、37(SE、20、23出土) 9本1単位、巾2.8 cmの太目の櫛歯結束で、口縁形態は基部を押え、端部に厚みを加えほぼ水平につくり出しているが、わずかに内傾する。体部は全体に丸味を帯びる。切り離しは、底部がわずかしか残存せず判然としないが、静止糸切りと考えられる。胎土は砂粒を含み硬質であるが、器面にザラつきがある。色調は灰青色。器高は12.8 cm。38（SE －23出土)6本1単位、巾2.2 cmの太目の櫛歯結束、内面底部は使用のためか、こまかい敲打痕状の凹凸が認められる。口縁形態は37に類似している。注口部はやや角ばっており、体部より2 cm程突出する。色調は赤褐色を呈するが、胎土は緻密である。底部から口縁にかけて、直線的な立上りで推定復原直径約33cm、器高15cmを測る。

2　その他の出土遺物（第71、72図、図版32の39～97）

39は、表採資料で、風字硯の破片である。裏面、側端にはヘラケズリを施し、直径約2 cmの脚の接着痕が認められる。内外面には黒色の自然釉がかかり、表面一部は使用のため磨滅している。

40、41（SK －11出土)は平瓦の破片である。暗灰青色を呈するが、胎土は軟弱である。叩き板痕、布目痕は認められない。41は端部に巾4.6 cmの粘土板を1.6 cm程突出するように接着し、顎部を造りだしている。

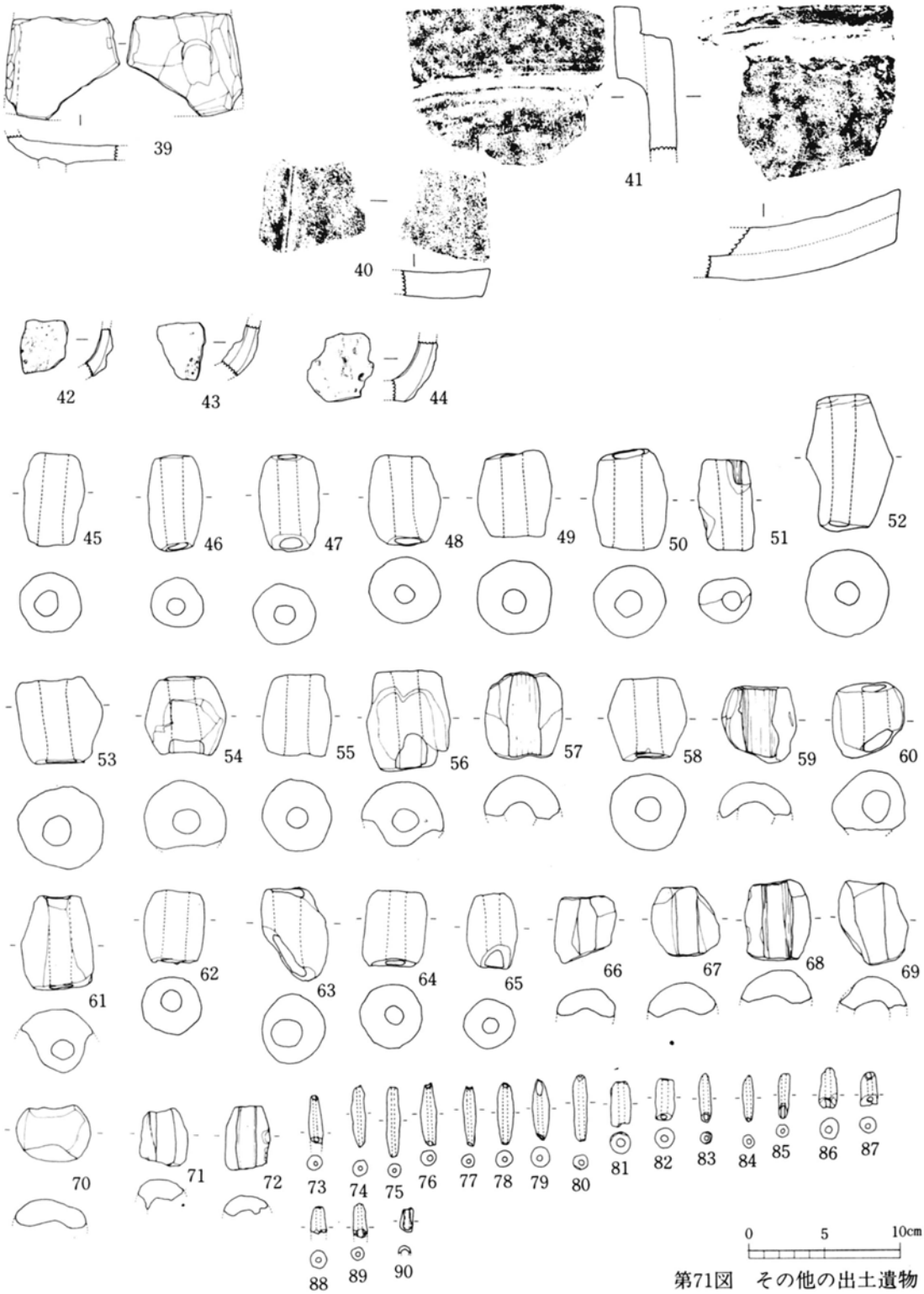
42（表採）43（SK－11出土）44（表採)はるつぼの破片で、内外面にガラス状の残滓が付着している。44は底部に回転糸切り痕が認められる。

土錘は井戸跡、土坑、出土の他、表採品として、計46点が出土している。52のように大型品から、84のような小型品まであるが、すべて有孔、管状の土錘である。形態としては、46のような単純な円筒形のものと、54のような中ふくらみの算盤玉形のものが認められる。

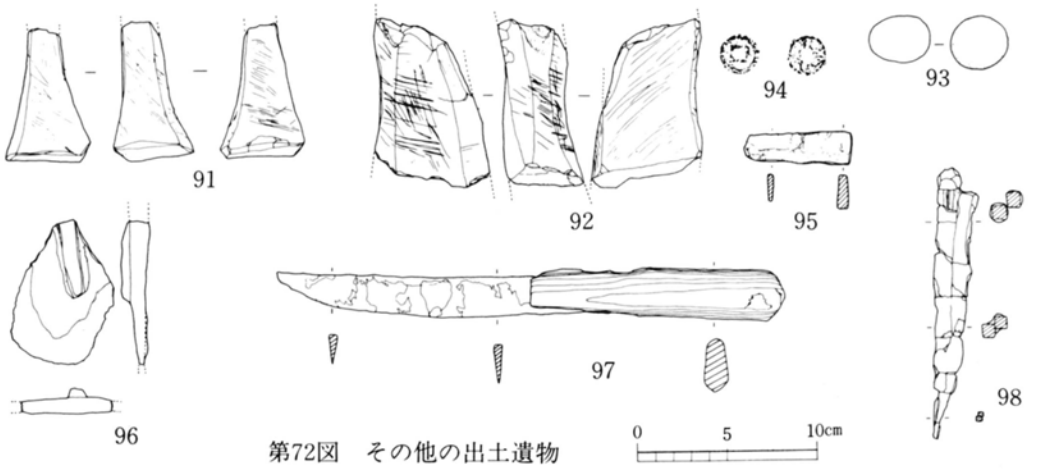
石　製　品

砥石　91（SD － 5出土)は底面形が方形を呈し、方錐台状に上部が、漸次狭くなる。上端は欠損しているが、全面に使用痕が認められる。92（SE － 9出土）は上・下 端が欠損している。6面に面取りされ、全面に使用痕が認められる。特にうち2面には使用痕が著るしく、深い沈線が右下り方向に観察される。91、92ともに緑色凝灰岩である。

磨石　93（SE － 9出土)は、全体に研磨痕が認められ、意識的に丸く磨かれている。



第71図　その他の出土遺物



第72図　その他の出土遺物

銅銭　94（SE－8出土)は銹化が著るしく、貨銘は判読不能である。直径2.15cm、方孔一辺0.79cmを測り、比較的小ぶりな銅銭である。

鉄　製　品

刀子　95（ＳＫ－11出土）は刀子の茎の断片である。97（ＳＥ－３出土）は木製の柄の残存する刀子である。全長は柄を含み28.1㎝、身は切先に向い、わずかにそりを有する。身巾は中央で最大巾をもち2.3㎝、切先、柄に向って漸次、狭くなる。身の厚さは鋒で0.45cm、刃で0.1㎝である。柄は長さ14.2㎝、丸く削り出した柄尻に最大巾をもち2.8㎝である。断面形は楕円形で、厚さは全体に均一で1.6㎝である。柄の鋒、刃側、共に２ケ所に切り込みが認められ、柄を割り込んで茎を挿入している。他に釘などの特別な茎を固定するものが付いていないことから、この切り込みに紐などを巻きつけて、装着したものと考えられる。96（ＳＥ－８出土）は用途不明の鉄製品で、巾0.8㎝、高さ0.5の突起が認められる。

鉄釘　98（ＳＥ－12出土）は銹着した２本の鉄釘である。断面形は方形で、先端に向かい、漸次、細くなり、頭部はわずかに張り出している。

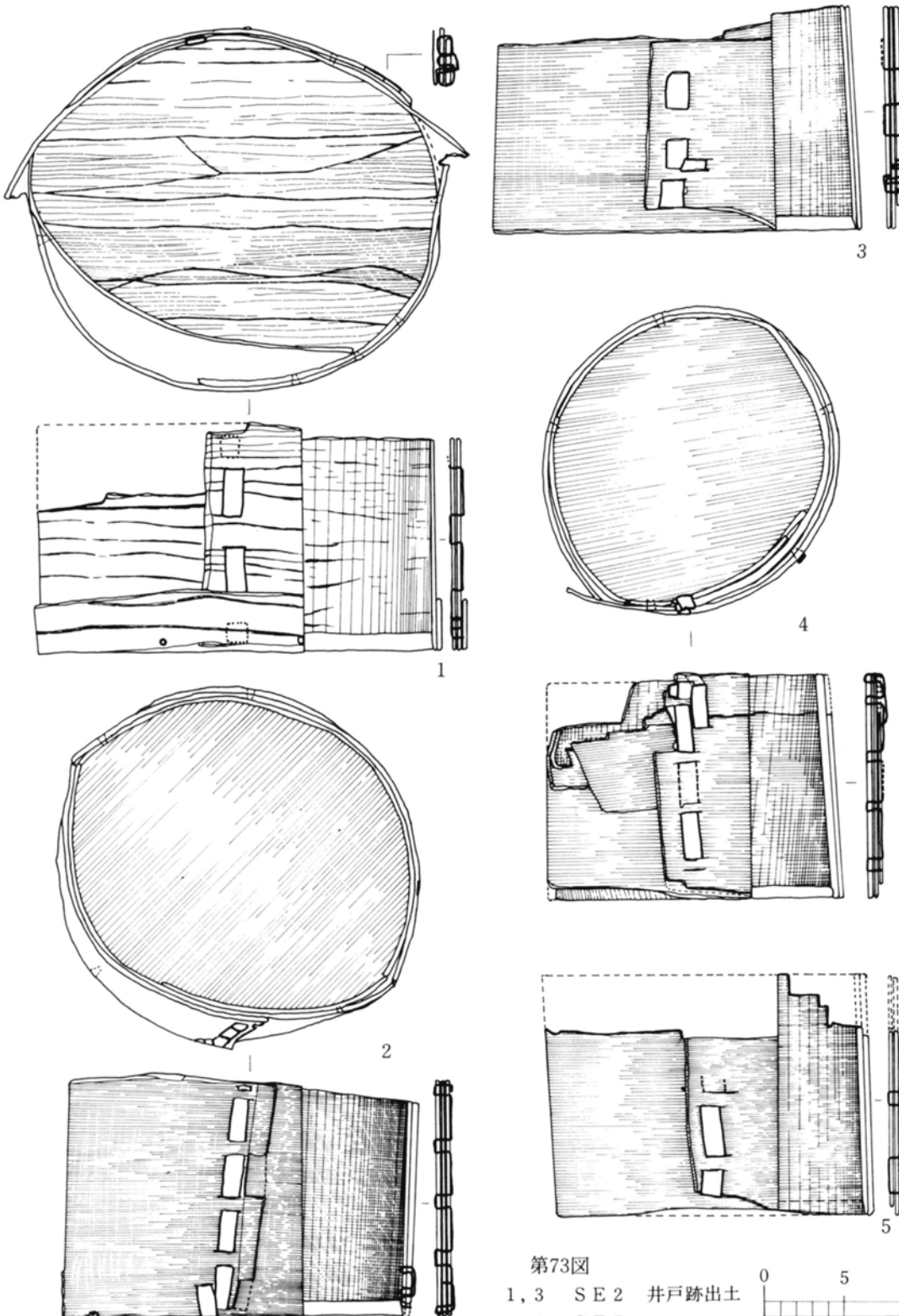
3. 木　製　品

木製遺物はすべて井戸内から出土した。製品および欠損品の図示し得る遺物は少ない。ＳＥ６、22、26、32井戸跡から井側材と考えられる板状遺物が出土したが、形状が不明であったため図示しなかった。

曲物　（第73図　１～５・６～８　図版33）

曲物はSE１～3・8・22・32・40井戸跡から出土しているが、このうち図示し得たのは５個体である。

１は１枚板を右回りに一巻きし、桜皮で綴じた後に下端にさらに巾４㎝の板を重ねて巻き桜皮で綴じている。底板には、遺存する竹釘２個を含めて計９個の釘穴が認められるが、穴の間隔から考えて一部修復されたものと考えられる。また側板は少し目の荒い板目板を使用している。２・３・５は１枚板を右回りに二巻きし、桜皮で綴じている。上部はわずかに欠損し、２には底板と側板の止め釘は



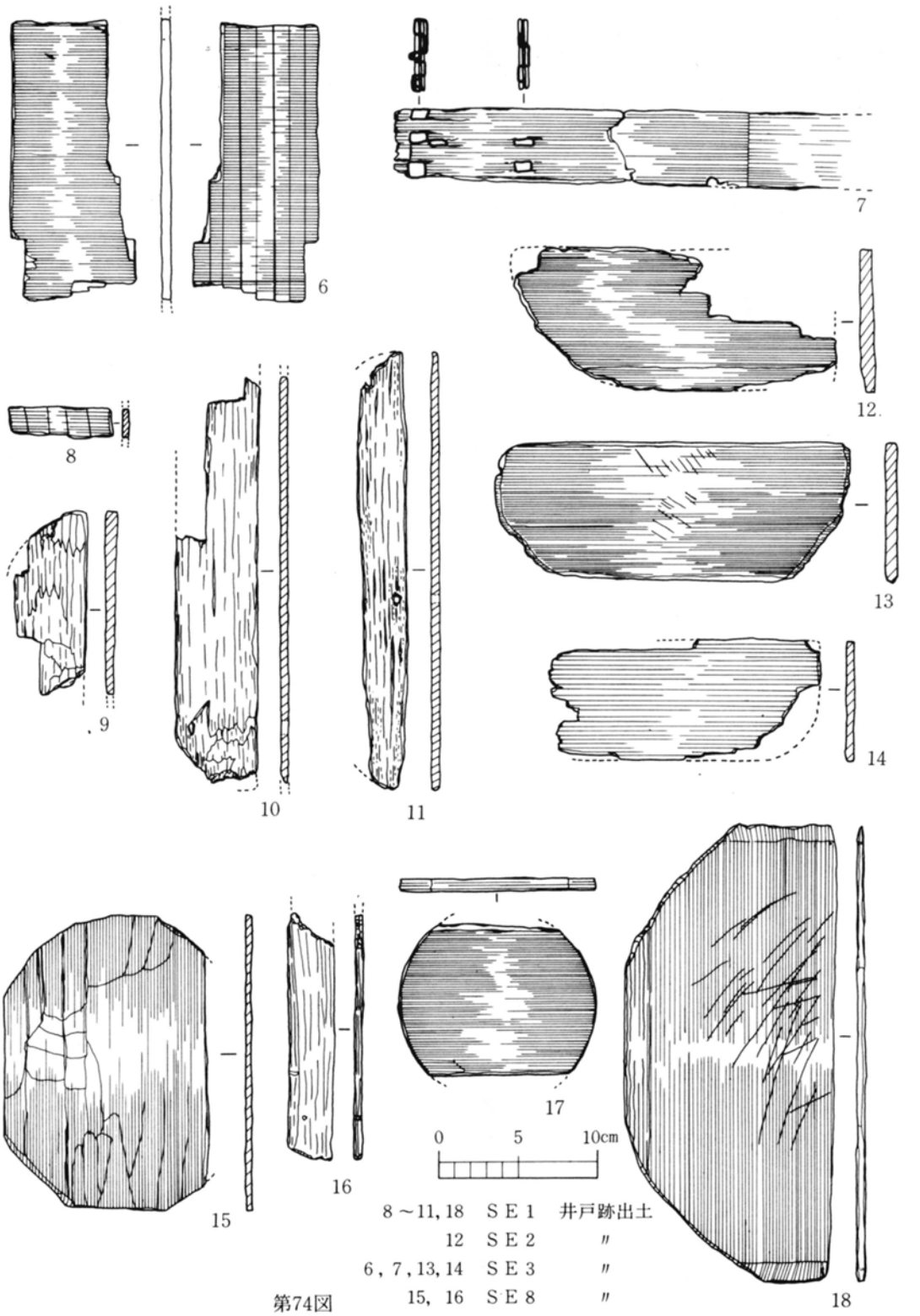
第73図

1，3　ＳＥ２　井戸跡出土

4　ＳＥ５　〃

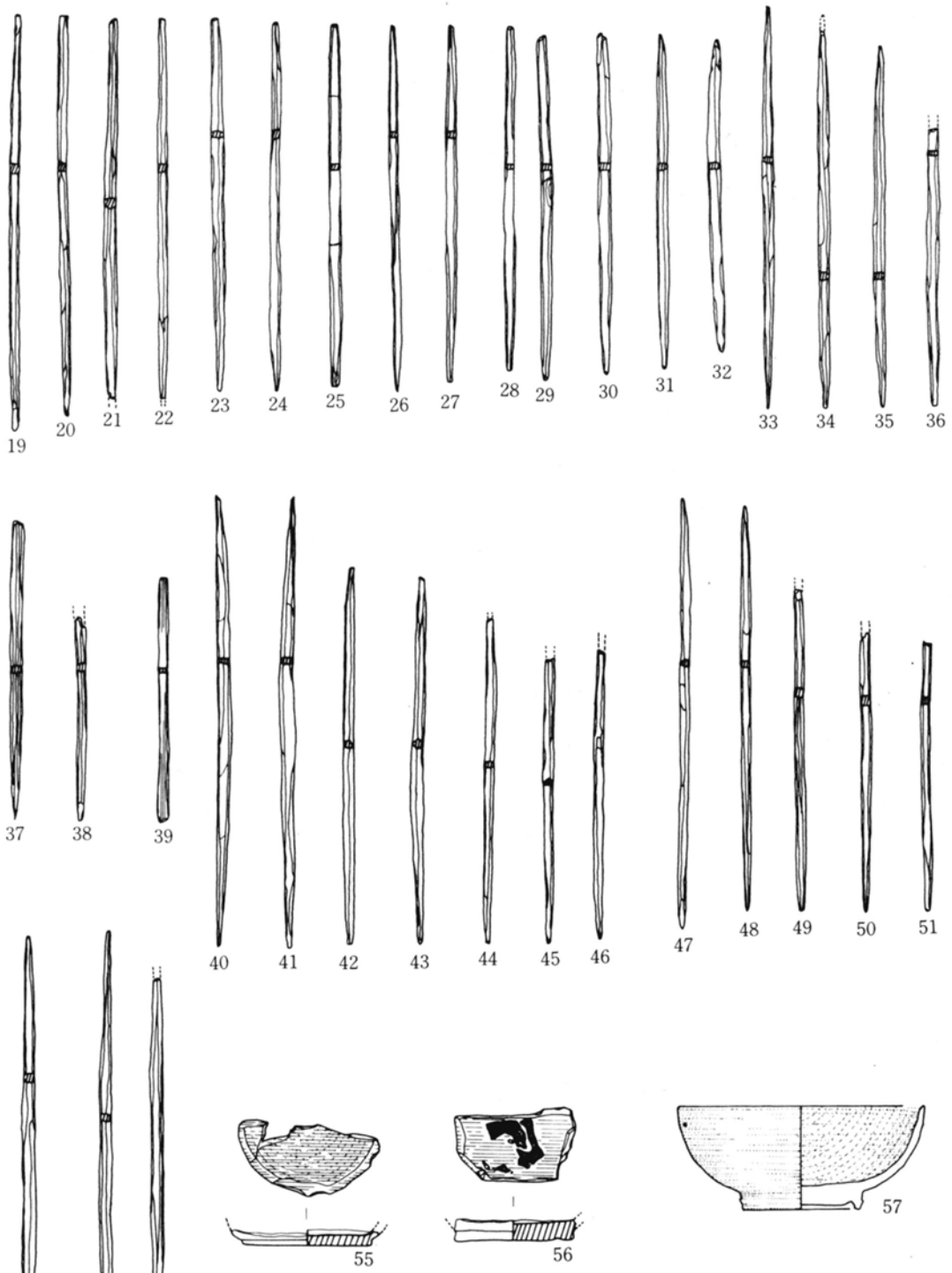
2，5　ＳＥ32　〃

0　5　10cm



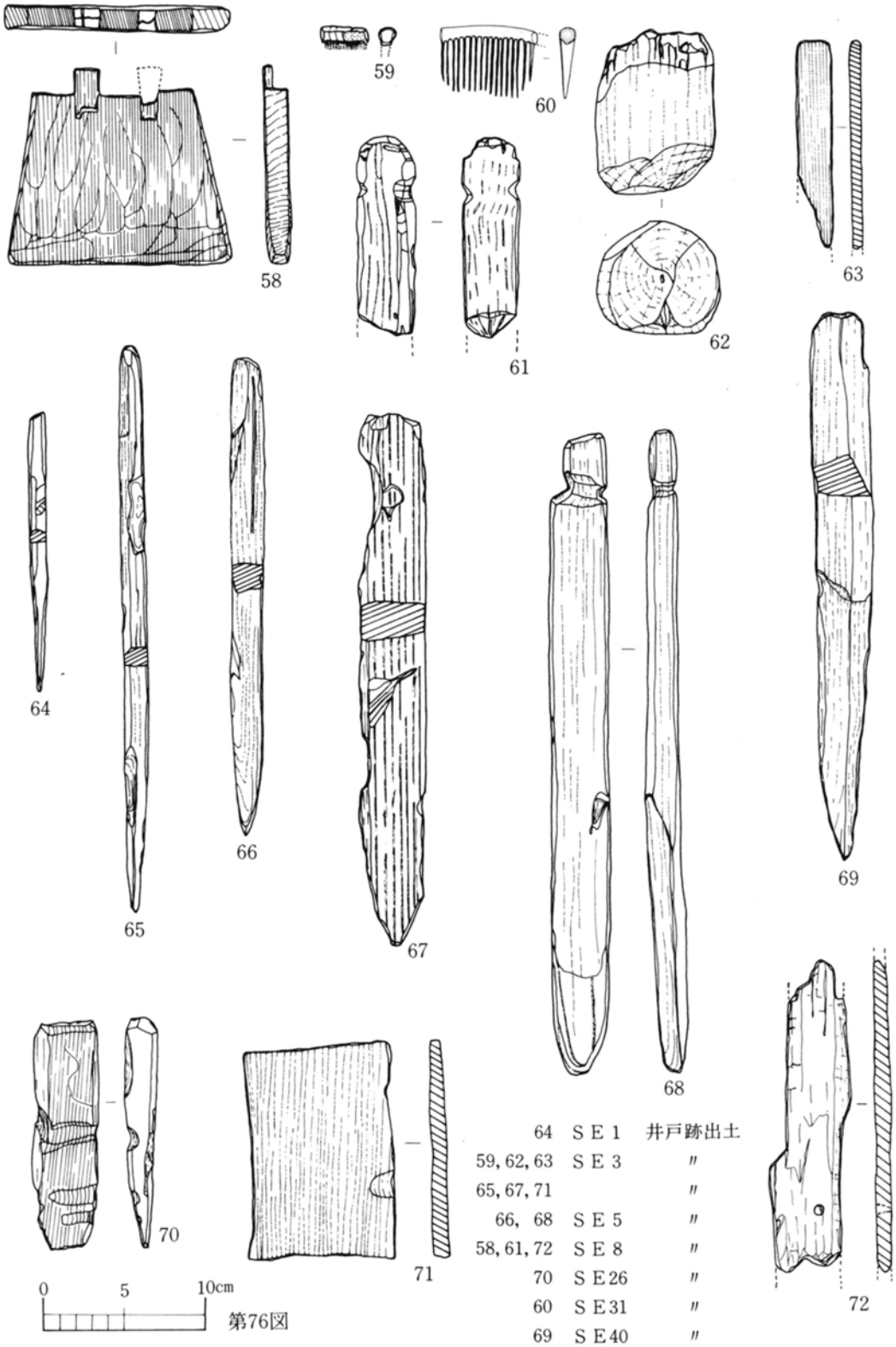
8～11, 18	SE1	井戸跡出土
12	SE2	〃
6, 7, 13, 14	SE3	〃
15, 16	SE8	〃
17	SE10	〃

第74図



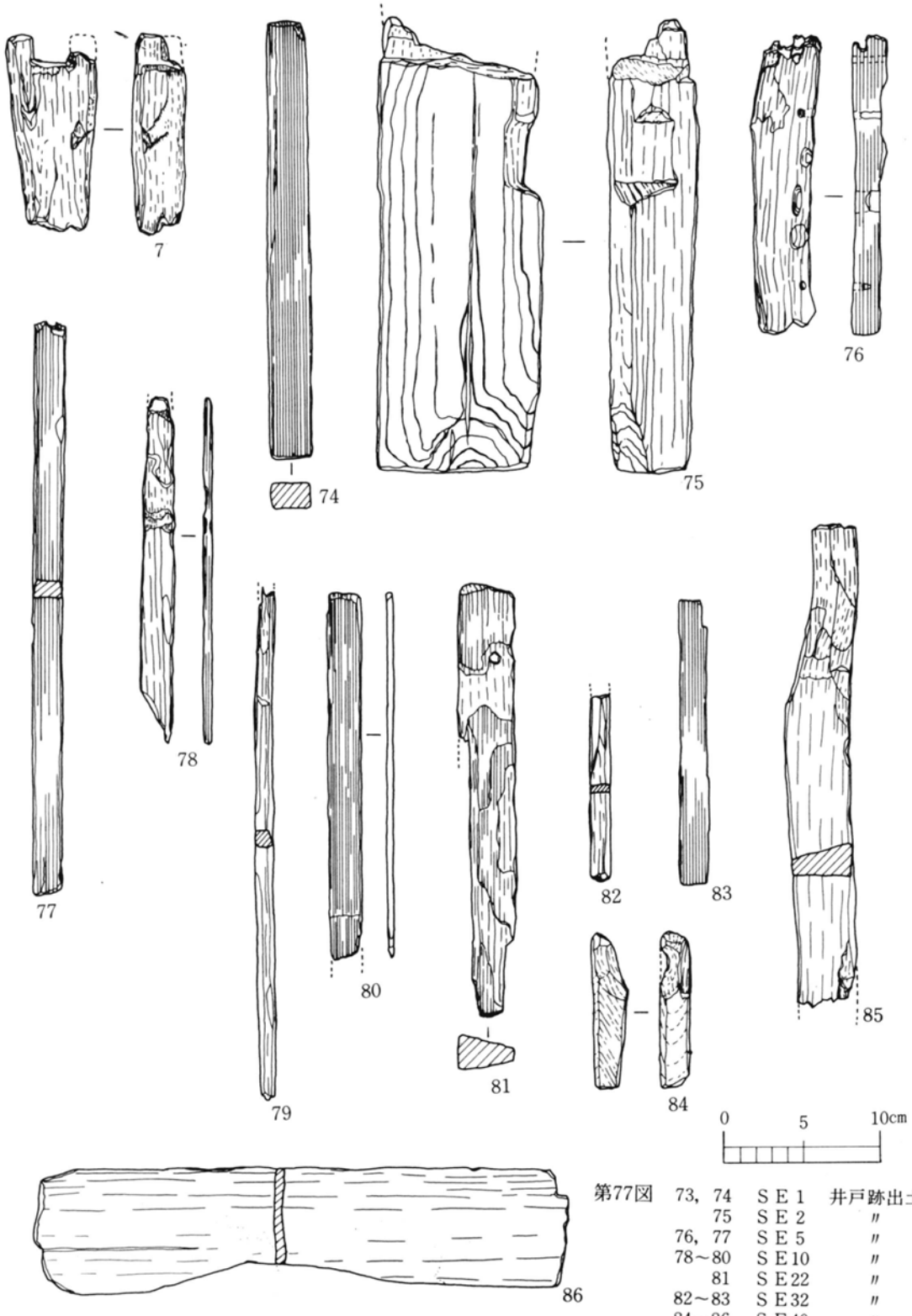
第75図

19～32	ＳＥ１	井戸跡出土	40～46	ＳＥ８	〃
33～36	ＳＥ２	〃	47～51	ＳＥ10	〃
37～39，55～57	ＳＥ３	〃	52	ＳＥ22	〃
			53～54	ＳＥ32	〃



64	S E 1	井戸跡出土
59, 62, 63	S E 3	〃
65, 67, 71		〃
66, 68	S E 5	〃
58, 61, 72	S E 8	〃
70	S E26	〃
60	S E31	〃
69	S E40	〃

第76図



第77図

73, 74	SE1	井戸跡出土
75	SE2	〃
76, 77	SE5	〃
78～80	SE10	〃
81	SE22	〃
82～83	SE32	〃
84～86	SE40	〃

用いられていない。3には竹釘が一本遺存している。5は底板がなく側板にも釘穴は認められない。4は1枚板を左回りに二巻きし、桜皮で綴じ合わせている。底板の4個所に釘穴が認められる。1～5の内面にはいずれも曲げのための巾1㎜前後の切り込み線が刻まれている。1を除きすべて柾目板を用い内面には切り込み線が入る。

底板（蓋）　（第74図　9～18　図版34）

器物の底板か蓋と考えられる。

10・11は長方形を呈するところから折敷とも考えられる。18も周囲の面取り、長辺の2個の釘穴から考え折敷の可能性がある。13・15は周囲の面取りが不整形であり、蓋かあるいは未製品と考えられる。17は周縁を斜め方向に面取り整形を行っていることから曲物の底板と考えられる。

箸状木製品　（第75図　19～54　図版35）

ほとんどは両端を鋭利に削り込んでいるが29・37のようにあまり鋭くないものもある。量的にはSE1井戸跡から最も多く出土しているが、図示した他にSE12・16・23～25井戸跡からも同種の遺物が確認されている。

漆器　（第75図　55～57　図版35）

3点とも漆器椀である。55・56は小片で器高は不明である。底部はわずかに削り出し、高台状底部を造り出している。内外面とも漆が剥げ落ち、ロクロ痕が明瞭に認められる。56は一部二次火熱を受け炭化している。57はほぼ完形で内外面とも黒漆である。底部は削り出し高台である。三点ともロクロ爪痕は認められない。

差歯　（第76　58　図版36）

露卯下駄の差歯が1点出土した。下方が広がる台形状を呈し、差歯枘は二本であるが一本は欠損している。

櫛　（第76図　59・60　図版36）

2点出土している。59は歯厚0.9～1㎜、歯間0.5～0.9㎜の梳櫛、60は歯厚1～1.2㎜、歯間2㎜の挽櫛である。両者ともほぼ直線的な棟で、その断面形はほぼ円形、両端とも欠損している。

クシ状木製品　（第76図　64～69　図版36）

18㎝～40㎝程の長さで一端が鋭利に削り出されている。64～66・69は断面形が方形に近く、68は偏平で頭部に抉りが入っている。

不明木製品　（第76・77図　61～63・70～86　図版36・37）

61は下端が切断されているが上部は整形され、頂部よりやや下部に抉りが入り人形とも考えられる。70は偏平であるが一端は細く楔状を呈する。73は一端に枘穴状の切り込みが認められるが形状は不明である。74は板状製品であるが用途は不明。86は簿い板状の一辺に浅い切り込みを入れたものである。

桜皮　（図版37）

図示し得なかったが、SE31井戸跡底面から長辺6.5㎝、短辺3㎝の大きさに丸められた未使用の

桜皮が出土した。長さは約30㎝程である。曲物等の綴じの材料と考えられるものである。

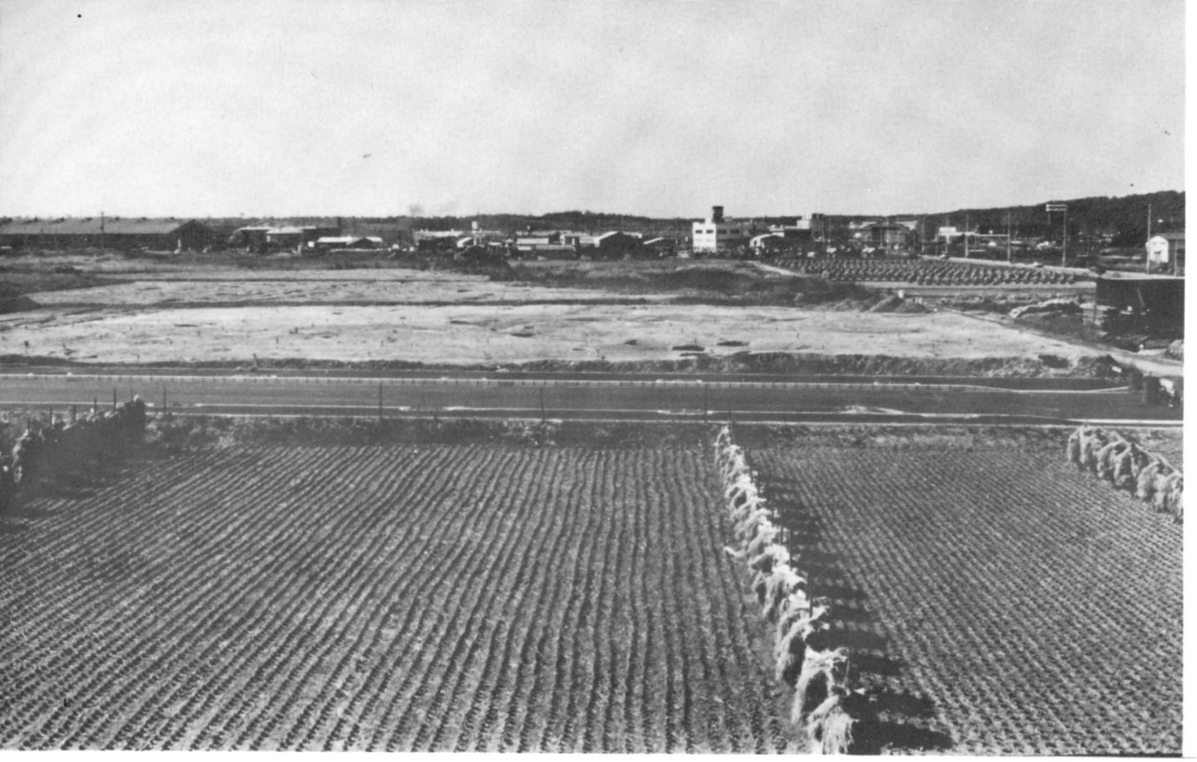
不明木製品のうち大部分は未製品が欠損品で大きさ、形状は復原し得ない。

Ⅵ　まとめ

1. この遺跡は、川尻微高地の一角に営まれた古代末～中世集落跡である。
2. 建物は母屋と倉庫風建物（２間×２間、３間×３間、総柱）に分類できる。これらの建物は桁行および梁行において東西方向に延びる溝とほぼ並行に建てられている。建物の建替えは少なくとも２期考えられる。建物の構造についてはSB－1・34・35・39のように束柱をもつ床張りが考えられるものもある。
3. 表Ⅲに分類したＩタイプの井戸からは、中世陶器を含まず、須恵器、土師器、赤褐色土器が出土しており、検出された井戸跡の中では古い様相を示している。
4. 出土した須恵器系中世陶器は、形態、技法、調整、焼成が珠洲古窯跡出土の陶器に類似するが、珠洲焼そのものであるか、今後の問題点と考えられる。
5. 遺跡の年代は、出土遺物から11世紀～14世紀項で、検出遺構は13世紀を中心とした時期と考えられる。

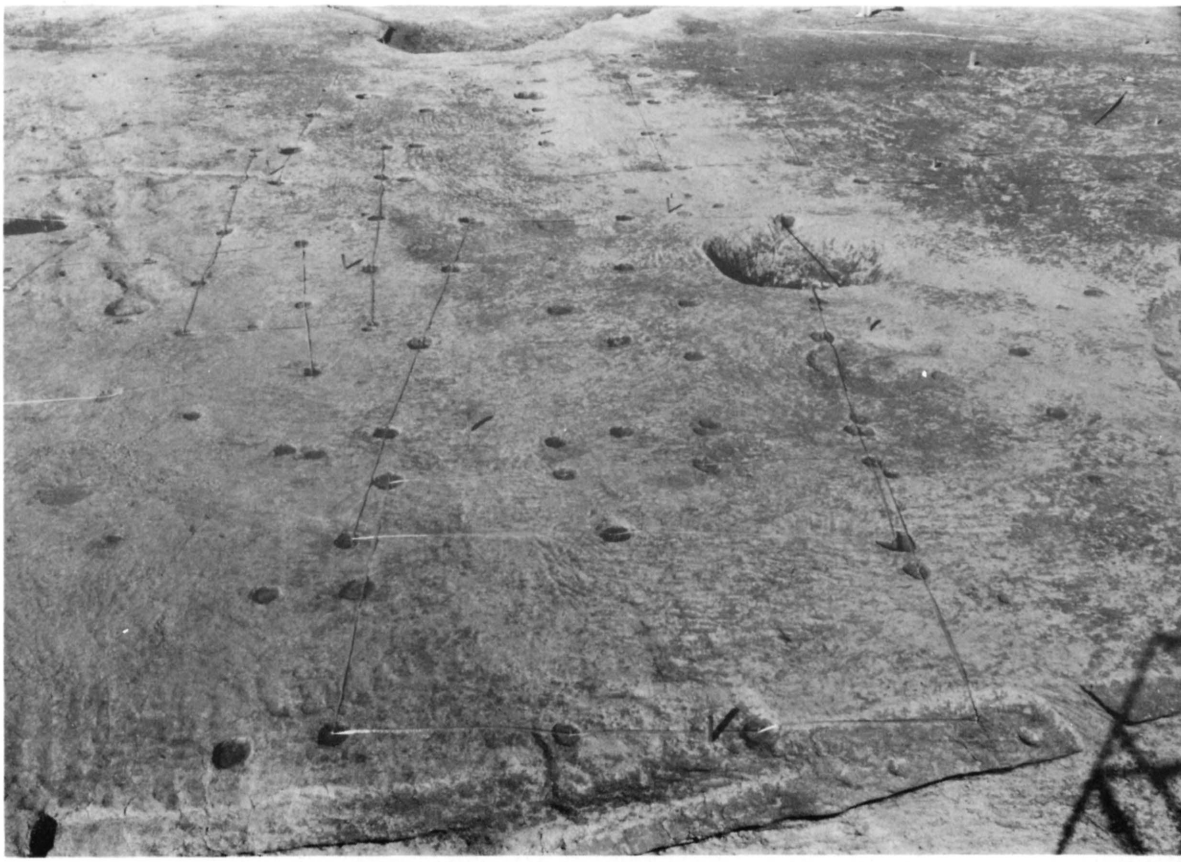
図版１　　上　航空写真　遺跡から高清水丘陵をのぞむ（南→）

下　　〃　　下夕野遺跡全景（北→）



図版２　上　下夕野遺跡全景（東→）

下　ＳＤ２，５，４，６溝跡全景（東→）



図版３　　上　ＳＢ２建物跡

下　ＳＢ６建物跡

図版4　　SB 3，4，5建物跡

下　SB 7，8建物跡

図版５　　上　ＳＢ９建物跡

下　ＳＢ10，13建物跡

図版6　　上　SB16建物跡

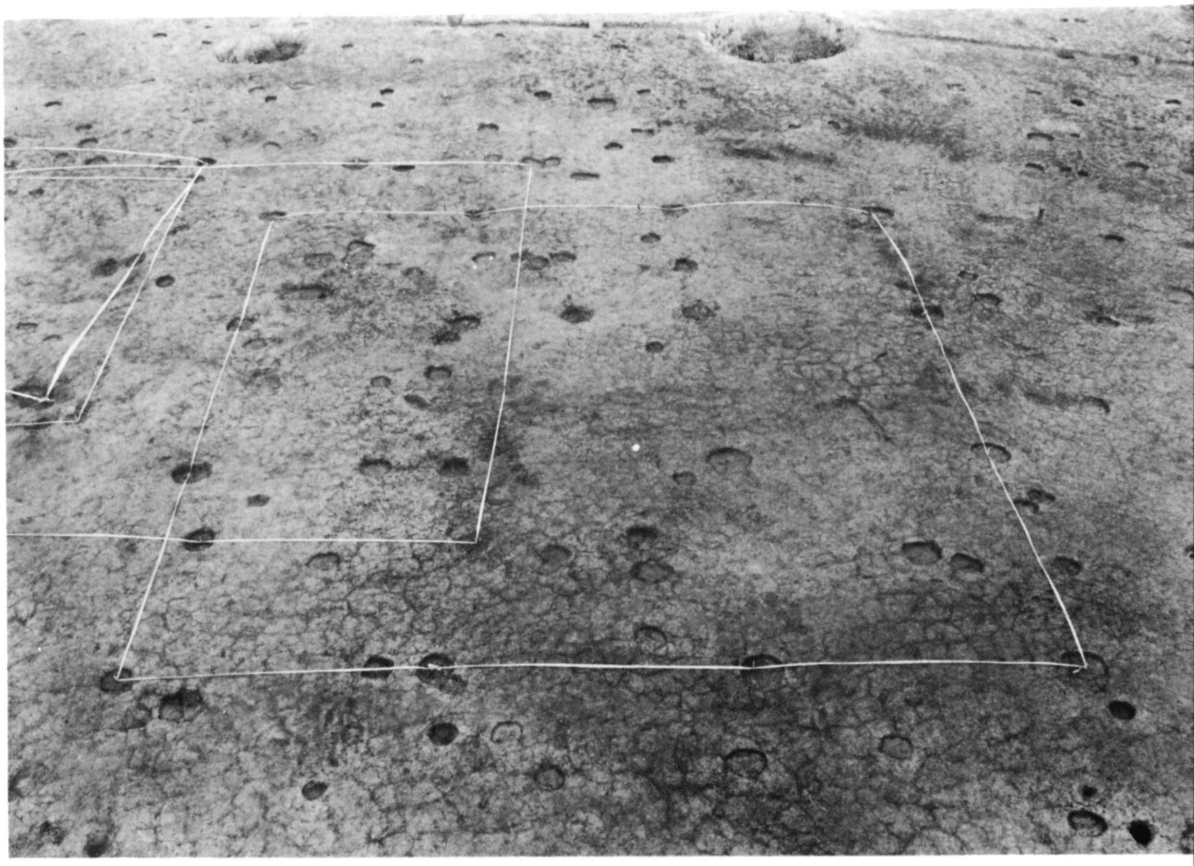
下　SB17建物跡

図版７　　上　ＳＢ18建物跡

下　ＳＢ20建物跡

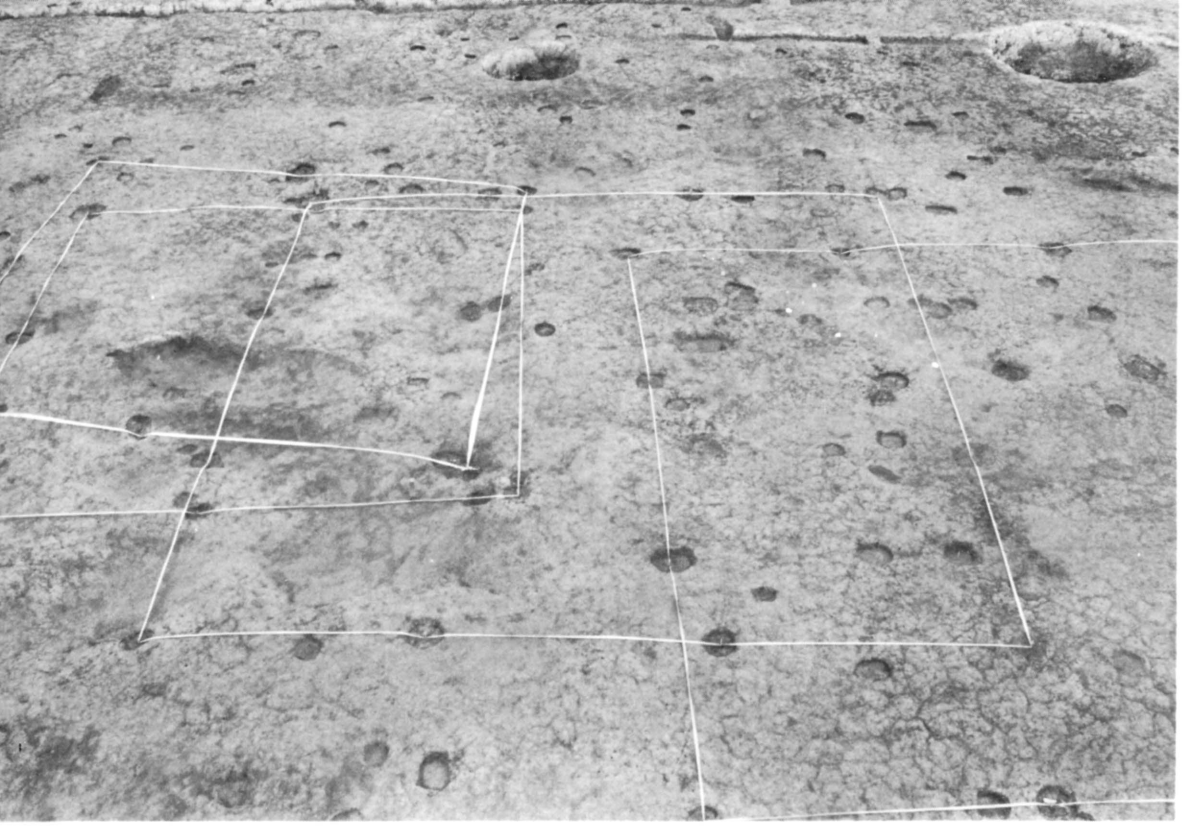
図版８　　上　ＳＢ21～24建物跡

下　ＳＢ25建物跡



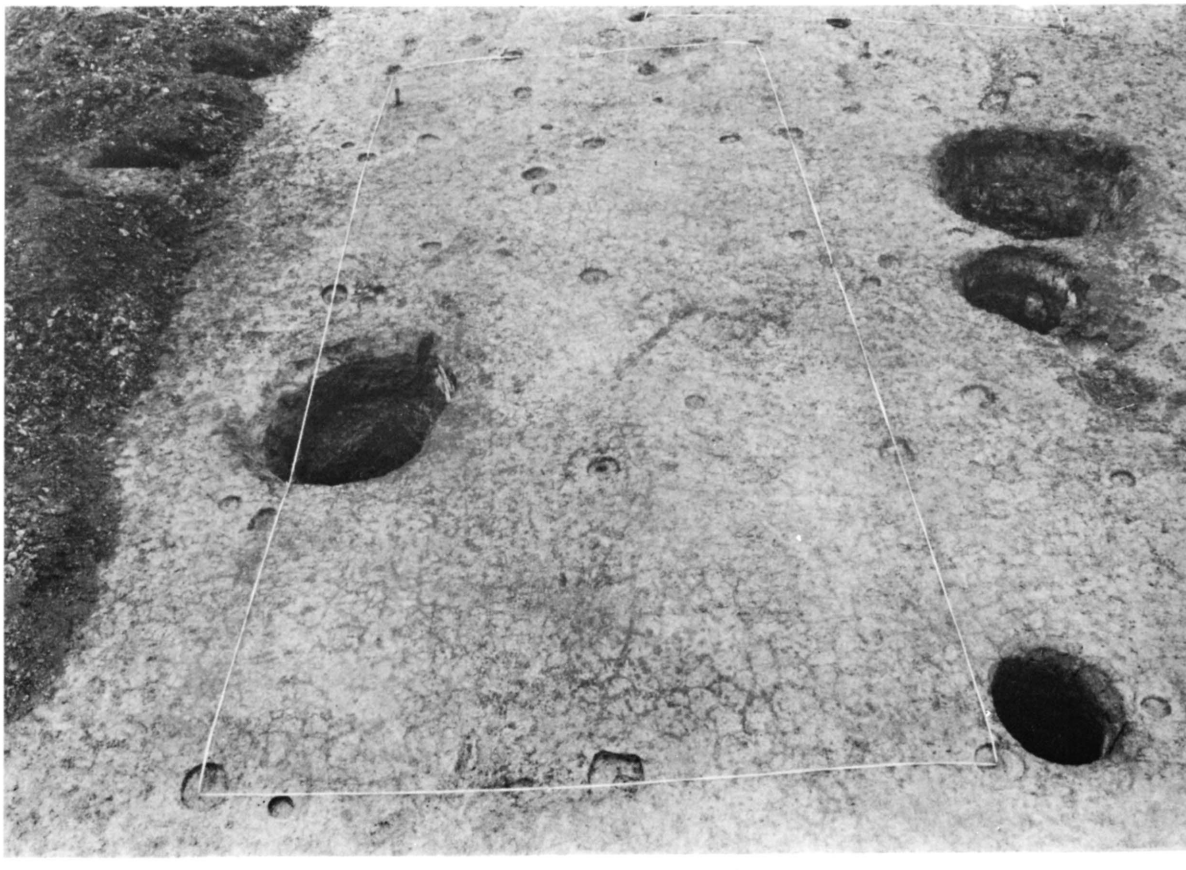
図版９　　上　ＳＢ26建物跡

下　ＳＢ27建物跡



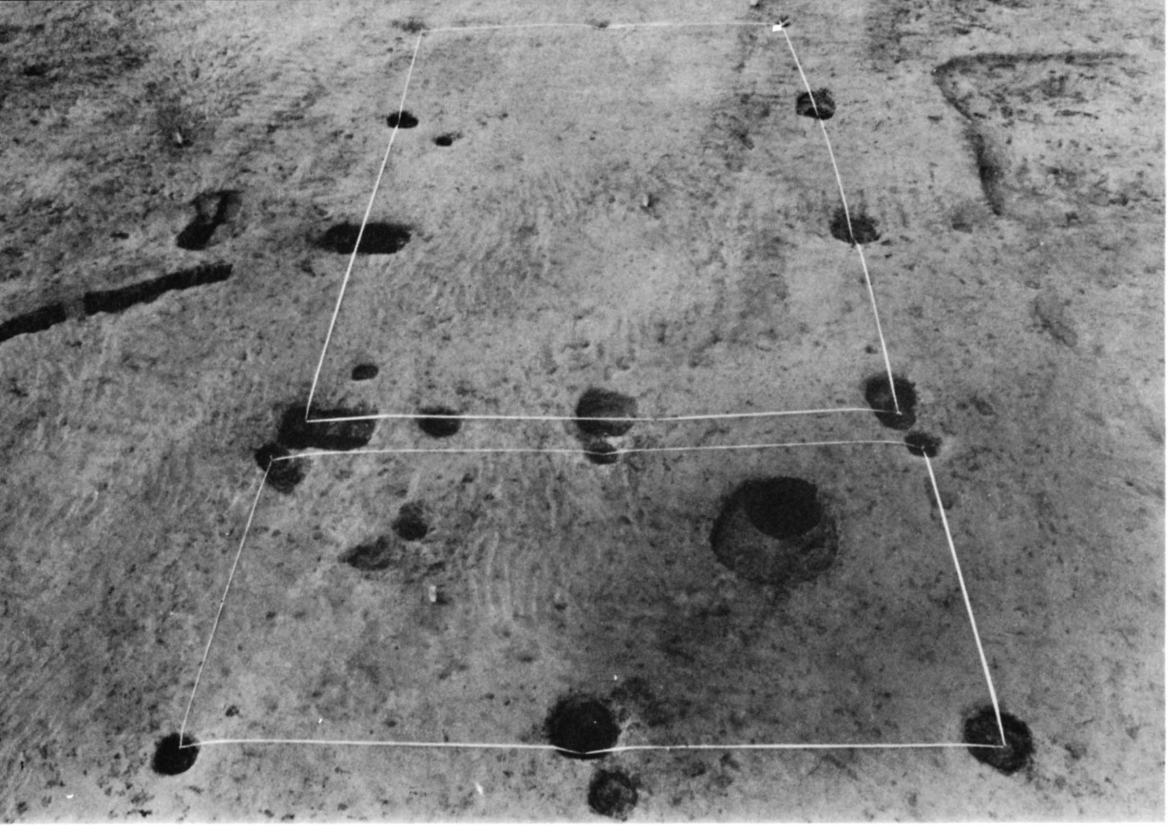
図版10　上　SB28建物跡

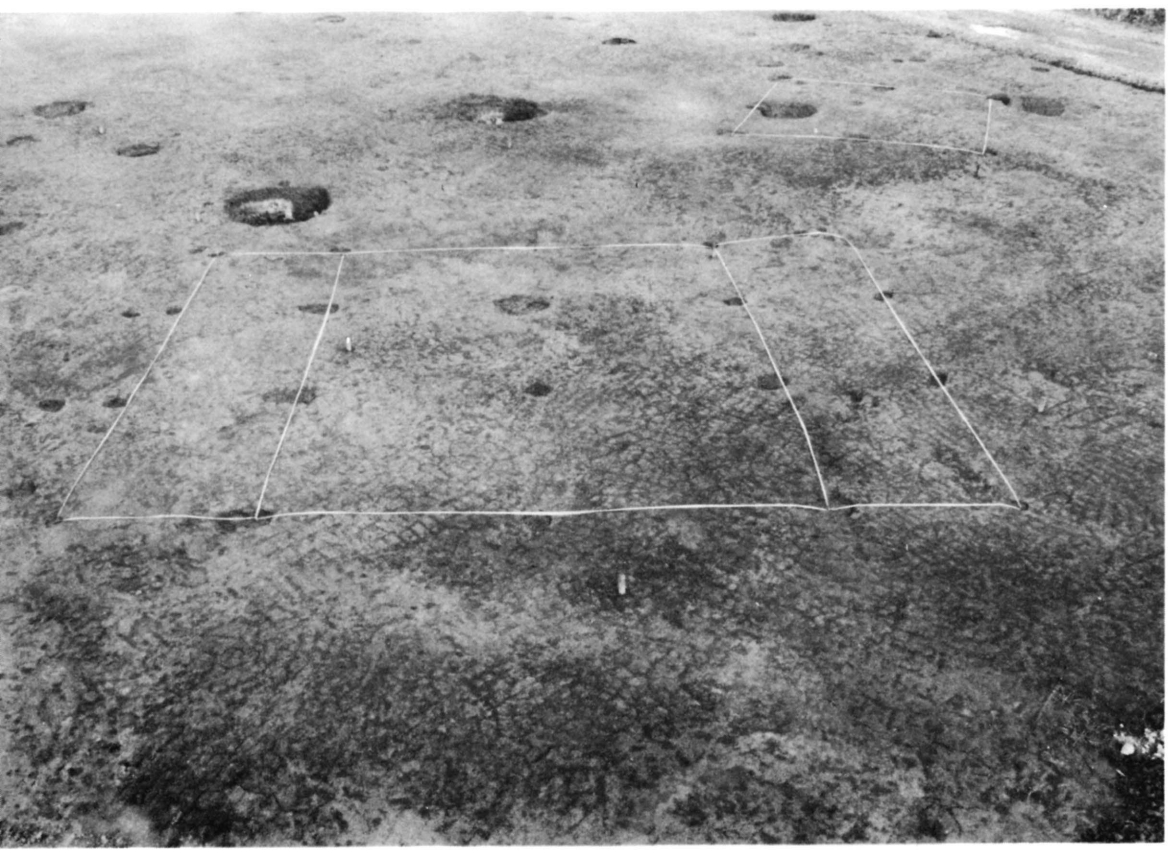
下　SB31～33建物跡



図版11　上　SB34建物跡

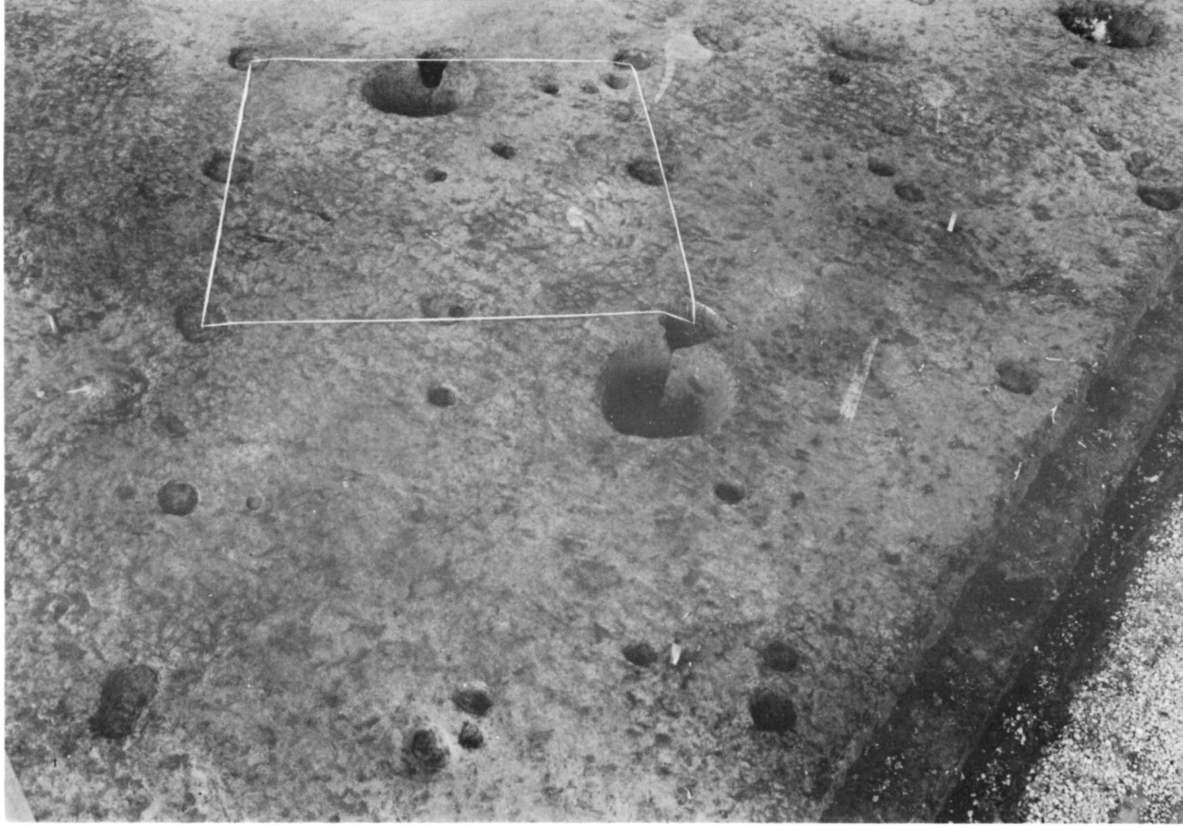
下　SB35建物跡





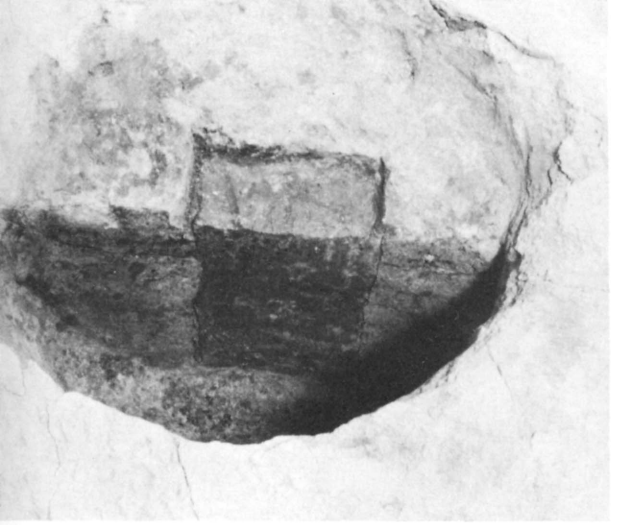
図版12　上　ＳＢ36建物跡

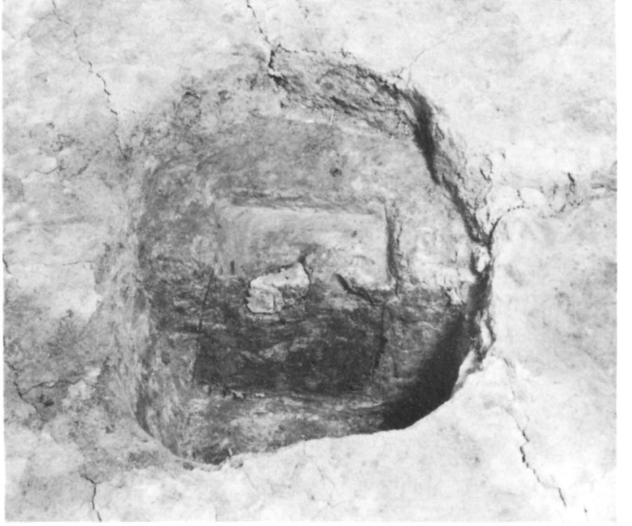
下　ＳＢ39建物跡

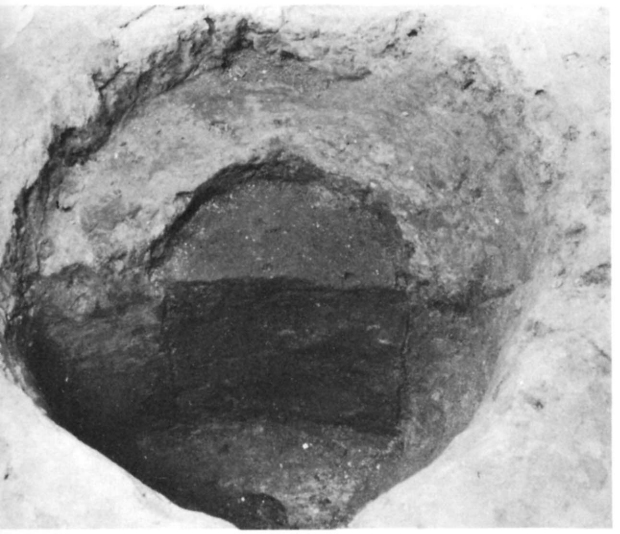


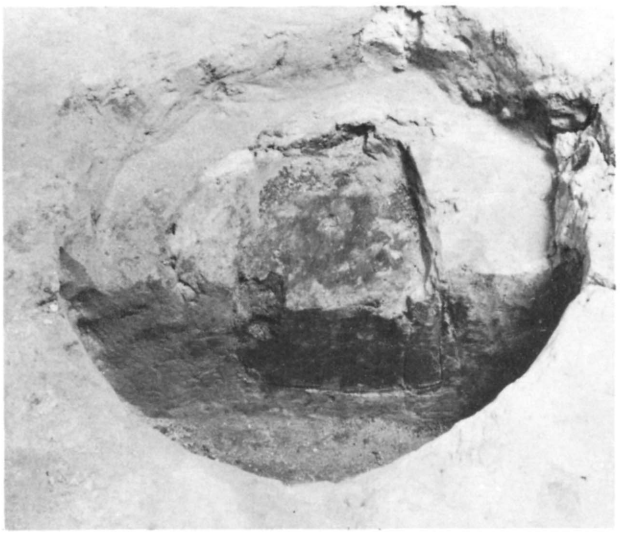
図版13　上　SB40建物跡

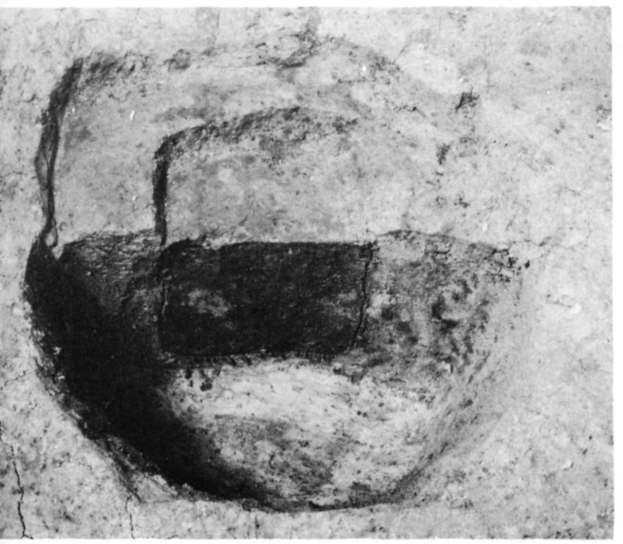
下　SB41建物跡

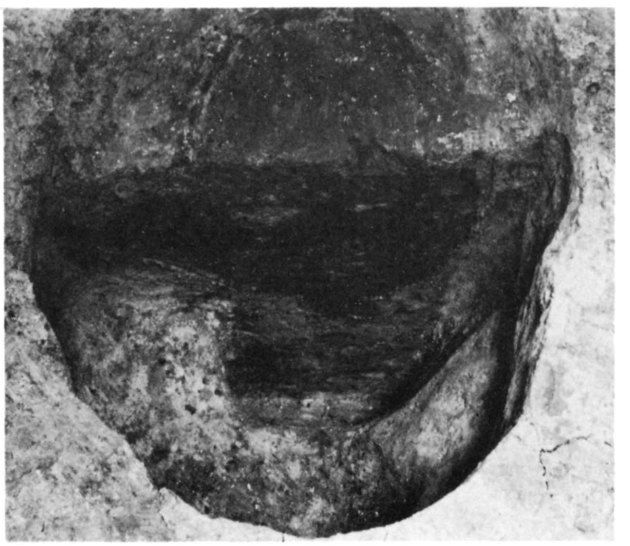








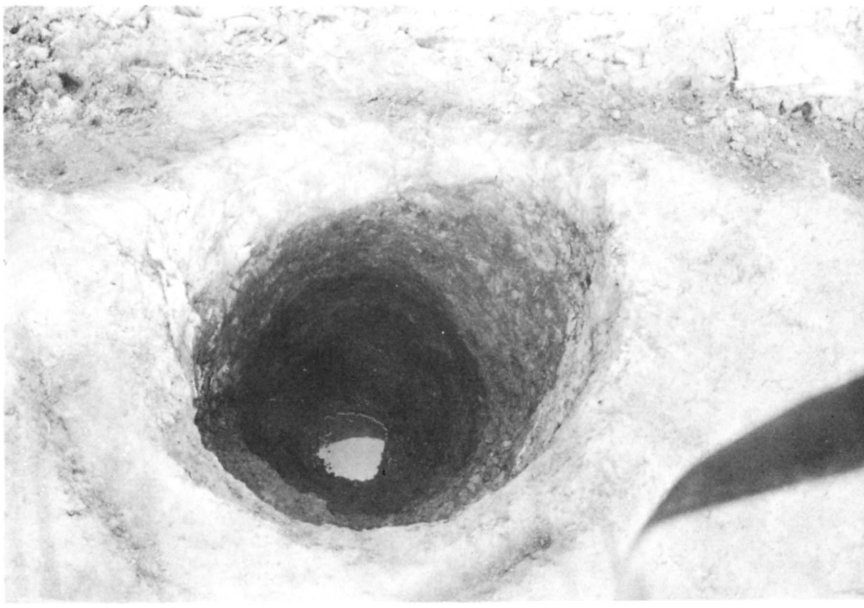


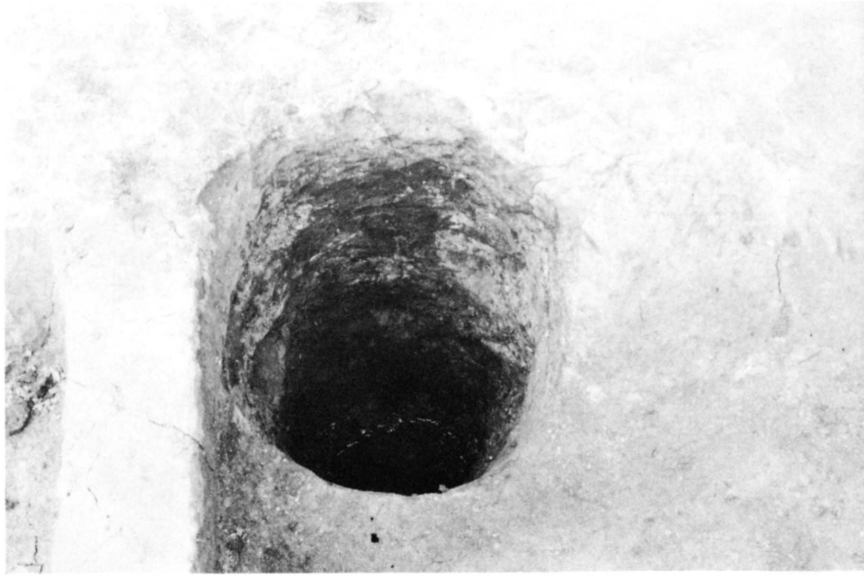


図版14　上　SB 1 建物跡掘り方断面　　上　SB 2 建物跡掘り方断面

中　SB 9 建物跡　〃　　中　SB12建物跡　〃

下　SB27建物跡　〃　　下　SB30建物跡　〃





図版15　　SE１井戸跡　　SE２井戸跡　　SE４井戸跡

図版16　上　ＳＥ３井戸跡

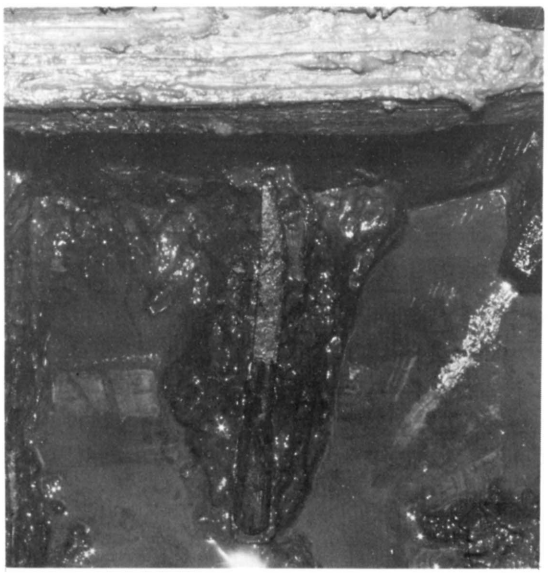
下　ＳＥ３井戸跡 井側（東）

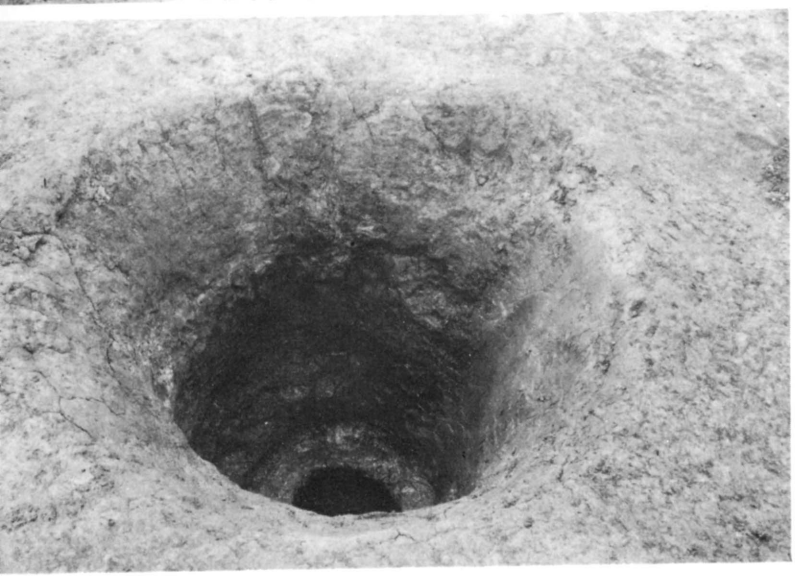
図版17

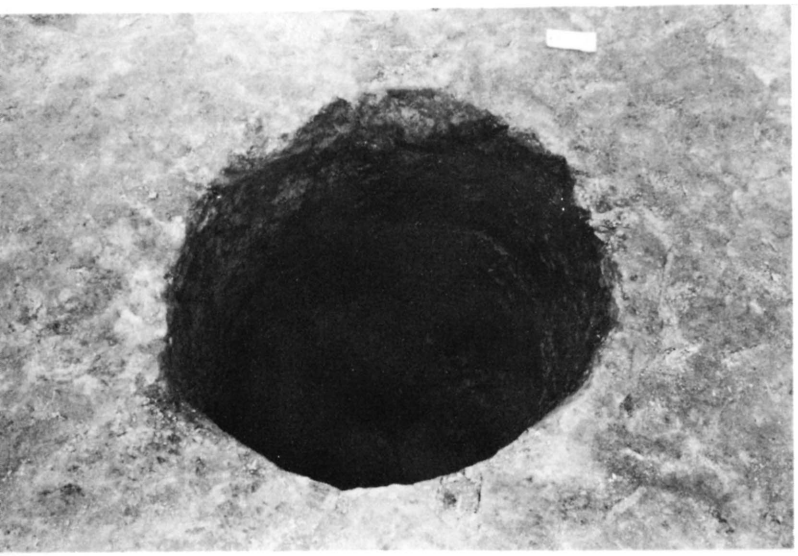
上　ＳＥ３井戸跡
掘り方断面と井側

下　左　ＳＥ３井戸跡
小刀出土状況

右　ＳＥ３井戸跡
漆器出土状況



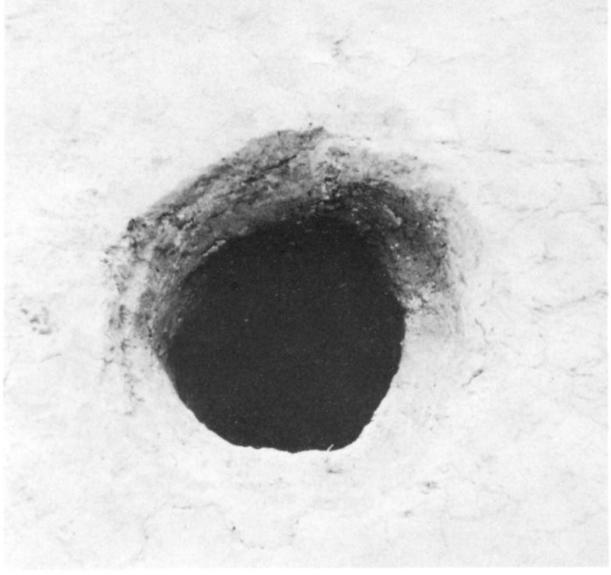


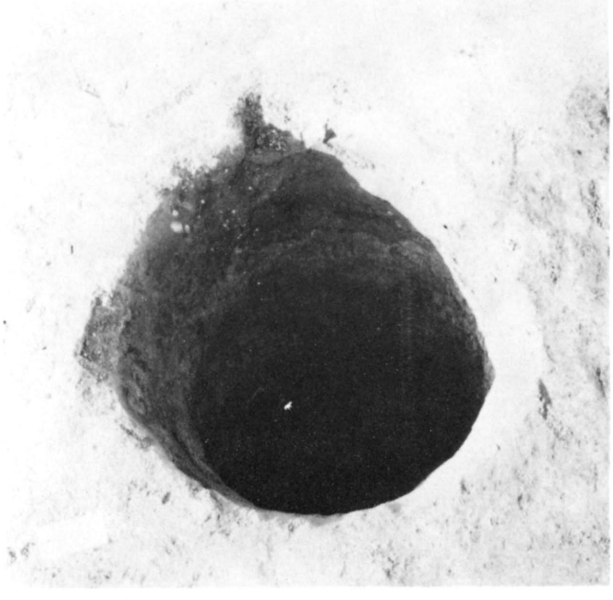


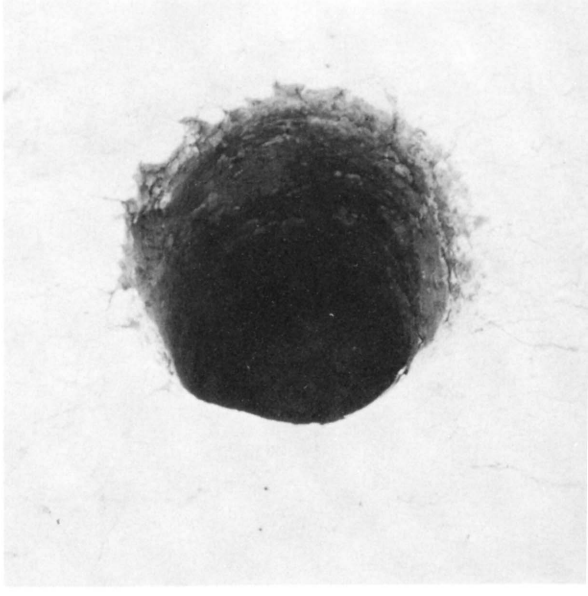
上　左　SE５井戸跡
　　右　〃
　　曲物出土状況

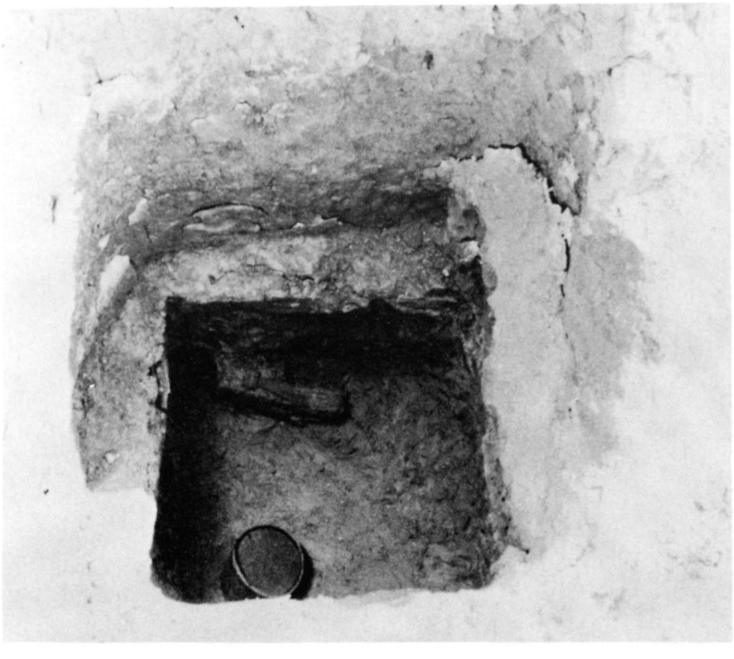
中　SE10井戸跡

下　SE11井戸跡







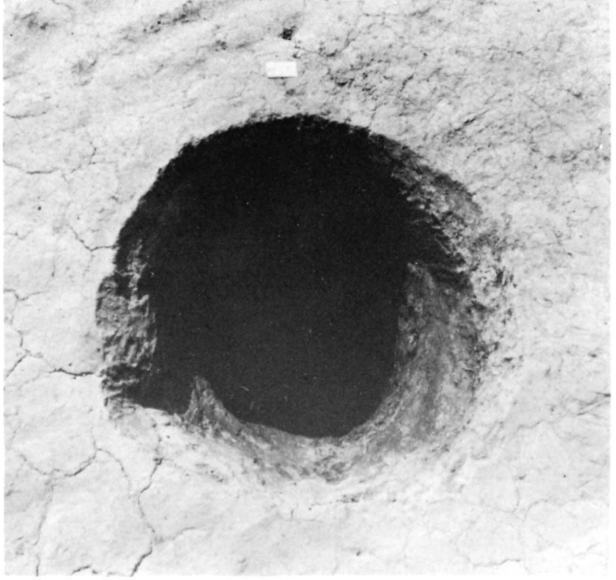


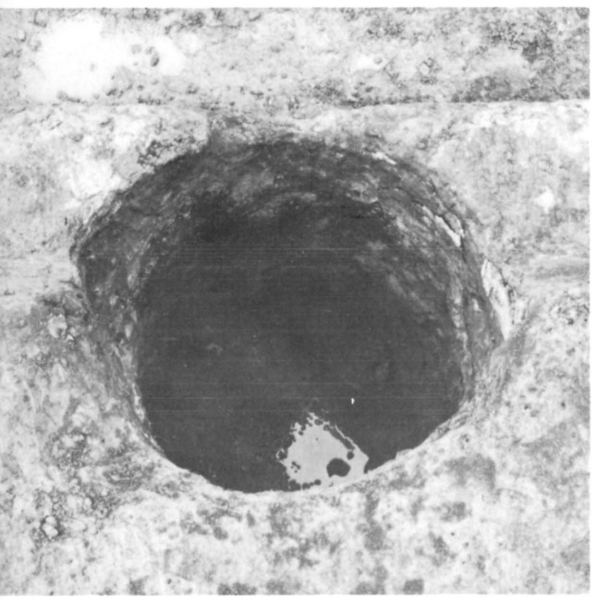
上　左　ＳＥ12井戸跡
　　右　ＳＥ16井戸跡

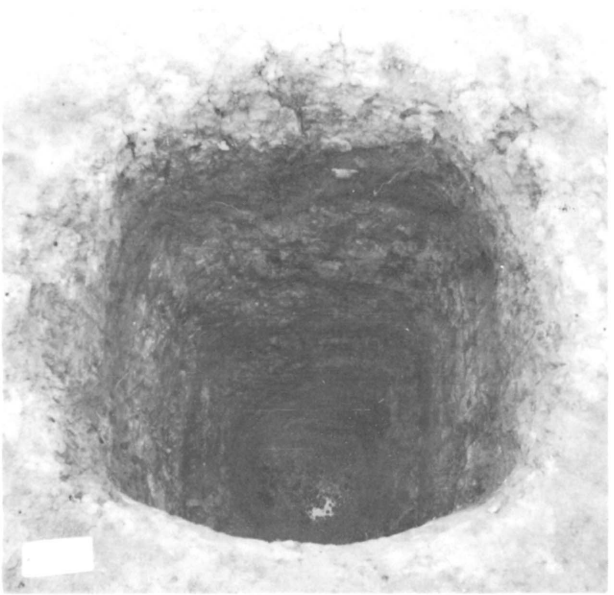
中　左　ＳＥ19井戸跡
　　右　ＳＥ20井戸跡

下　ＳＥ22井戸跡
　　曲物出土状況

図版19







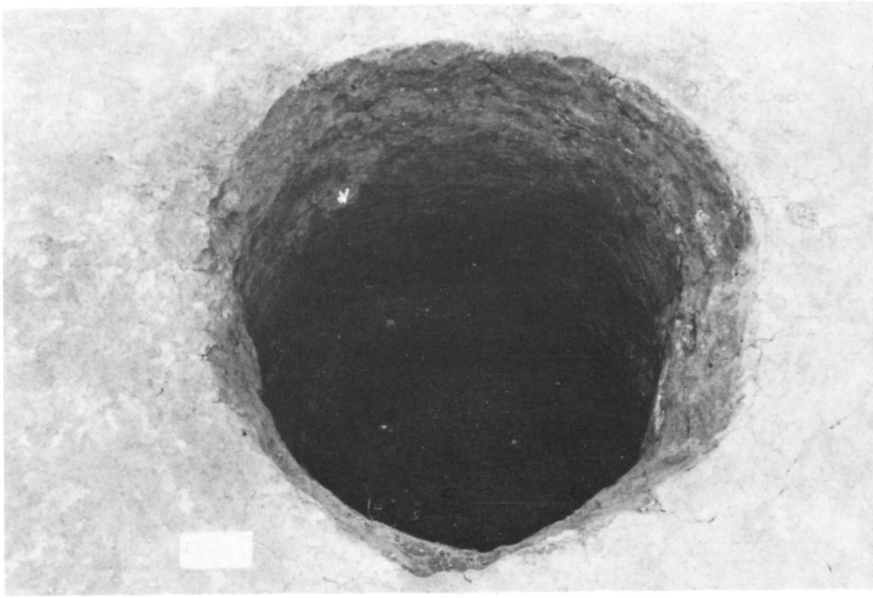
図版20

上　左　SE23井戸跡
　　右　SE24井戸跡

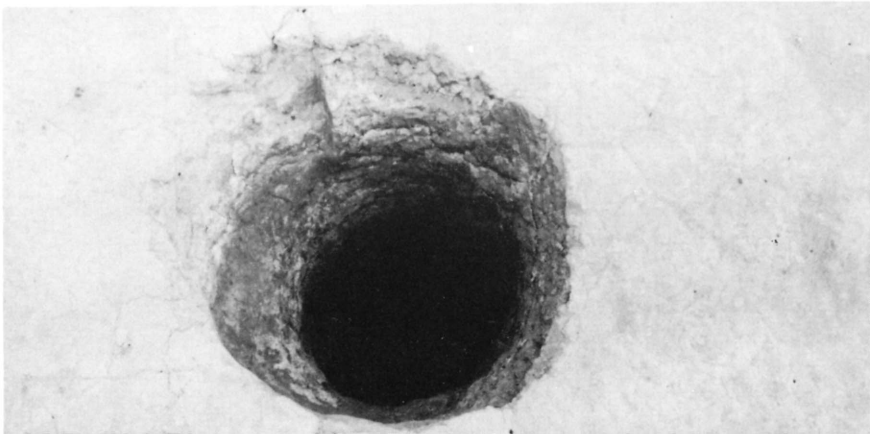
中　左　SE26井戸跡
　　右　SE27井戸跡

下　SE29井戸跡

上　ＳＥ32井戸跡
　　曲物出土状況



ＳＥ33井戸跡



ＳＥ36井戸跡

図版21

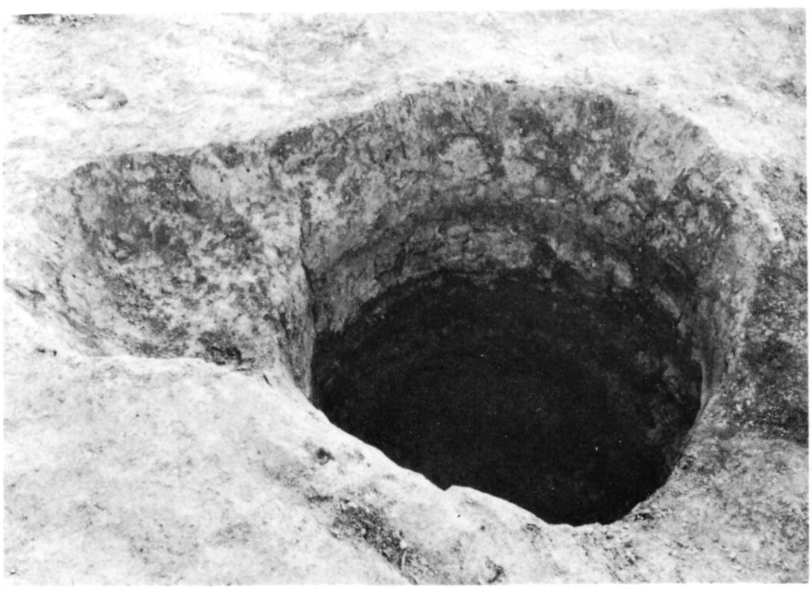
図版22　上　SE40井戸跡

下　SE40井戸跡掘り方断面と井側

図版23

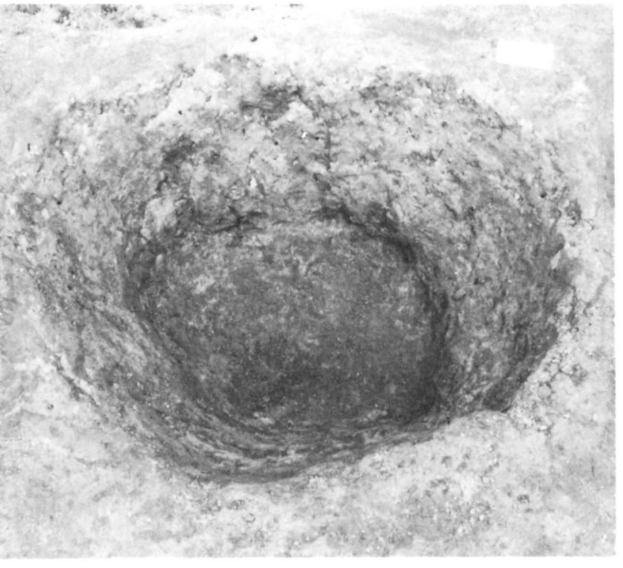
上　ＳＥ40井戸跡
　　掘り方断面と井側

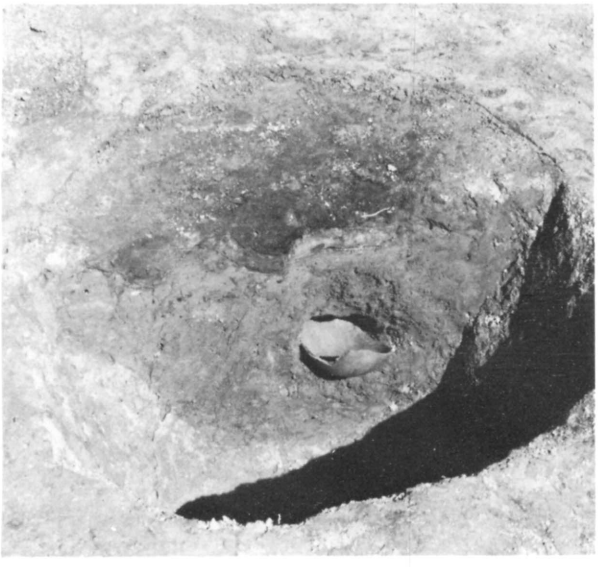
下　左　ＳＥ43井戸跡
　　右　ＳＥ47井戸跡

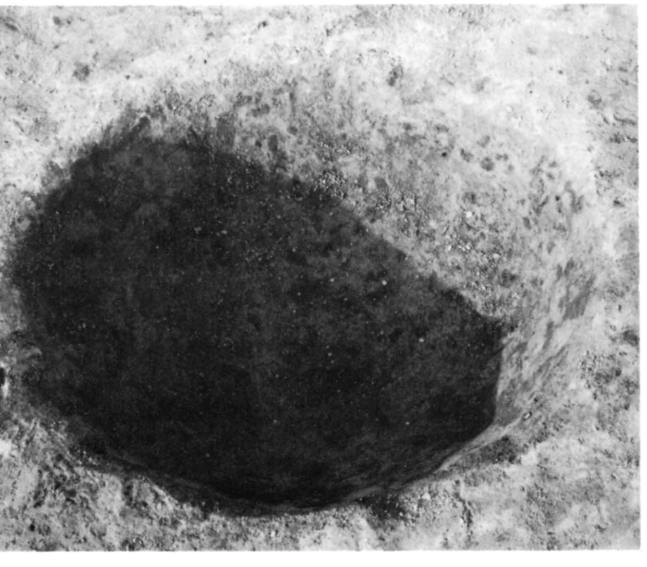


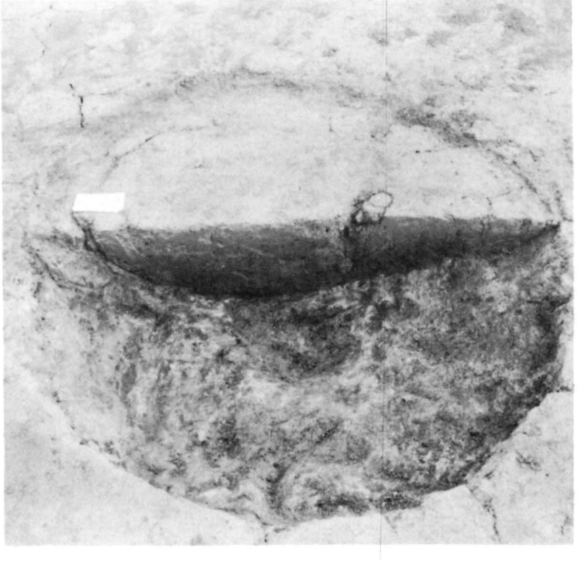
SE48井戸跡

SE51井戸跡









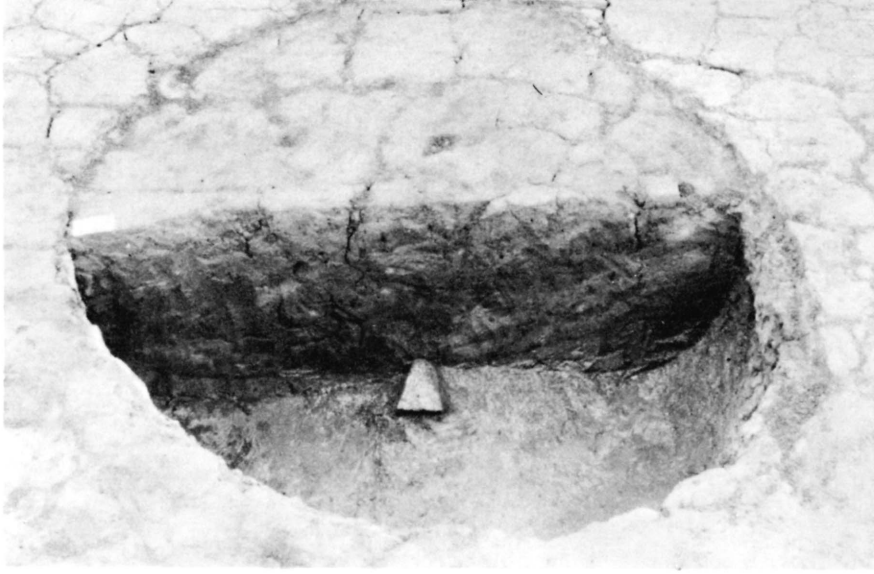
上　SK1土　坑

下　SK5土　坑

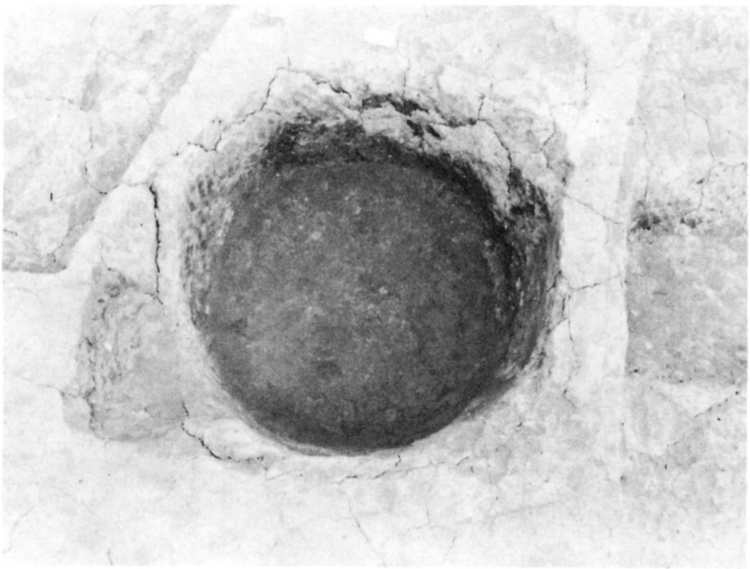
図版24

上

下　SK7土　坑



SK9 土　坑

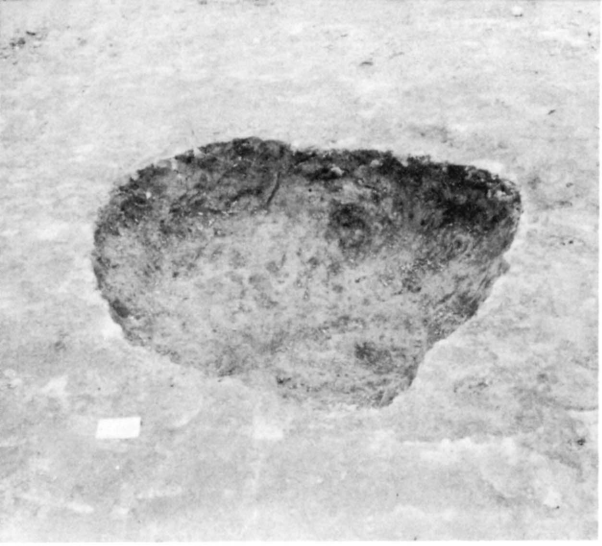


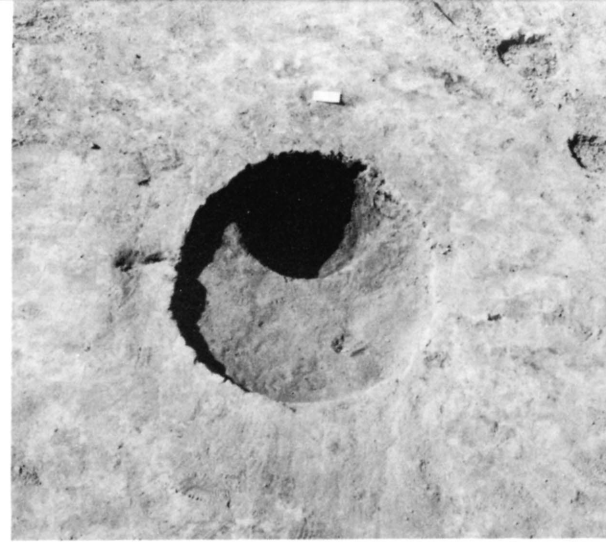
SK8 土　坑

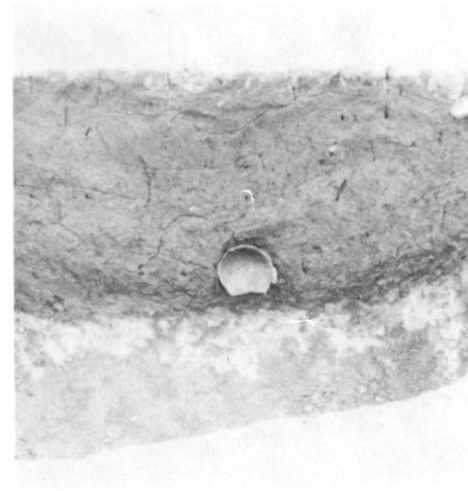
上　SK11 土　坑

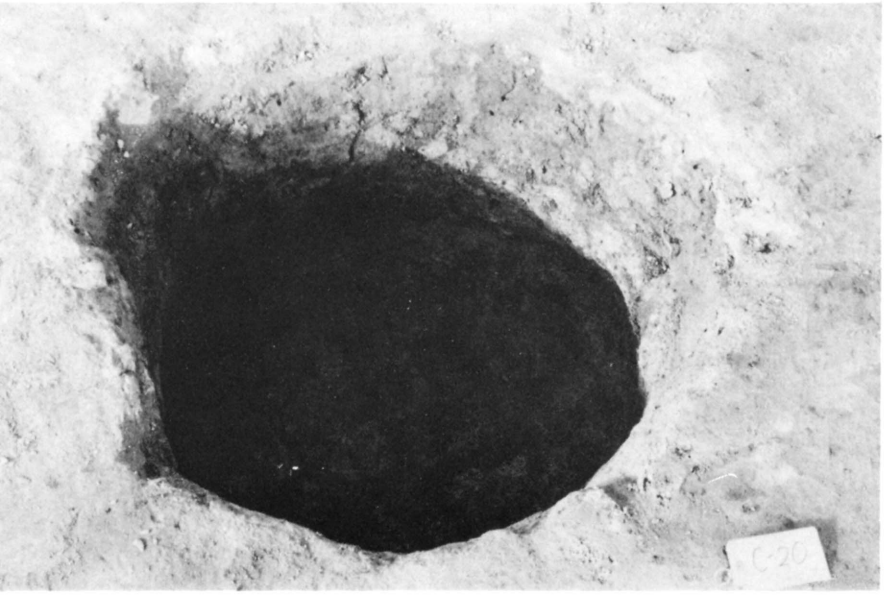
下　SK12 土　坑

図版25









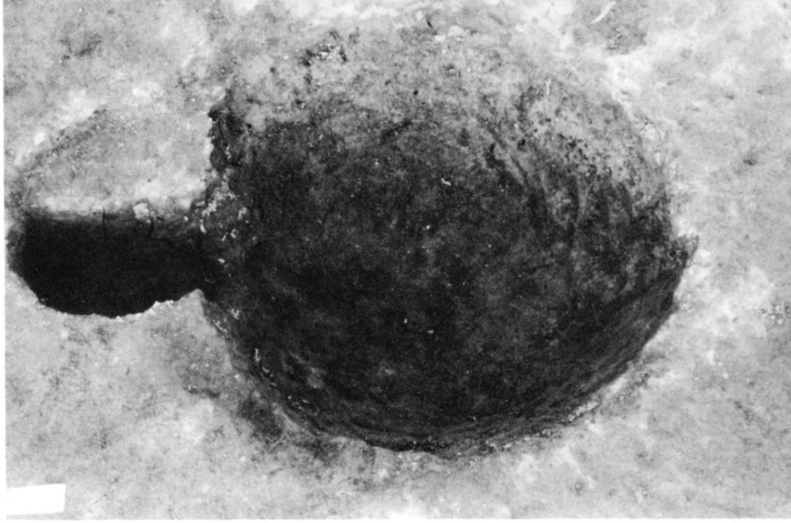
上　左　SK18 土　坑
　　右　SK19 土　坑

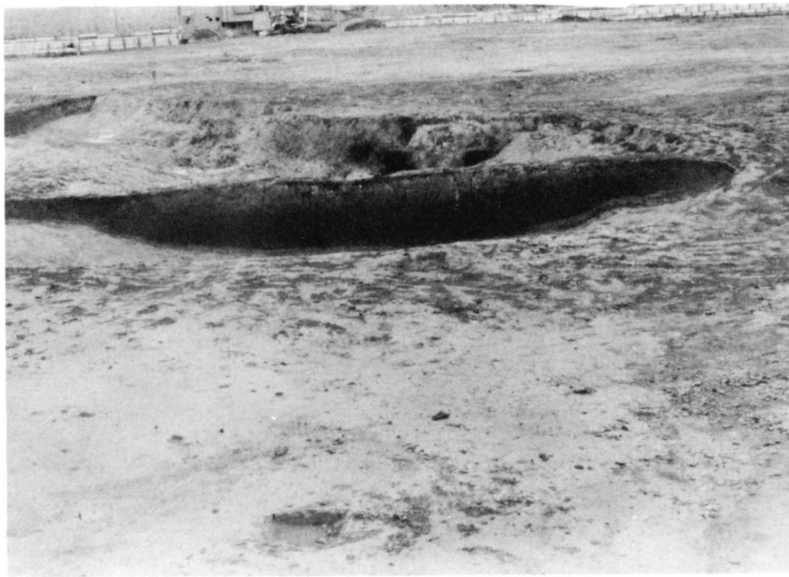
中　左　SK20 土　坑
　　右　〃
　　遺物出土状況

下　SK21 土　坑

図版26

図版27





上　SK28 土　坑

中　SK31 土　坑

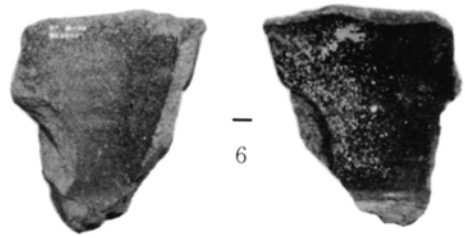
下　左　SD16溝跡
　　掘り方断面
　　右　SD16溝跡

1

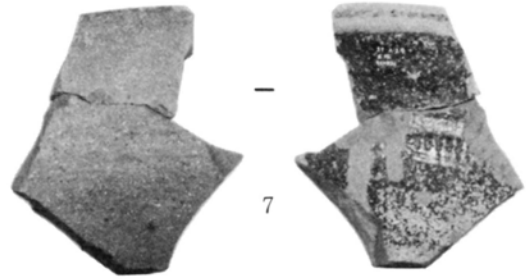
2

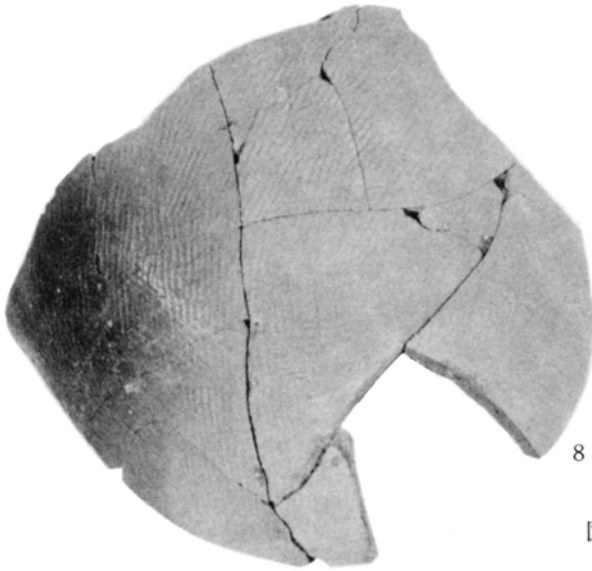
3

5

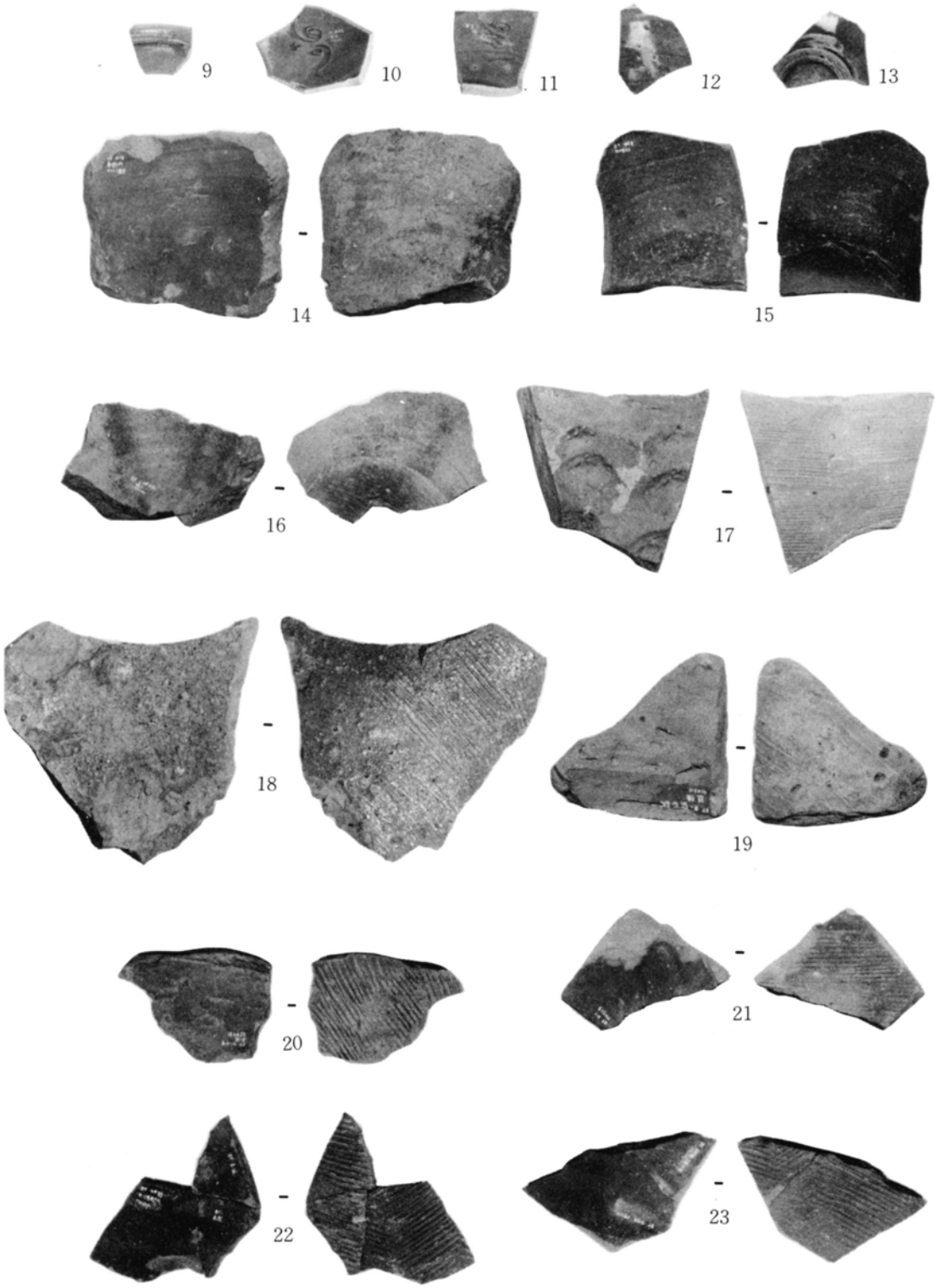

6

4

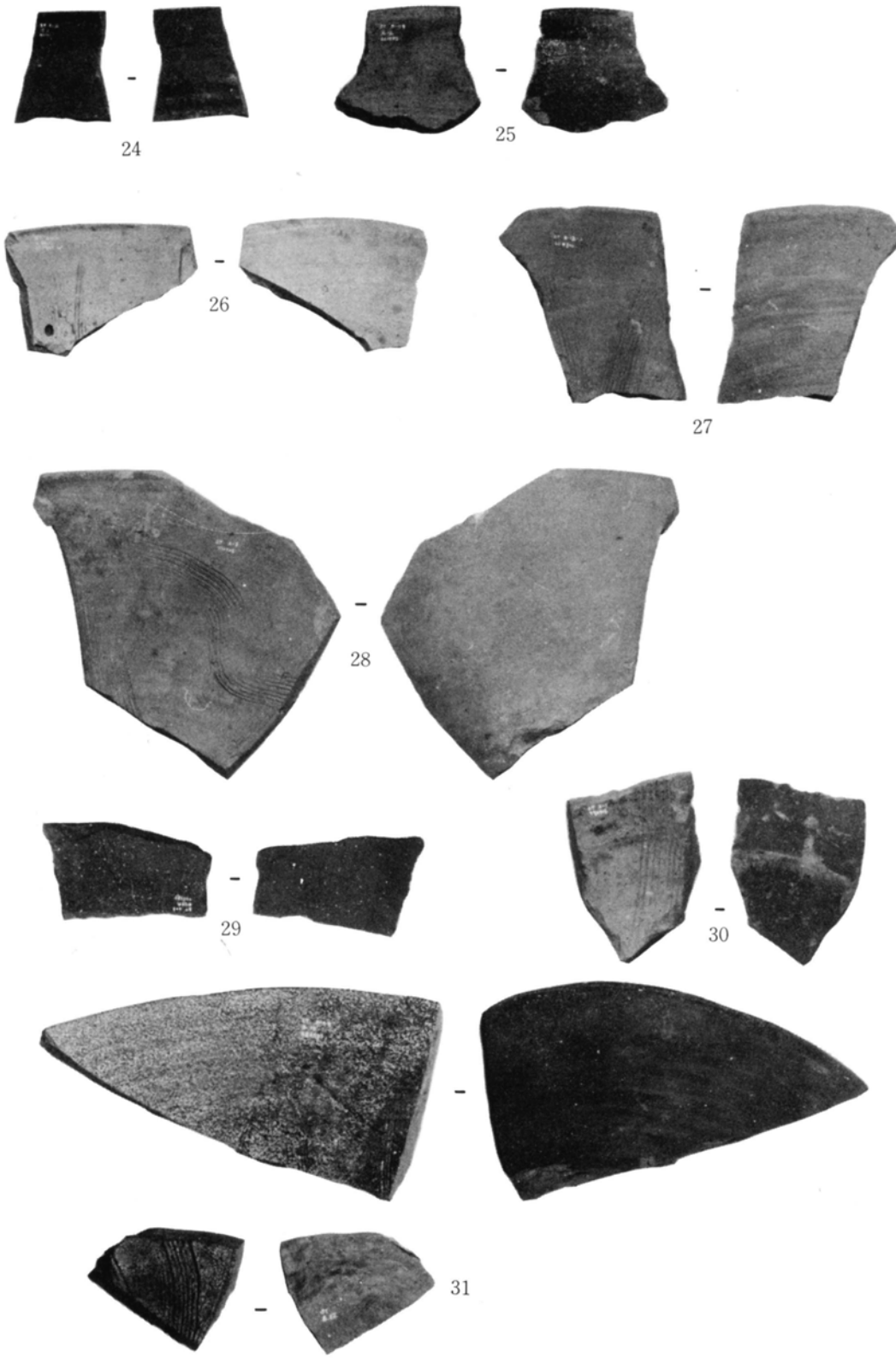

7


8

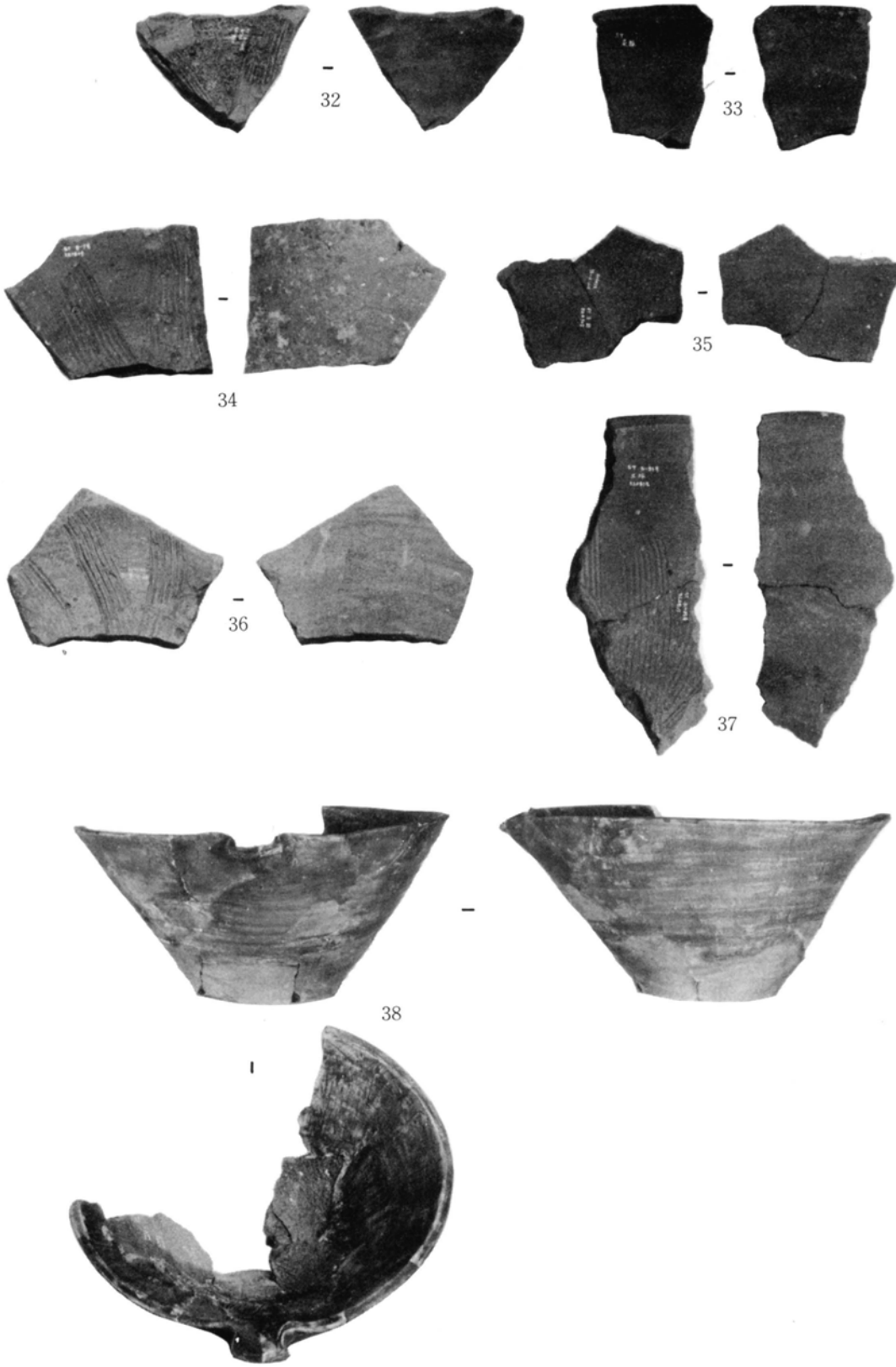
図版28　赤褐色土器・須恵器



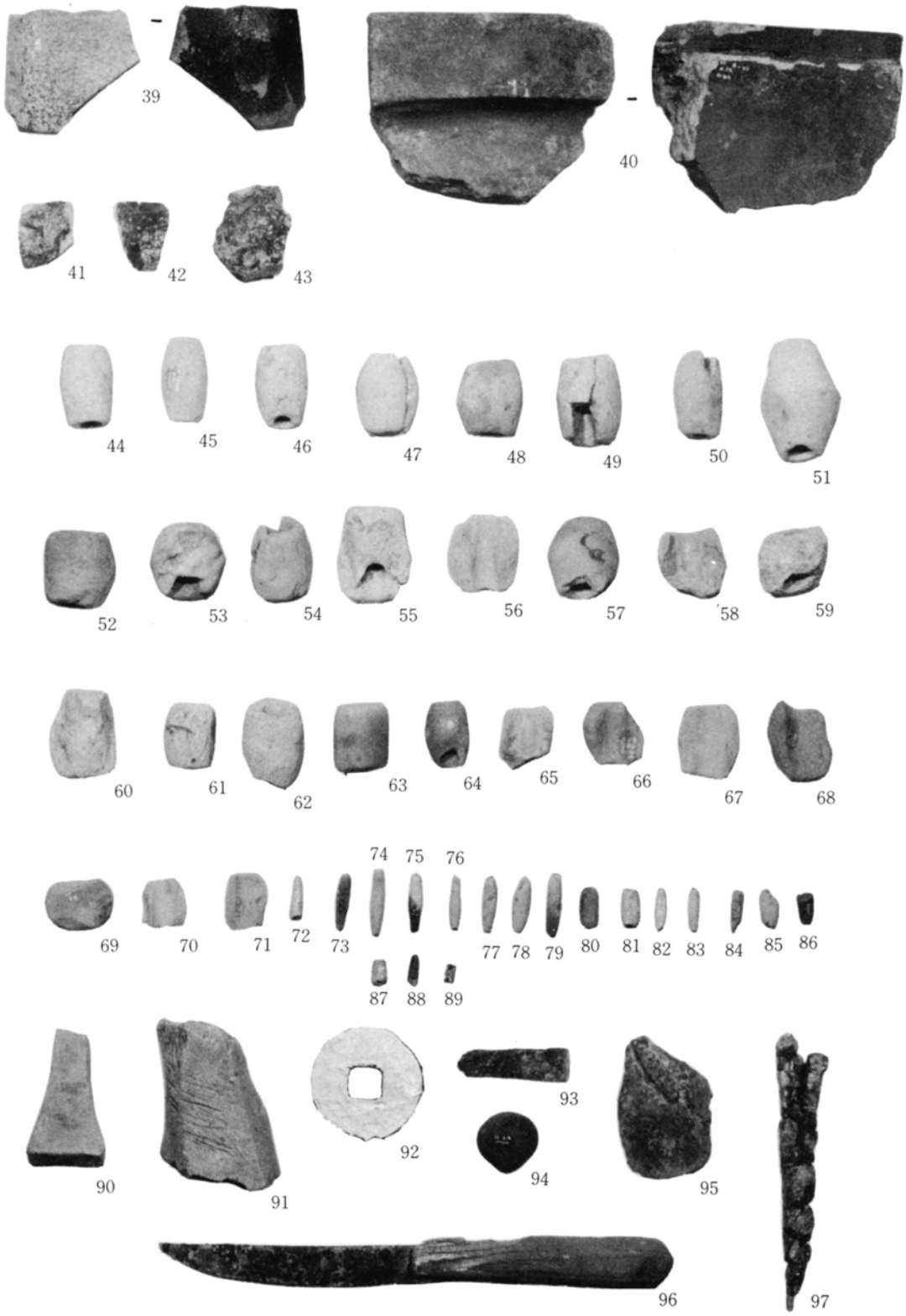
図版29　青磁・中世陶器壺，甕



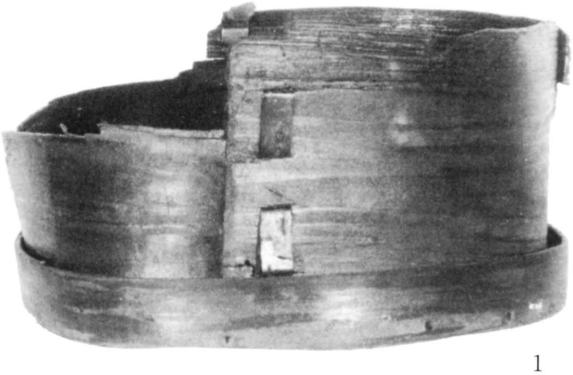
図版30　　中世陶器片口鉢



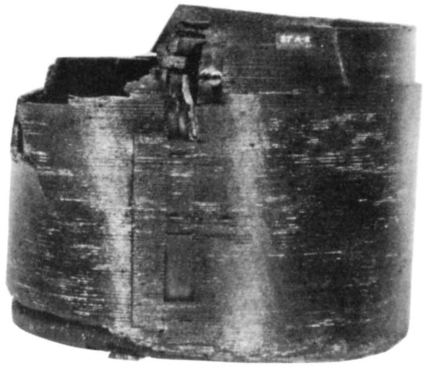
図版31　　中世陶器片口鉢



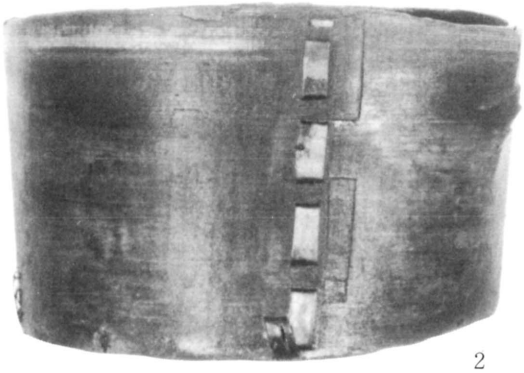
図版32　その他の出土遺物



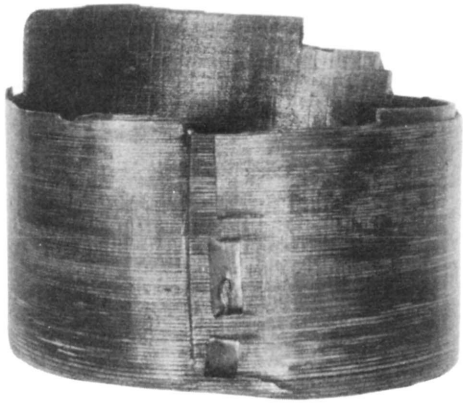
1



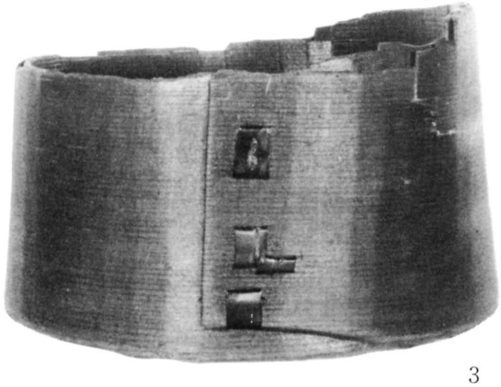
4



2



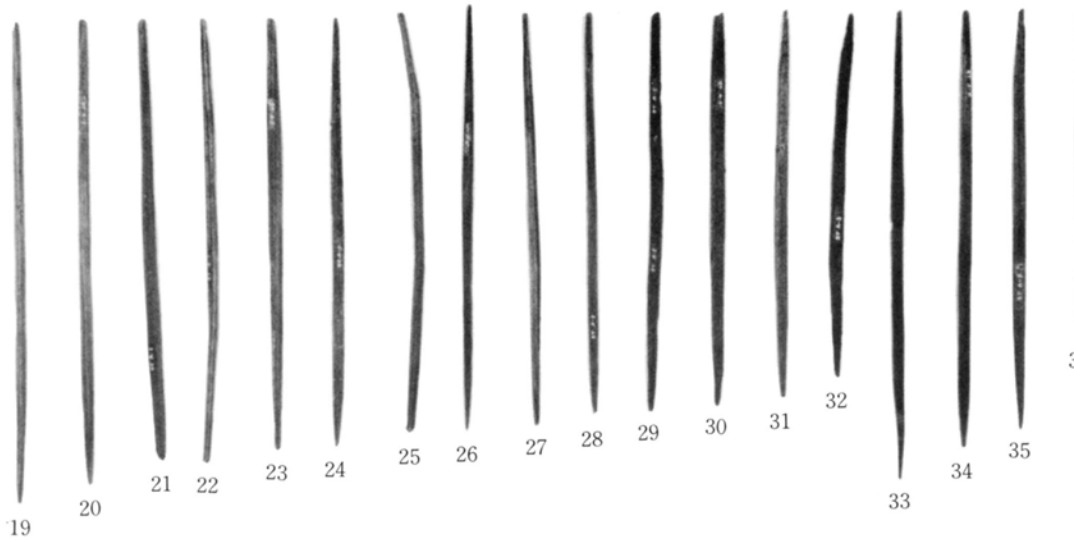
5

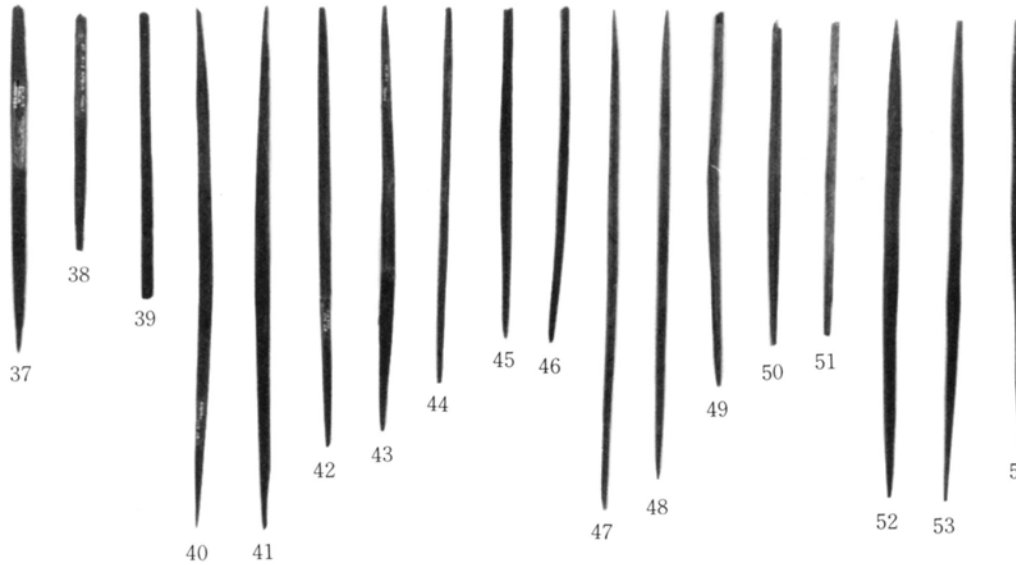


3

図版33

図版34


19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

55

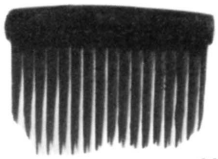
56

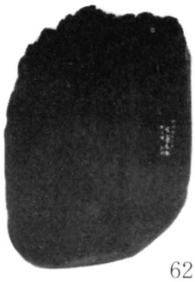
57

図版35

58

59


60


62

63

61

64

65

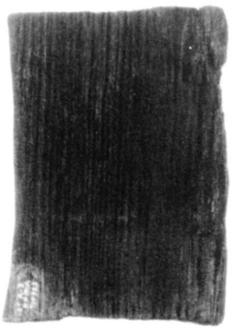
66

67

68

69

70


71

72

図版36

図版37

下夕野遺跡発掘調査報告書

昭和54年11月20日　印刷・発行

発　行　秋田市都市開発部
　　秋田市教育委員会
印　刷　秋田マイクロ写真印刷(株)